

比 恵 58

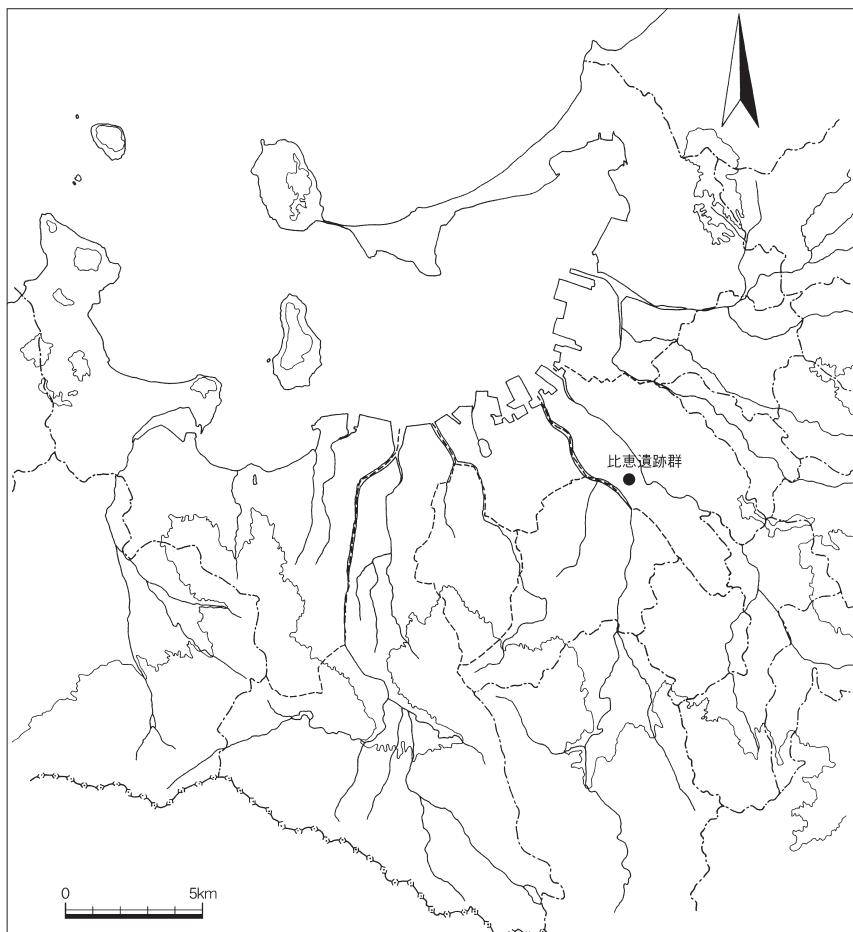
－比恵遺跡群第115次調査報告－

2010

福岡市教育委員会

比 恵 58

－比恵遺跡群第115次調査報告－



遺跡略号 HIE-115
調査番号 0818

2010

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群第115次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで株式会社アーバンコーポレーションをはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成22年3月23日
福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成20年度に博多区博多駅南3丁目60番ほか10筆において実施した比恵遺跡群第115次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、板倉有大が行った。
3. 遺物の実測は長家、大庭友子が行った。
4. 製図は長家・大庭が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から 6° 西偏し、真北から $6^{\circ}18'$ 西偏する。なお座標は特に断らない限り日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居跡（SC）、貯蔵穴（SU）、井戸（SE）、土坑（SK）、周溝状遺構・溝（SD）、ピット（SP）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0818		遺　跡　略　号	HIE-115	
所　在　地	博多区博多駅南3丁目60番ほか10筆		分布地図番号	37-0127	
開　発　面　積	1,021.87m ²	調査対象面積	900m ²	調　査　面　積	755m ²
調　査　期　間	平成20年7月2日～平成20年10月2日		事前審査番号	20-2-40	

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	1
II	調査の記録	2
1	立地と周辺の調査	2
2	調査概要	2
3	遺構と遺物	8
1)	豎穴住居跡	8
2)	貯蔵穴	17
3)	井戸	26
4)	土坑	26
5)	周溝状遺構	31
6)	溝	33
7)	ピット及びその他の遺物	50
8)	包含層	50
9)	小結	50

挿図目次

第1図	調査区位置図1（1／50,000）	3
第2図	調査区位置図2（1／2,500）	4
第3図	調査区位置図3（1／500）	5
第4図	調査区全体図（1／200）	6
第5図	遺構配置図1及び調査区南壁土層図（1／200、1／80）	7
第6図	SC001・002及び出土遺物実測図（1／50、1／3）	9
第7図	SC009・010及び出土遺物実測図（1／50、1／2、1／3、1／4）	10
第8図	SC012・015・020及び出土遺物実測図（1／50、1／3）	12
第9図	SC030及び出土遺物実測図（1／20、1／50、1／2、1／3）	13
第10図	SC037・039・043及び出土遺物実測図（1／50、1／3）	14
第11図	SU011及び出土遺物実測図1（1／40、1／3）	16
第12図	SU011出土遺物実測図2（1／3）	17
第13図	SU011出土遺物実測図3（1／3）	18
第14図	SU019・025及び出土遺物実測図（1／40、1／3）	19
第15図	SU036及び出土遺物実測図（1／40、1／3）	20
第16図	SU038及び出土遺物実測図（1／40、1／3）	21
第17図	SU040・042及び出土遺物実測図（1／40、1／3）	23
第18図	SU045及び出土遺物実測図（1／40、1／3）	24
第19図	SU048・049及び出土遺物実測図（1／40、1／3）	25

第20図	SE024実測図（1／40）	26
第21図	SK003・004及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	27
第22図	SK008・014・018・026・027・028及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	28
第23図	SK0029・031・032・033・035・044及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	30
第24図	遺構配置図2（1／200）	32
第25図	SD022・023・050・051・052実測図（1／30）	33
第26図	SD005・006・007断面図及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	34
第27図	SD016土層図（1／50）	36
第28図	SD016出土遺物実測図1（1／2、1／3）	37
第29図	SD016出土遺物実測図2（1／3）	38
第30図	SD016出土遺物実測図3（1／3）	39
第31図	SD016出土遺物実測図4（1／3）	40
第32図	SD016出土遺物実測図5（1／3）	41
第33図	SD016出土遺物実測図6（1／2、1／4、1／12）	42
第34図	SD016出土遺物実測図7（1／2、1／3）	43
第35図	SD017断面図及び出土遺物実測図1（1／30、1／3）	44
第36図	SD017出土遺物実測図2（1／3）	45
第37図	SD021断面図及び出土遺物実測図（1／30、1／2、1／3）	46
第38図	SD034・041断面図及び出土遺物実測図（1／30、1／2、1／3）	47
第39図	ピット及び出土遺物実測図（1／20、1／1、1／2、1／3）	48
第40図	包含層出土遺物実測図（1／2、1／3）	49

写真目次

写真1	調査風景	1
写真2	SU011出土焼土塊	18
写真3	SD016出土焼土塊	41
写真4	1区全景（南西から）	51
写真5	2区全景（南から）	51
写真6	3区全景（南西から）	52
写真7	4区全景（北東から）	52
写真8	調査区南壁土層	53
写真9	谷部土層	53
写真10	SC001（東から）	53
写真11	SC002（北東から）	53
写真12	SC009（北から）	53
写真13	SC010（北西から）	53

写真14	SC012（西から）	54
写真15	SC015（北西から）	54
写真16	SC020（東から）	54
写真17	4区検出SC030（南西から）	54
写真18	3区検出SC030（北西から）	54
写真19	SC030土層	54
写真20	SC030 P1（南西から）	55
写真21	SC030 P2土層	55
写真22	SC037（北から）	55
写真23	SC037、SU038・045土層	55
写真24	SC039（北西から）	55
写真25	SC043（北東から）	55
写真26	SU011（南西から）	56
写真27	SU011土層	56
写真28	SU019（北東から）	56
写真29	SU019土層	56
写真30	4区検出SU025（南西から）	56
写真31	SU025・040土層	56
写真32	SU036土層	57
写真33	SU038（北から）	57
写真34	SU038炭化米出土状況（北西から）	57
写真35	SU038壁面被熱痕跡	57
写真36	SU038土層	57
写真37	SU038 11層	57
写真38	SU040（北東から）	58
写真39	SU042（南東から）	58
写真40	SU045（北東から）	58
写真41	SU038・045土層	58
写真42	SU048（北から）	58
写真43	SU049（南から）	58
写真44	SE024（西から）	59
写真45	SE024土層	59
写真46	SK003（南から）	59
写真47	SK003土層	59
写真48	SK004西側土層	59
写真49	SK004土層	59
写真50	SK004立柱出土状況（北から）	60
写真51	SK004（北から）	60
写真52	SK004（東から）	60
写真53	SK004立柱状況（南から）	60

写真54	SK004立柱1	60
写真55	SK004立柱2	60
写真56	SK008（北西から）	61
写真57	SK014（東から）	61
写真58	SK018（北西から）	61
写真59	SK026～029・031（北から）	61
写真60	SK026（西から）	61
写真61	SK026土層	61
写真62	SK027（北東から）	62
写真63	SK028（北東から）	62
写真64	SK029（北東から）	62
写真65	SK031（西から）	62
写真66	SK032（西から）	62
写真67	SK033（南西から）	62
写真68	SK035（南西から）	63
写真69	SK044（南東から）	63
写真70	SD022・023（北から）	63
写真71	SD050・051・052（南西から）	63
写真72	SD005（北から）	63
写真73	SD006（西から）	63
写真74	SD007（南東から）	64
写真75	SD016（北西から）	64
写真76	SD016西壁土層	64
写真77	SD016中央土層	64
写真78	SD016南西半掘削後（南西から）	64
写真79	SD016南西半掘削後（東から）	64
写真80	SD016北東半（西から）	65
写真81	SD016遺物出土状況（153）	65
写真82	SD016遺物出土状況（156）	65
写真83	SD016遺物出土状況（195）	65
写真84	SD016遺物出土状況（196）	65
写真85	SD017（北西から）	65
写真86	SD041（南から）	66
写真87	SD034・041土層	66
写真88	SD041・SU042土層	66
写真89	SP220（北西から）	66
写真90	SP221（南西から）	66
写真91	SP222（北西から）	66

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成20年4月11日付けで株式会社アーバンコーポレイション 代表取締役房園博行氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区博多駅南3丁目60番ほか10筆の物件に関して、共同住宅建設に関する埋蔵文化財の有無について照会があった（事前審査番号20-2-40）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号37-0127・遺跡略号HIE）の範囲内にあるため、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者である株式会社アーバンコーポレイションの承諾を経て、平成20年5月8日に試掘調査を行い、ピット・包含層等の遺構を検出した。また、申請地の西側隣接地での比恵遺跡群第114次調査において本申請地に向かった大溝が確認されており、この延長部分が伸びてくるのは確実であった。これらの成果を受けて、埋蔵文化財第1課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い（平成20年5月14日付け、教理1第399号）、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建設予定建物の構造上、遺構の破壊が避けられないため、敷地1,021.87m²中共同住宅建設にかかる約900m²について、平成20年度に発掘調査、平成21年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成20年7月2日～平成20年10月2日である（調査番号0818）。調査面積は755m²、遺物はコンテナ85箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては株式会社アーバンコーポレイションをはじめ、関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制

事業主体 株式会社アーバンコーポレイション

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文課財第2課長 田中壽夫

調査第1係長 杉山富雄

調査庶務 文化財管理課 古賀とも子

調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 岩本三重子 野田順二 藤野幾志

西川吾郎 鈴野正夫 梨野孝子

中島道夫 前田和之 原田浩

山中征生 脇田誠二 斎馨純子

永田豊彦 藤村正勝 近藤英彦

坂口壽美子 富岡洋子 濱口長治

山下直美 結城敦雄 山下美枝子

渡辺律子 中村伊伸



写真1 調査風景

II 調査の記録

1 立地と周辺の調査

比恵遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火碎流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。南側に隣接する那珂遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北約2.4km、東西約1kmに及び、今回の対象地はこの丘陵の北側先端部分にあたる。

比恵遺跡群の北側部分は幅50m程度の河川流路により南側の丘陵本体から切り離されていることが知られている。また、丘陵の北端部は博多遺跡群が立地する砂丘の後背湿地に面しており、大きく2列の尾根が伸びていることが明らかとなっている。

この地点の調査は比較的多くの箇所で行われている。根元部分にあたる南側では30・31・37・90・110次が主な調査区である。30・31・37次地点では弥生時代前期中頃～末の貯蔵穴がまとまり、東側の90・110次地点ではほぼ同時期の竪穴住居跡群が確認されている。また中期後半～末にかけての竪穴住居跡・井戸・溝・土坑も展開している。また古墳時代前期の竪穴住居跡・溝・土坑も確認されているが、古墳時代後期・奈良時代の遺構もごく少数ながら残っている。

二股に分かれた2列の丘陵のうち西側では、先端部分の98次で低地に向かう緩斜面が残り、弥生時代前期の竪穴住居跡・貯蔵穴・土坑を検出している。28次では前期の土坑・貯蔵穴、中期の甕棺墓がある。4次では西側の低地に包含層を確認し、前期の水田を検出した。前期～中期前半には貯蔵穴も存在する。また、中期前半～末にかけての甕棺墓12基がまとまり、28次とあわせて2箇所の墓域が確認できる。古墳時代には水路が開削されており、粗砂の堆積から短期間に埋没したことをうかがうことができる。26・85次でも弥生時代前期の竪穴住居跡・溝・土坑のほかに弥生時代終末以降の溜池状遺構を検出している。

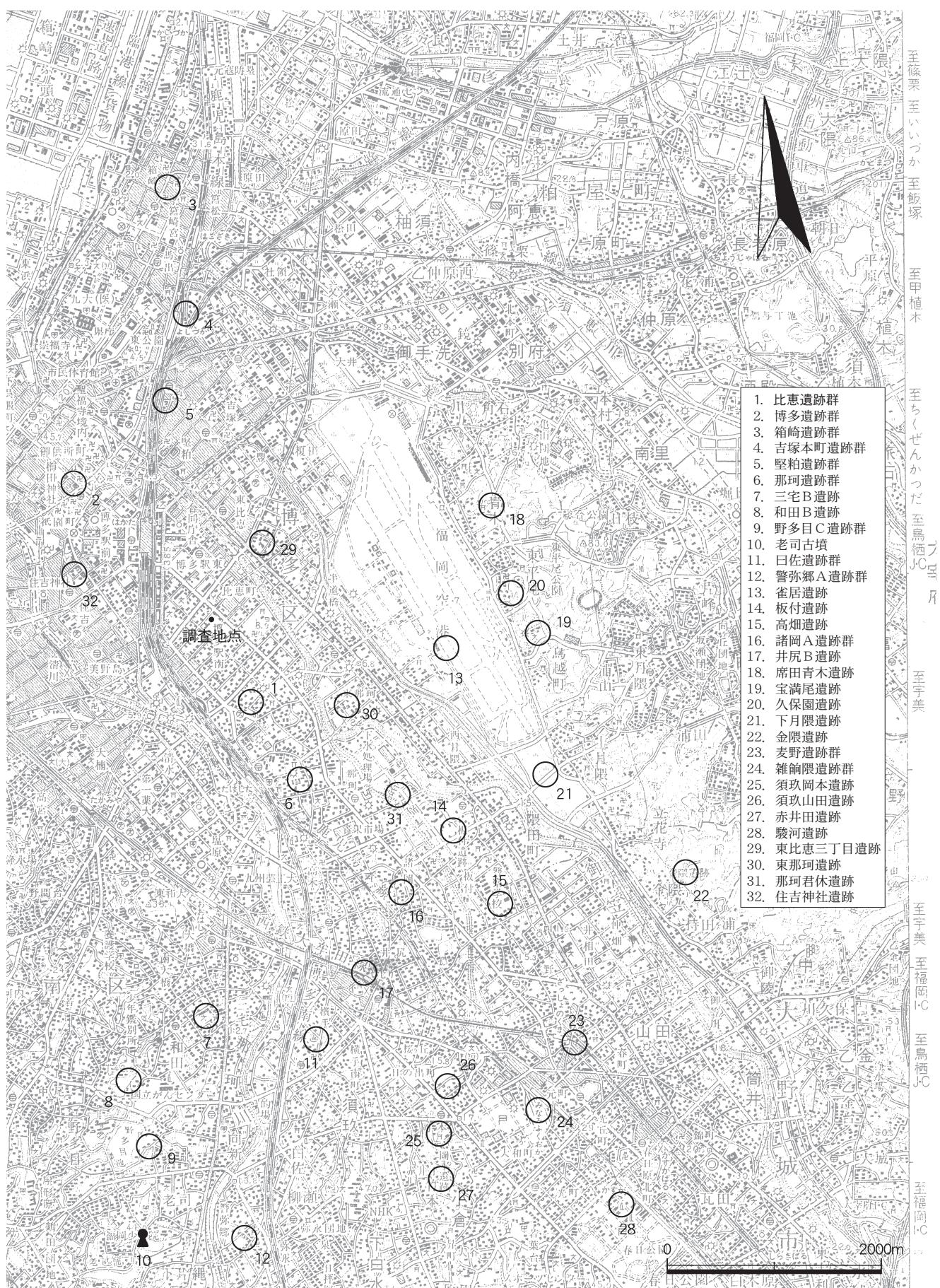
東側の丘陵部では先端の29次調査で中期の土坑とともに北側の低地部への傾斜を確認した。この斜面には弥生時代中期後半までの包含層が形成されている。

2列の丘陵間には幅30m程の谷部が存在し、ここに包含層が形成されており、24・25・32・80次の調査地点で多量の土器・石器・木器が出土している。谷中央部の80次調査では丘陵遺構面と谷部基底面の比高差は1.5mほどであることが判明し、この谷部が浅く平坦なものであると想定されている。埋没土上層には弥生時代後期の遺物が含まれているが、大半は弥生時代前期中頃～中期初頭に埋没したものである。またこの谷部周囲にも弥生時代前期竪穴住居跡・土坑が確認されている。

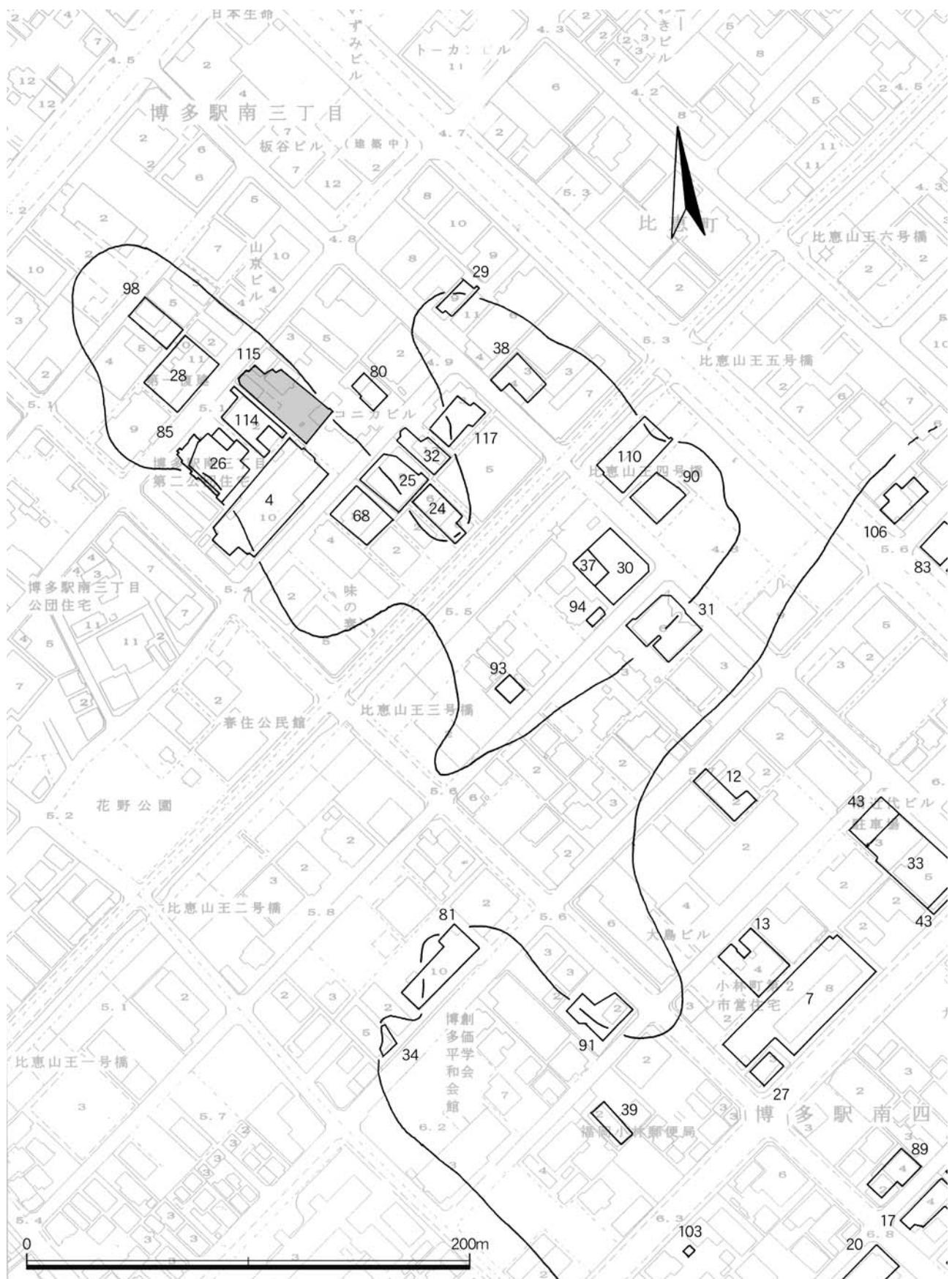
以上のように比恵遺跡群丘陵北側部分は弥生時代前期中頃～中期の遺構・遺物が主体を占めており、谷部に投棄された豊富な遺物からもそれをうかがうことができる。また、中期前半～後半代にかけては北西側に墓域が形成され、南東部分が生活域として使用されていたようである。谷部の大半が埋没した後の古墳時代前期には流路が開削され丘陵を横断した配水が行われている。また、明瞭な遺構がほとんど認められなくなる古代以降は広域な水田域の一部として取り込まれたものと考えられる。

2 調査概要

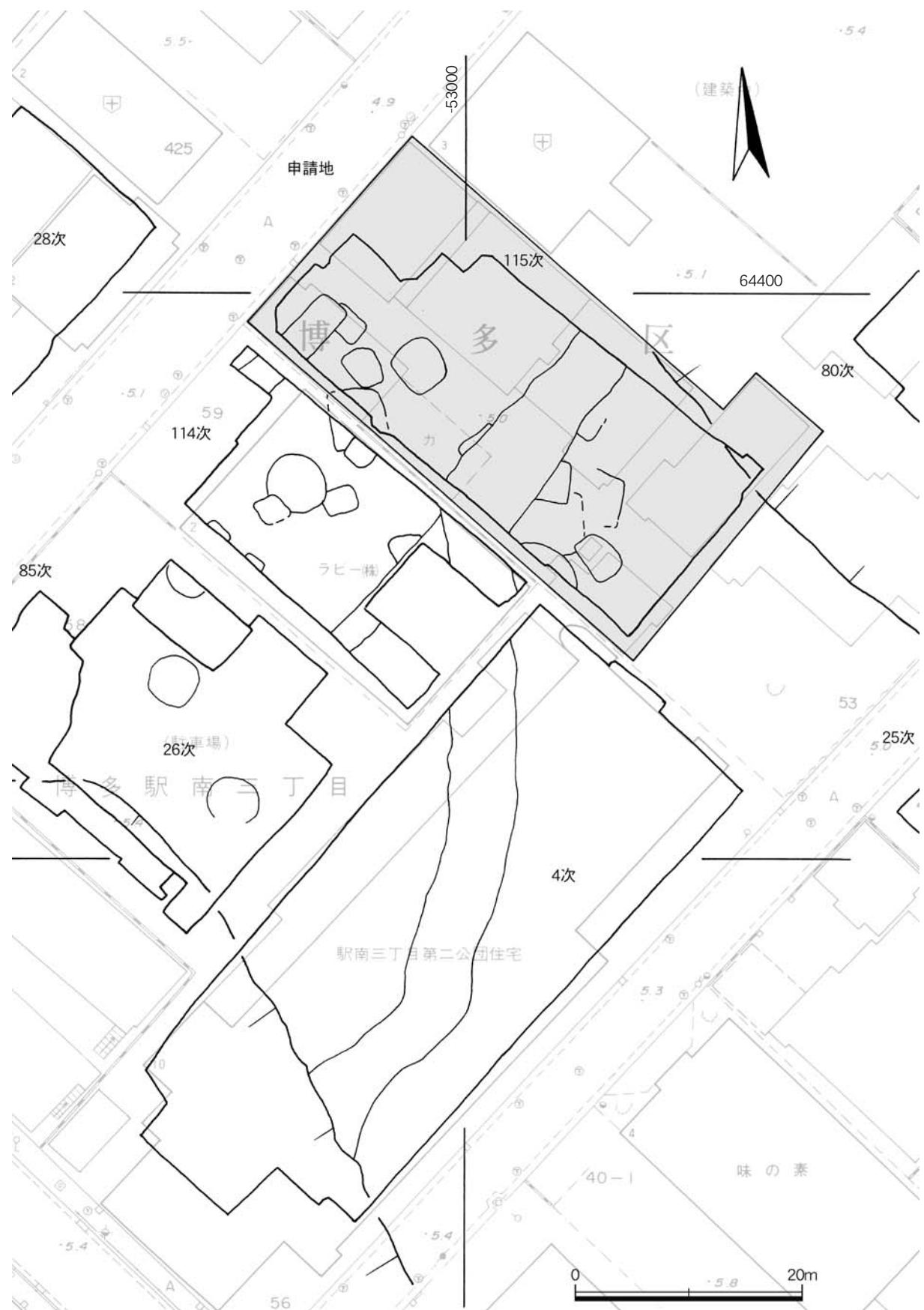
今回調査対象となったのは、申請地1,021.87m²のうち共同住宅建設にかかる約900m²についてである。調査は重機による表土除去の後、人力による掘削作業を行ったが、廃土を場内処理する必要から、4回に分けて調査を行い、それぞれを1～4区と呼称している。申請地は調査前には住宅が建設されており、調査前標高は5～5.3mであった。



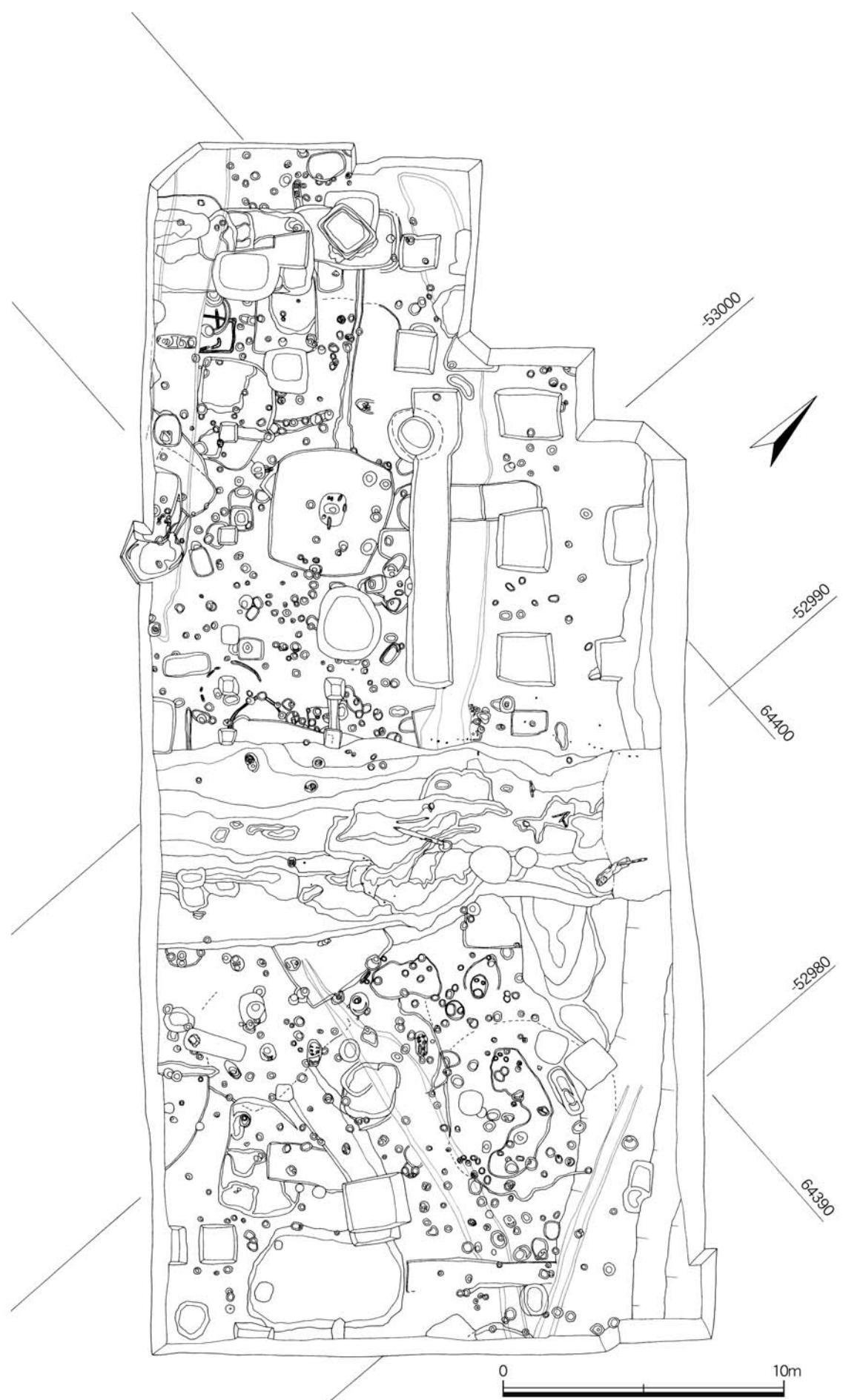
第1図 調査区位置図1 (1/50,000)



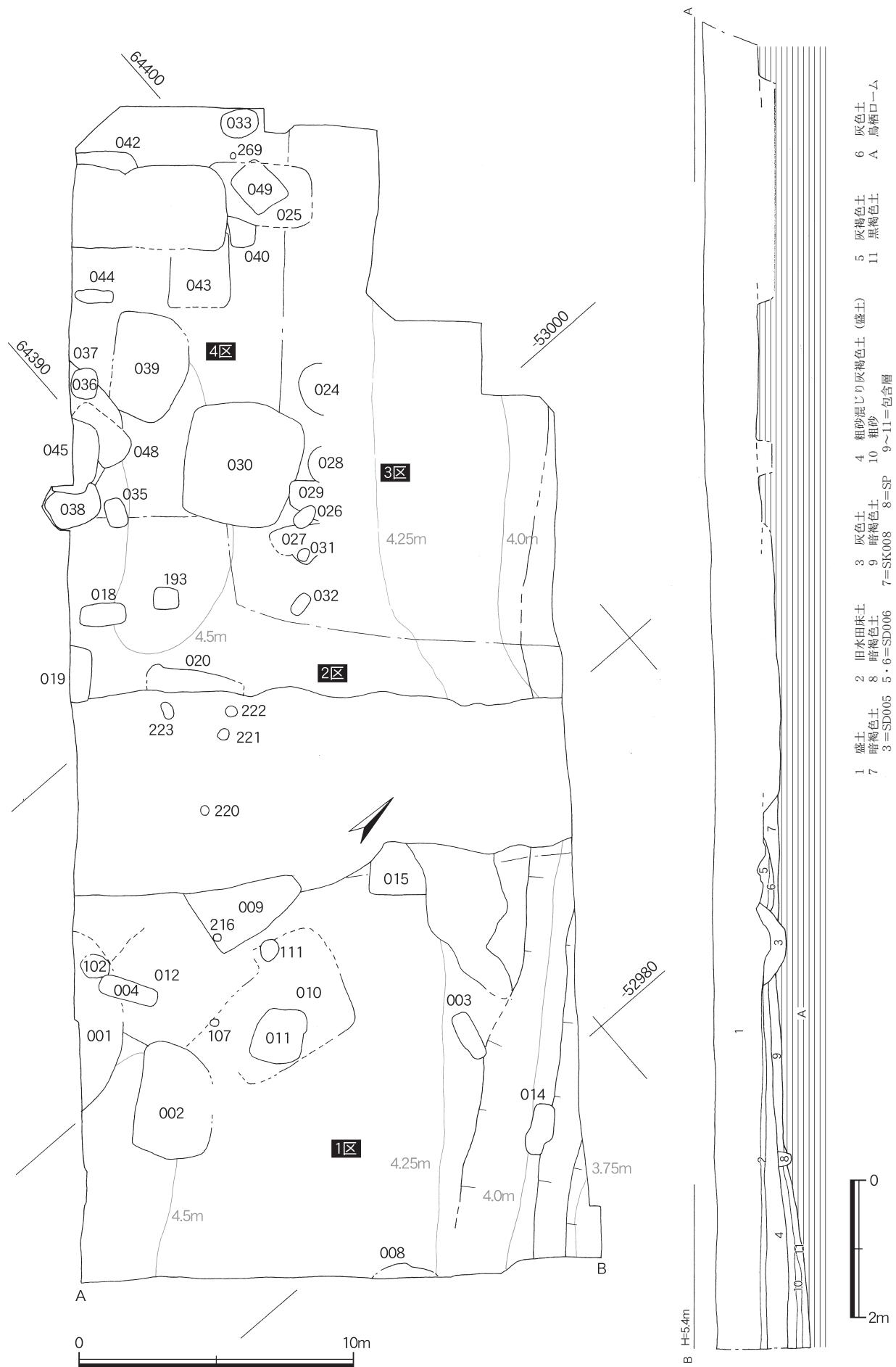
第2図 調査区位置図2 (1/2,500)



第3図 調査区位置図3 (1/500)



第4図 調査区全体図 (1 / 200)



第5図 遺構配置図1及び調査区南壁土層図（1/200、1/80）

遺構面は盛土・旧水田土を除去した標高4.5m前後の鳥栖ローム層上面であるが、西側2／3はほぼ平坦となり、遺構の遺存状況からもかなりの削平を受けていることが想定できる。また、調査区東側1／3程には緩傾斜面上に弥生時代前期から中期の遺物を包含した暗褐色～黒褐色土が堆積しており、これを除去すると東端は標高4m前後となる（第5図参照）。平坦部分を中心として竪穴住居跡・貯蔵穴・土坑・ピットを中心とした生活遺構が調査区全面に濃密に広がり、中央には東西方向の大溝が認められる。検出遺構・出土遺物は弥生時代前期中頃～中期初頭が主体となり、このほか古墳時代前期、中世の遺物がわずかに認められる。主な遺構は竪穴住居11棟、貯蔵穴10基、井戸1基、溝13条のほか土坑、ピット等がある。

3 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡 (SC)

SC001 (第6図、写真10)

1区西端で検出し、3／4程度は調査区外となる。SC012と切り合うが、先後関係は不明である。北側は攪乱で乱されているためプランが不明瞭となっているが、復元すると径7m程度の円形住居跡になると考えられる。床面は凹凸が著しく、壁高は5～15cmを測る。埋土は鳥栖ロームブロックを少量含む暗褐色を呈する。P1・2が主柱穴に相当するものと考えられるが、その他炉跡等の施設は検出していない。遺物は少量の土器破片と黒曜石剥片が出土するのみであるが、土器の胎土・焼成状態から出土遺物の主体を占める弥生時代前期中頃～中期の間に位置付けられるものと考えられる。

SC002 (第6図、写真11)

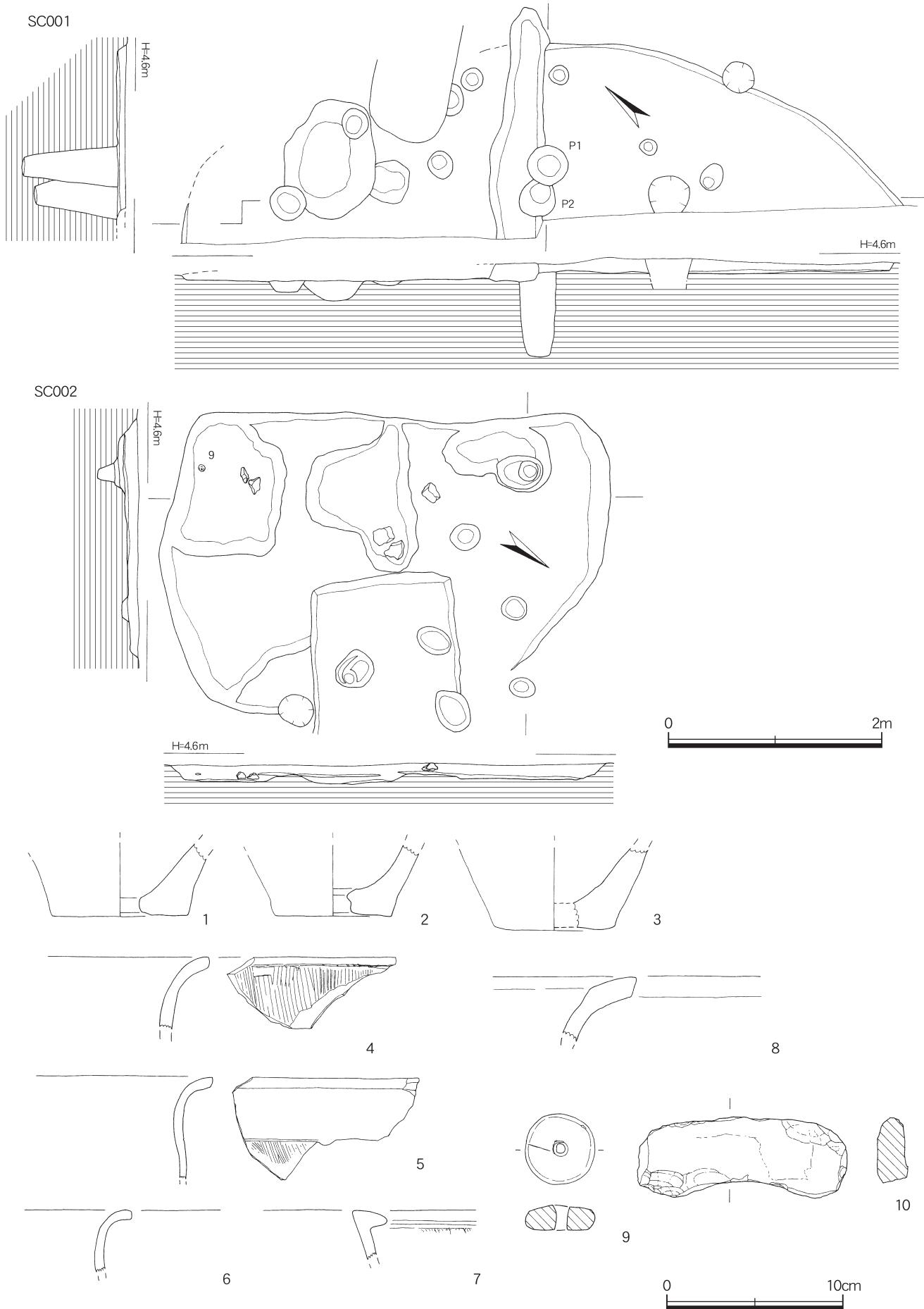
1区西側で検出し、SC012を切る。平面はやや歪な隅丸長方形となり、長軸4.3m、短軸2.9mを測る。壁高は5cm前後で、掘り方底面は凹凸が著しい。埋土は暗褐色土で、床面付近を中心として炭化物が広がるが、明瞭な炉跡は認められない。床面直上に15～20cm角の礫（花崗岩1点、玄武岩4点）が据えられており、一部には使用痕跡が認められる。なお、主柱穴は不明である。土製紡錘車（9）は床面直上からの出土である。その他、甕・壺小破片、黒曜石剥片、石製未製品等が出土しており、弥生時代前期後半～末ごろに位置付けられる。

出土遺物（第6図） 1～3は平底の底部である。いずれも破片資料であるが、1・2には焼成後の穿孔の痕跡が認められる。4～6は如意形口縁部である。4は外面に縦刷毛を行う。5は口縁下に沈線を施し、以下に縦刷毛が認められる。7は断面三角形を呈する口縁部である。8は壺口縁部である。口縁上面に粘土帯を貼り付け、肥厚させている。9は完形の土製紡錘車である。直径4cm、孔径6mmを測る。10は玄武岩製の石鎌未製品であろうか。

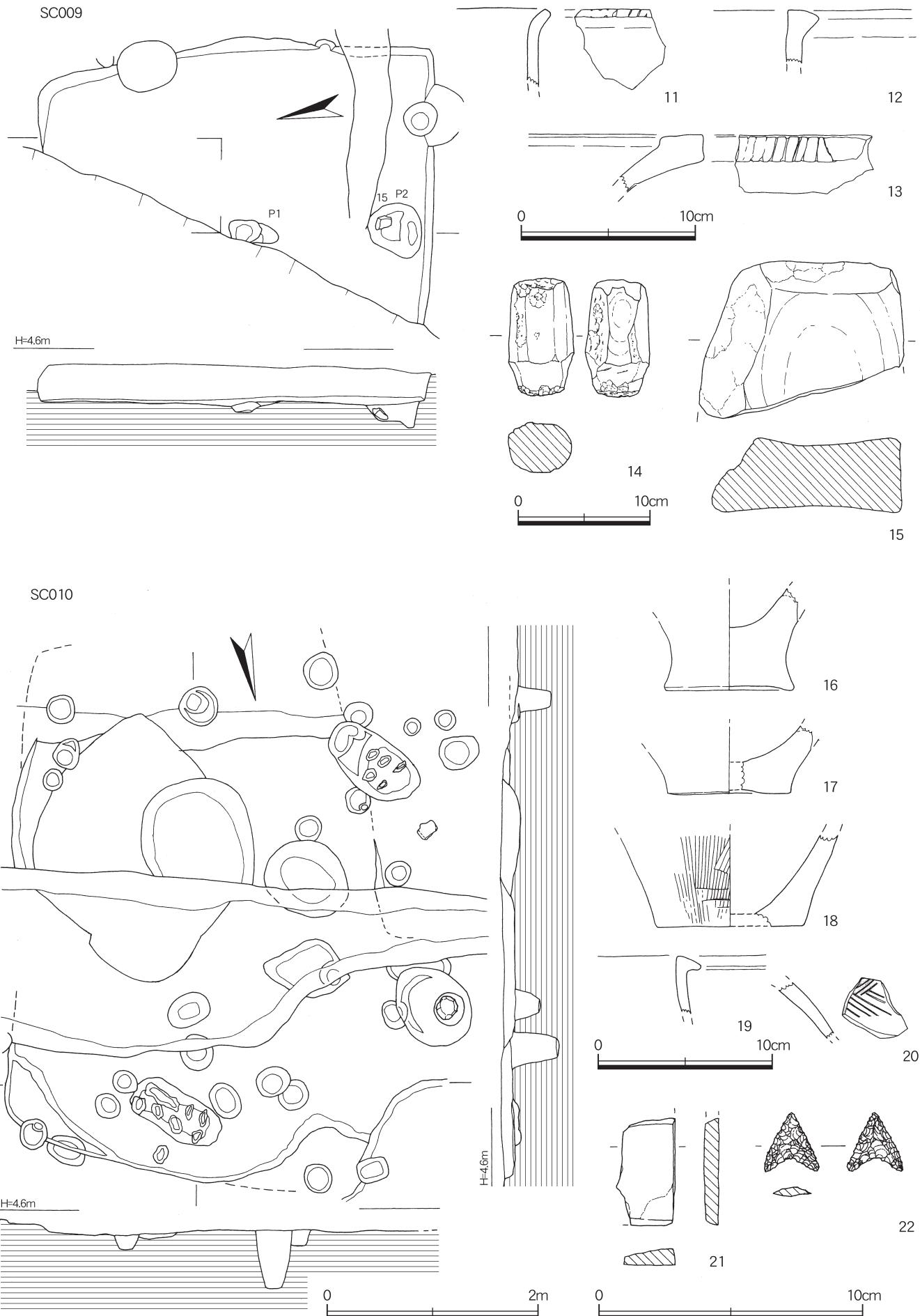
SC009 (第7図、写真12)

1区北側で検出し、西半部分をSD016に切られて失い、上面をSD006に切られている。南北軸3.7mを測り、P1を中心置くと、ほぼ方形に復元できる。壁高は30cm程でほぼ直立し、底面は比較的平坦である。埋土は鳥栖ロームブロックを含んだやや明るい暗褐色土である。P1は掘り方不整形で被熱痕跡は認められないが、埋土に炭化物を多く含み、周囲1mの範囲で床面に炭化物が比較的まとまって広がっている点から、炉跡と考えられる。また、床面検出のピットであるP2を一方の主柱とした2本柱が想定できる。出土土器は甕・壺の小破片のみで、弥生時代前期後半～末に位置付けられる。またこの他に黒曜石剥片やP2より砥石が出土している。

出土遺物（第7図 11～15） 11は如意形口縁で、やや丸みを帯びた端面に刻みを施している。12は粘土帯貼り付けにより断面三角形を作る甕口縁部である。3は上面を粘土帯により肥厚させる壺



第6図 SC001・002及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



第7図 SC009・010及び出土遺物実測図 (1/50, 21・22は1/2、11~13、16~20は1/3、14・15は1/4)

口縁部である。14は石杵であろうか。上下両面に敲打痕跡が残る。側面部は平滑に仕上げ、抉りを有している。15はP2出土の砂岩製砥石である。上下2面が砥面となっている。

SC010 (第7図、写真13)

SC009の南側で主軸方位をそろえて検出する。中央部分をSD006に切られている。なお、SU011・SC012との先後関係は不明瞭である。平面はおよそ4×5mの隅丸長方形に復元でき、壁高は5cm程度である。埋土は鳥栖ロームを含む暗褐色土で炭化物は認められない。北側に一段高まりを有する床面はほぼ平坦であるが、主柱穴は不明で炉跡等の施設は認められない。弥生時代前期後半～末頃の土器小破片、黒曜石剥片、片刃石斧、石鎌などが出土している。

出土遺物（第7図 16～22） 16～18は底部破片である。16は厚手でわずかに上げ底となる。17は外底周辺が輪状にやや高くなり、中央がわずかに窪んでいる。18は平底で外面居には縦刷毛が行われる。19は断面三角形につくる甕の口縁部である。20は壺の肩部で、ヘラ状工具による無軸羽状文を施す。21は摩滅が進む扁平片刃石斧である。22は黒曜石製の石鎌である。

SC012 (第8図、写真14)

1区北側で検出する。SC002・SK004・SC009に切られ、SC001との切り合い関係は不明瞭である。壁の大部分は切り合いや削平によって失われているが、部分的に残っている壁から、4×5mの平面長方形に復元できる。埋土は鳥栖ローム粒を含む暗褐色土である。主柱はP1とP2の2本と考えられ、中央部分がややくぼむ床面の西寄りに、暗褐色土を埋土とし、平面1.1×0.9の隅丸長方形を呈する掘り込みがあり、住居に伴う可能性が考えられる。床面からやや浮いて、板状の玄武岩片が出土している。出土土器は壺・甕の小破片のみで、その他砥石状の製品が出土している。弥生時代前期中頃～末の遺物が認められる。

出土遺物（第8図 23～25） 23は淡橙色を呈する如意形口縁部である。口縁部の屈曲は強くなり、端部全面に刻みを行う。また、口縁下には断面三角形の突帯を貼り付けている。24は断面三角形を呈する。25は砂岩製の砥石である。上下両面と両側面の4面を砥面とする。

SC015 (第8図、写真15)

1区北端東よりで検出する。SD007・016に切られており、南西コーナー部分を残すのみである。埋土は鳥栖ロームブロックを少量含む暗褐色土で、平面は（長）方形に復元できる。壁高は5～10cm程度を測り、床面は比較的平坦である。弥生時代前期～中期に位置付けられる土器の小破片が少量出土するのみである。

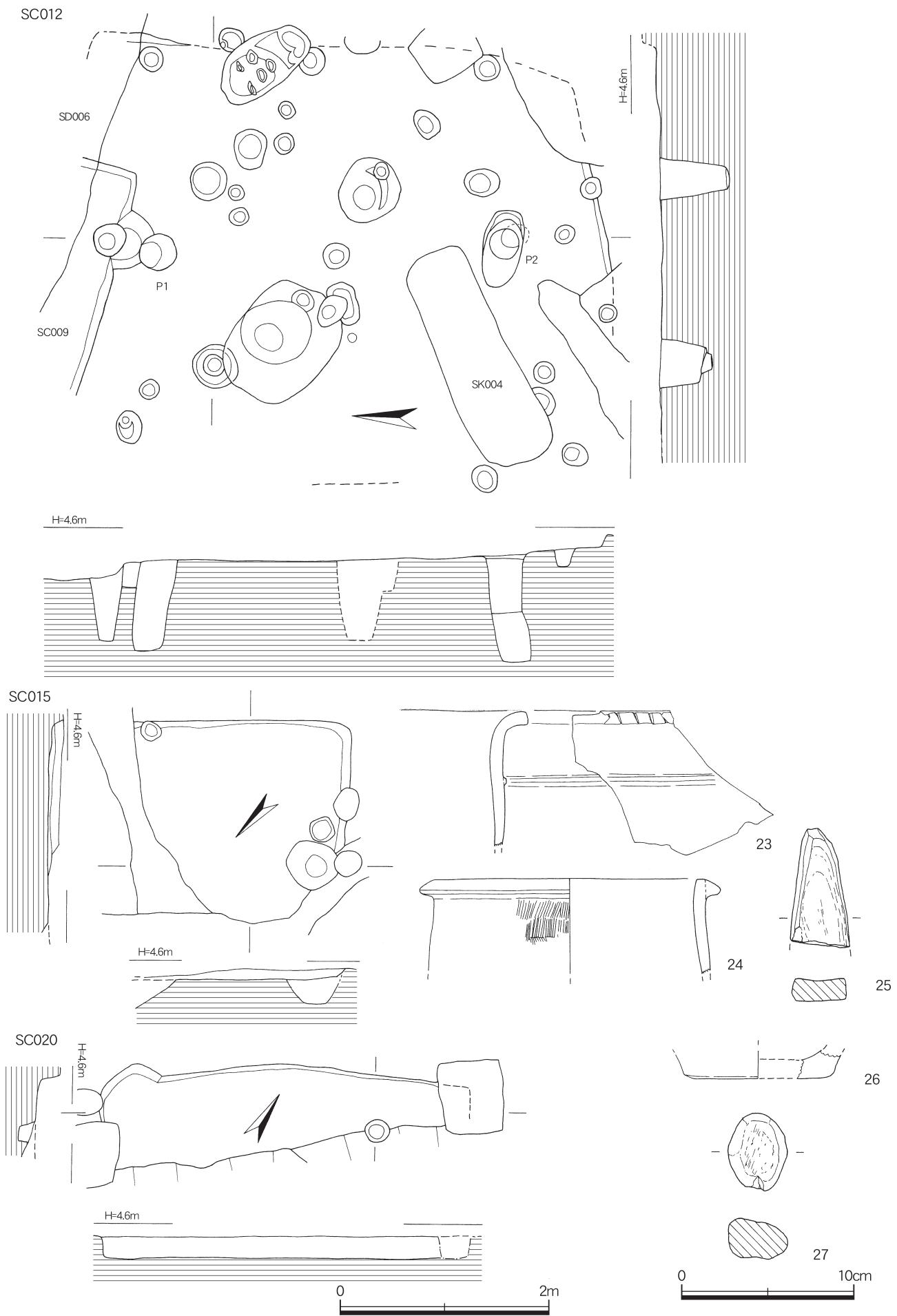
出土遺物（第8図 26・27） 26は平底の底部小破片である。赤褐色を呈し、胎土には石英微砂粒を多く含んでいる。27は自然礫の表面に擦痕が残る。

SC020 (第8図、写真16)

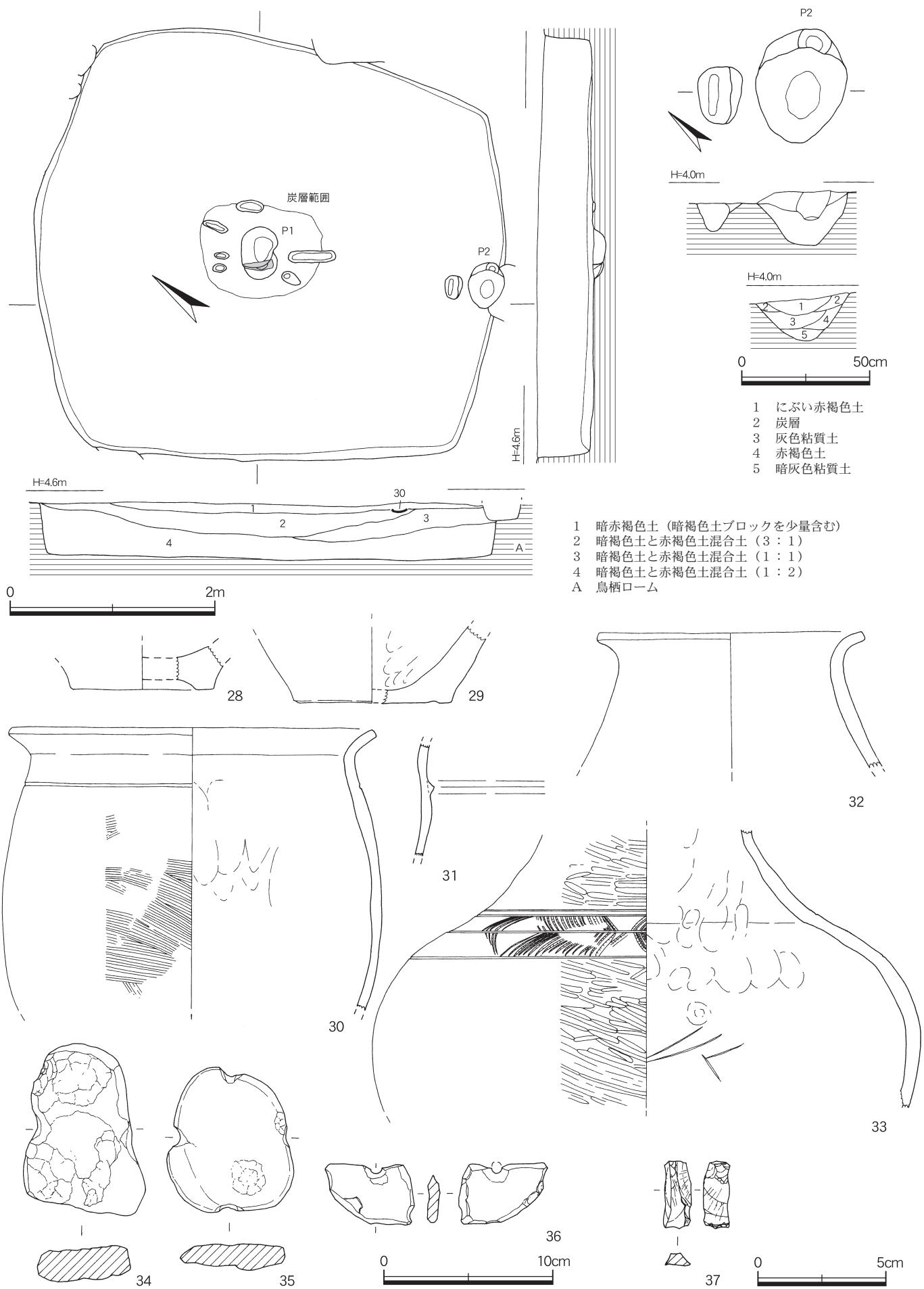
2区中央で検出する。大半をSD016により削平されており、長さ3.5m前後の北西壁が残るのみである。埋土は鳥栖ローム粒を含む暗褐色土である。壁高は20cmほど残っており、床面はほぼ平坦となっている。住居を切るSD016の底面から礎板を有するピット4基（SP220・221・222・223）を確認しており、竪穴住居跡と関連する可能性も考えられる。黒曜石剥片と土器は小破片しか出土しておらず時期は不明瞭である。

SC030 (第9図、写真17～21)

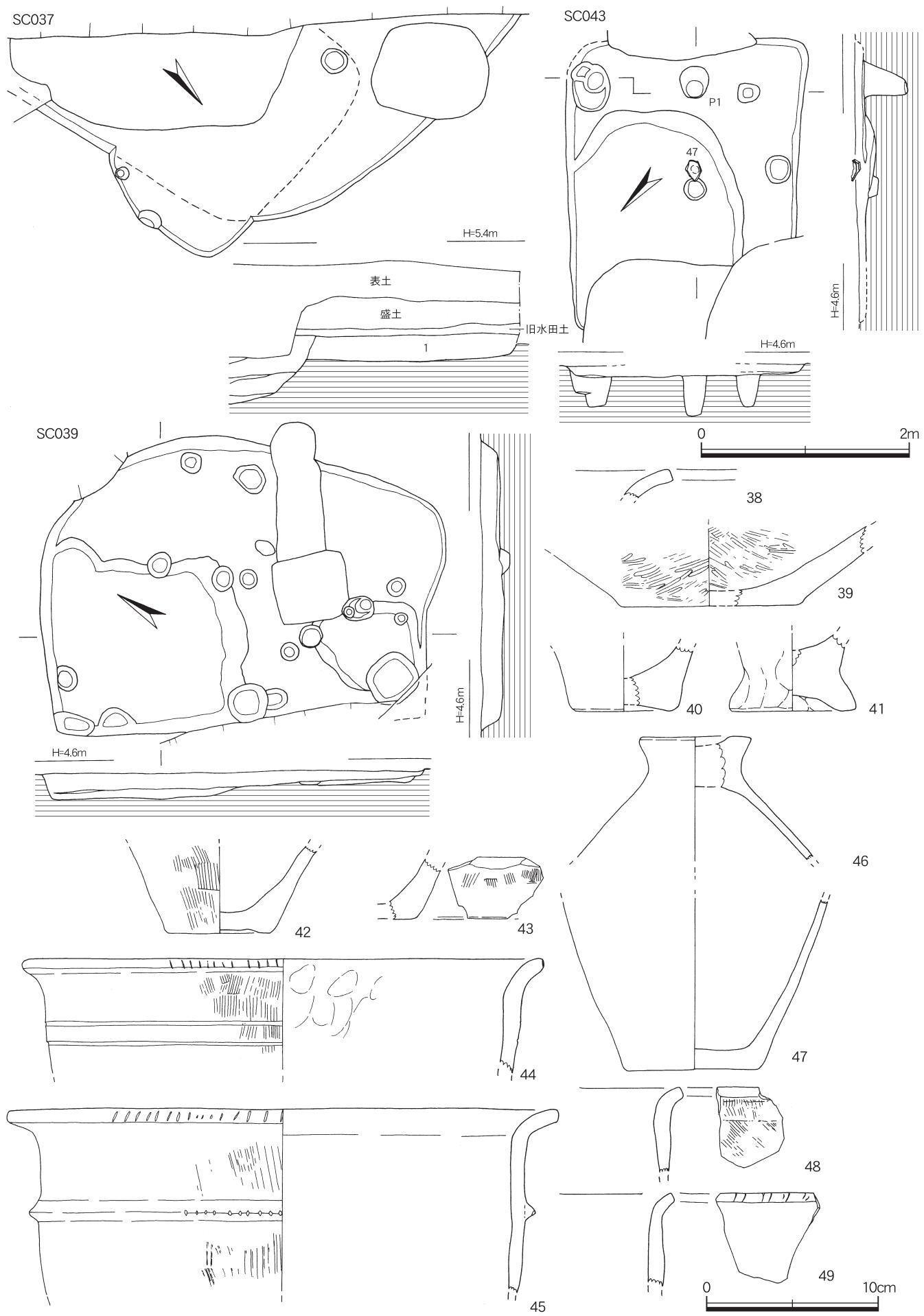
3・4区にまたがって検出する。住居の北側には鳥栖ローム上面に厚さ5cm程度の暗褐色土包含層が堆積しているがこれを切り、東壁の一部をSK029に切られている。南北長4.5m、東西長4mのやや歪な隅丸方形を呈する。壁はほぼ直立し、検出面からの高さ50cmを測る。床面は凹凸がなく、



第8図 SC012・015・020及び出土遺物実測図（1／50、1／3）



第9図 SC030及び出土遺物実測図（1／20、1／50、37は1／2、その他は1／3）



第10図 SC037・039・043及び出土遺物実測図 (1 / 50、1 / 3)

ほぼ水平である。埋土は鳥栖ロームと暗褐色土の混合土で、人為的な埋め戻しが行われたものと考えられる。床面中央部には $1.2 \times 0.9\text{m}$ の範囲に厚さ1cmの炭層が広がっており、これを除去したところで、壁面に被熱痕跡を有する掘り込みを確認した(P1)。内部は炭層で充填されており、被熱痕跡は西側壁面にのみ残されている。更に西側にはこれに切られる掘り込みが残されている。この部分の埋土は汚れた赤褐色土で、壁面から底面にかけて厚さ1~2cmの炭層が認められる。これら掘り込みは住居に伴う炉跡と考えられ、当初西側にあったものを埋め戻した上で、東側に再度掘り直したものであろうか。なお、炉跡周辺には幅10cm、深さ2cm程度の、溝状のくぼみが数条残されている。同様の掘り込みは炉跡周辺以外の床面には認められないことから、炉跡と関連のある痕跡と考えられるが、詳細は不明である。また南壁中央直下には2基の掘り込みが残されている。壁直下の掘り込み(P2)は最上層に炭層があり、これを切るようににぶい赤褐色土が堆積している(1層)。被熱痕跡は認められず、床面周辺に炭層も広がっていない。なお、床面上にはこれ以外の掘り込みはなく、主柱等も認められない。人為的な埋め戻しが想定される点や、やや特異な様相を呈する炉跡の存在など、本竪穴住居跡は生活のためではない異なる用途も想定できる。出土遺物より弥生時代前期後半~末に位置付けられる。

出土遺物(第9図) 28・29は底部破片である。共に外底は周辺が輪状に高くなり、中央部を窪ませている。30・31は甕である。30は赤褐色を呈し、胎土に非常に多くの石英微砂粒を含んでいる。口縁部の屈曲は大きく、端部は丸く納めて刻みも行われない。口縁下には一条の沈線が施され、胴部外面の調整は横~斜位の刷毛目を行っている。31は如意形の口縁部を失っている。胴部には断面三角形の突帯を貼り付ける。32・33は壺の口縁部である。32は端部を外方に屈曲させ、貼り付けによる肥厚は行っていない。色調は外面黄橙色、内面は灰色を呈する。33は肩部に沈線を施し、その間に貝殻による有軸羽状文が残る。34は二方向に使用痕を残す扁平な石錐である。35は砂岩製の石錐である。扁平な石材の四方向から打ち欠を行い、紐ずれの痕跡も認められる。重量は145gを測る。36は石包丁の破損品である。37は黒曜石製の剥片である。上端部には自然面を残し、下端部には使用による微細な剥離が認められる。

SC037(第10図、写真23)

4区西端で検出し、SU038・045に切られる。SU048との先後関係は明らかでない。切り合いにより多くが失われているため本調査区内での形状は不明瞭であるが、隣接する114次調査区のSC22と一連の遺構と考えられ、一辺5m前後の平面略方形の竪穴住居跡に復元できる。壁高は20cmほどで、床面には凹凸がなく平坦である。埋土は暗褐色土に鳥栖ロームブロックを多く含み、混合土状を呈する(1層)。遺物は僅少で、砂粒を多く含む胎土ややや軟質な焼成から弥生時代前期~中期前半に位置付けられる土器の小破片や黒曜石剥片が出土している。114次調査の結果および切り合い関係から弥生時代前期後半以前に位置付けられる。

出土遺物(第10図 38) 38は如意形の口縁部破片である。色調は外面にぶい黄橙色、内面黒色を呈し、胎土には石英微砂粒を多く含む。端部は面取りを行っている。

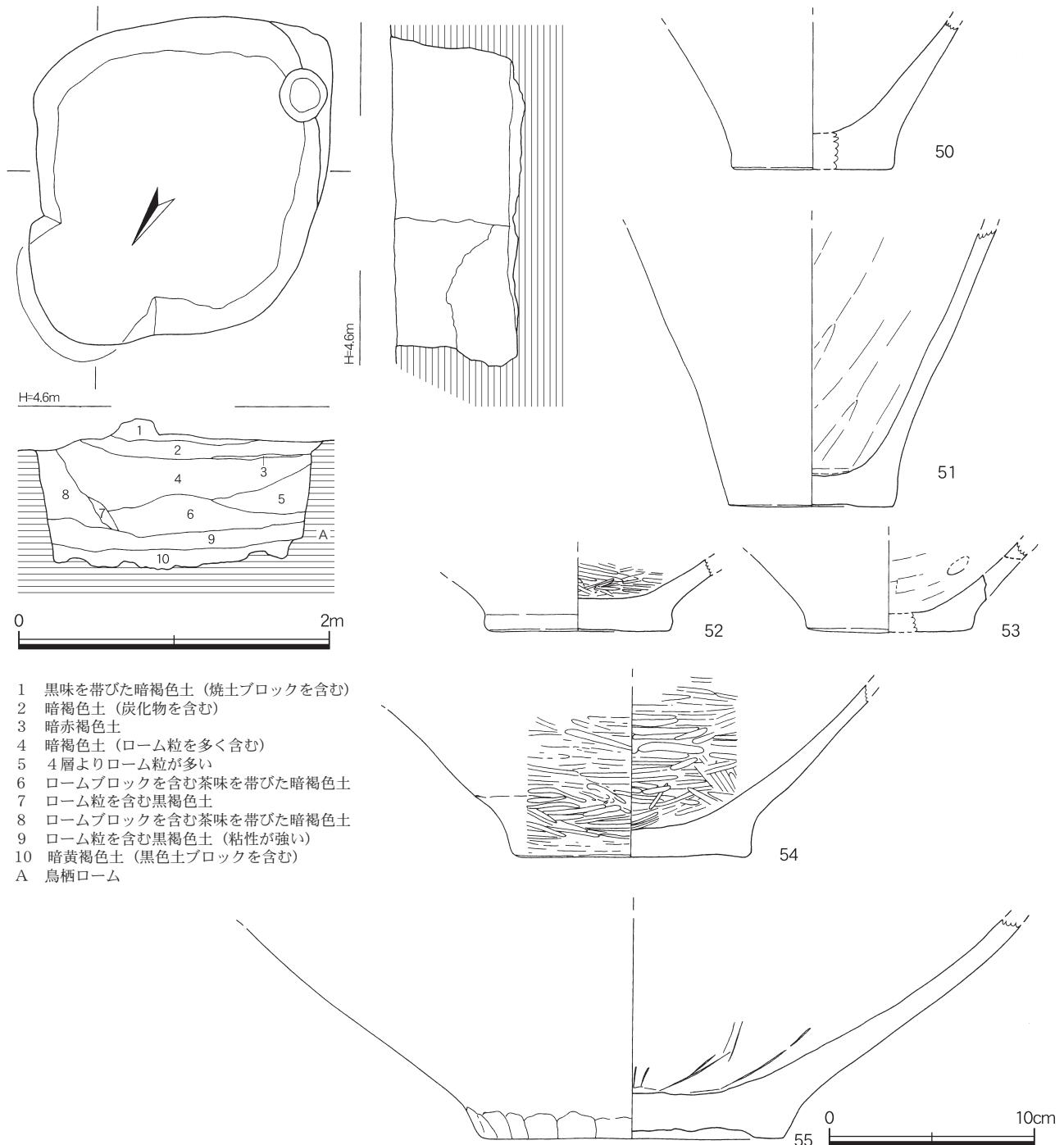
SC039(第10図、写真24)

4区で検出し、出土遺物からはSC037に後出する。東西長2.8m、南北長3.8mを測り、平面は隅丸長方形を呈する。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。検出面から床面までの深さは15cmほどで、床面北西隅には更に深さ5cmほどの掘り込みを有する。主柱穴・炉跡等の施設は確認できていない。出土遺物には甕、壺のほかに玄武岩・黒曜石剥片がある。弥生時代前期末~中期初頭に位置付けられる。

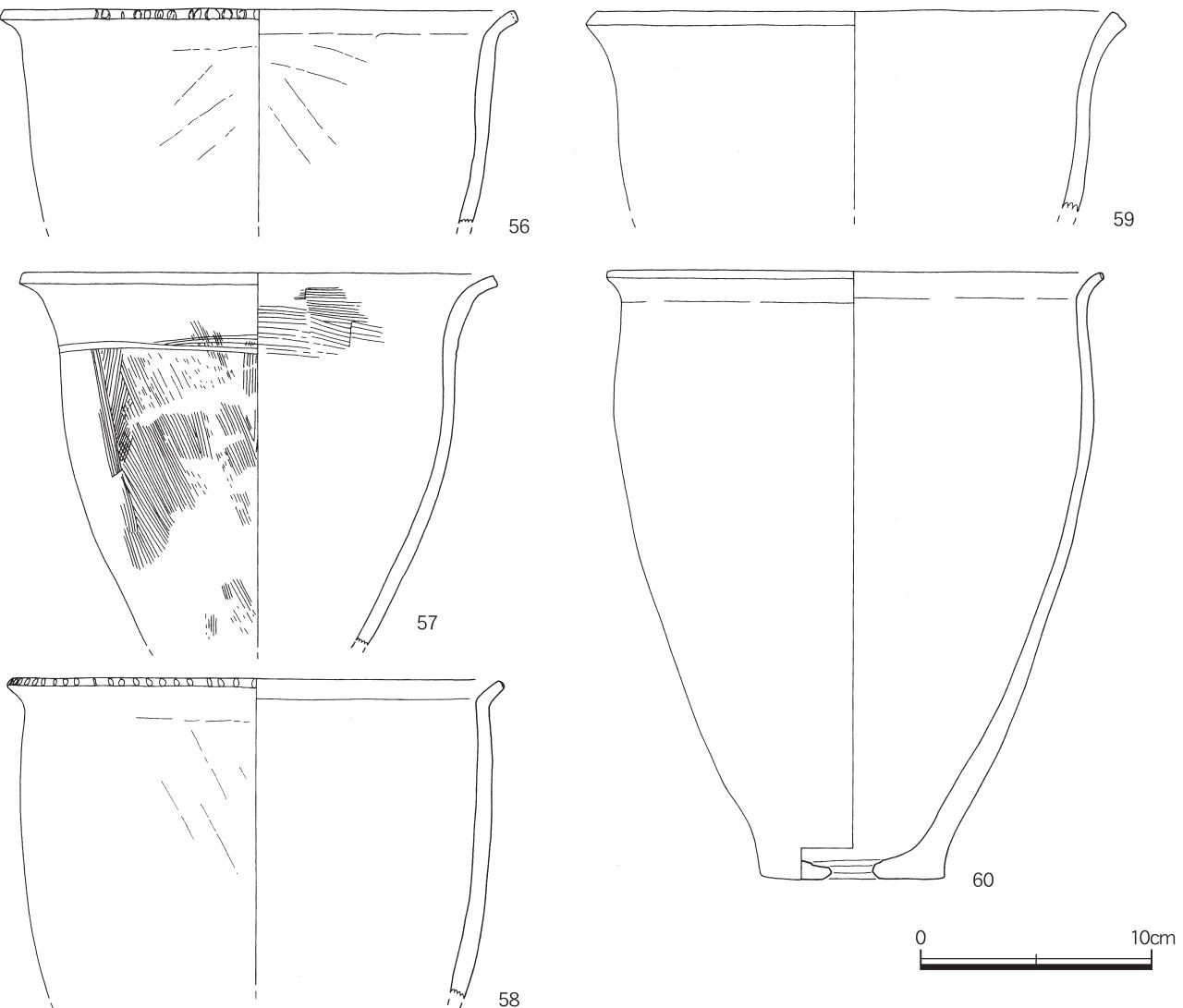
出土遺物（第10図 39～46） 39～43は底部破片である。39は壺で、内外面横方向のミガキを行う。40～41は上げ底の底部破片である。40は中央に向かって緩やかに窪む。41は厚手で裾が外側に張り出す。42は輪状に外面周囲が高くなり、内側が窪んでいる。43は小破片であるが平底であろう。44・45は端部に刻み目を有する如意形口縁の甕である。共に口縁部の外反が強くなっている。44には二条の沈線が施されている。45は胴部に断面三角形の突帯を有している。46は蓋である。天井部中央が窪んでいる。黄橙色を呈し、胎土には石英砂粒を多く含んでいる。

SC043（第10図、写真25）

4区で検出し、SC043→SD041の関係となる。東西長2.2m、南北長2.7mの小型長方形で、検出



第11図 SU011及び出土遺物実測図1 (1/40, 1/3)



第12図 SU011出土遺物実測図2 (1／3)

面から床面までの深さは5cmほどで、床面北東側は更に10cmほど掘り窪められている。埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。P1が主柱のひとつである可能性を考えられるが、炉跡等は認められない。遺物は甕・壺の小破片が大半で、黒曜石剥片も出土している。弥生時代前期末頃に位置付けられる。

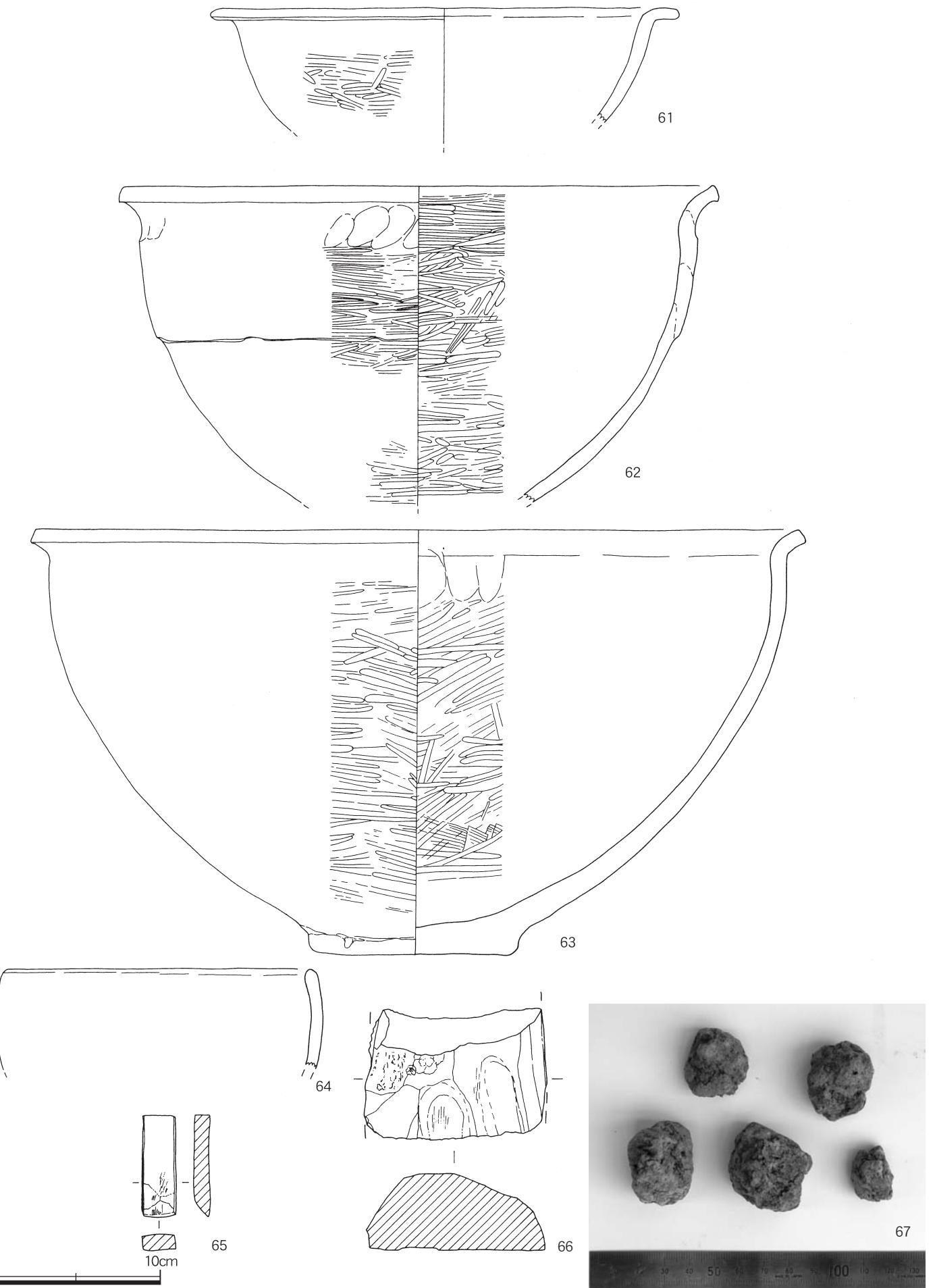
出土遺物（第10図 47～49） 47は摩滅が進み平底状となっているが、外底面に輪状の高まりが痕跡的に残っている。48・49は褐色を呈する如意形の口縁部である。

2) 貯蔵穴 (SU)

SU011 (第11図、写真26・27)

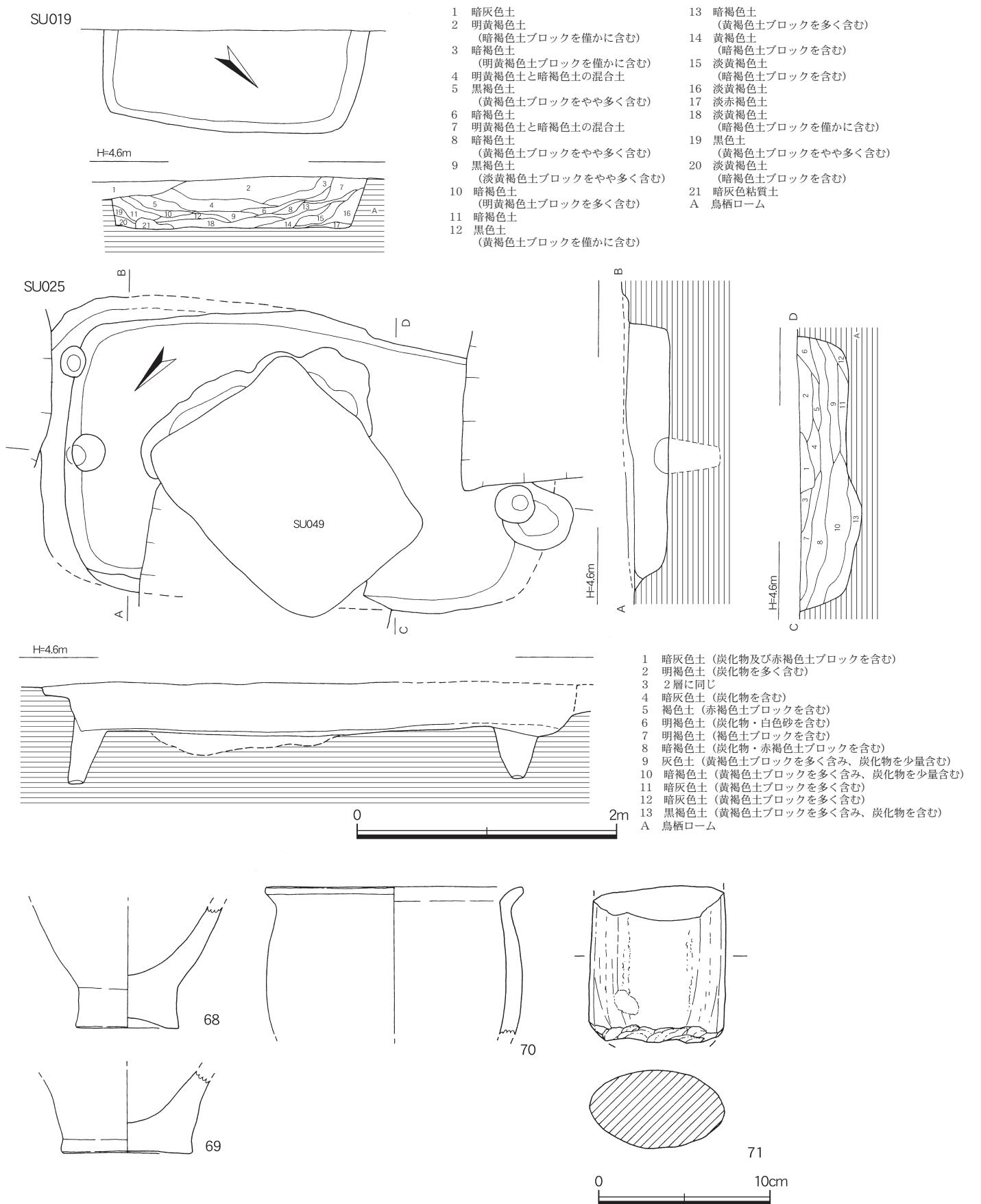
1区で検出し、上面をSD006に切られる。SC010との先後関係は不明である。平面は一辺約2mの隅丸方形プランの北側コーナーに張り出しを有する。壁面はほぼ直立するが、張り出し部分のみ壁面下半が抉り込んでいる。また、底面は凹凸が著しい。弥生時代前期中頃～後半に位置付けられる甕・壺・鉢などの破片や、片刃石斧・砥石・黒曜石剥片、焼土塊などがコンテナ3箱程度出土している。

出土遺物（第11～13図、写真2） 50・51はほぼ平底となる甕の底部である。52～55は壺もし

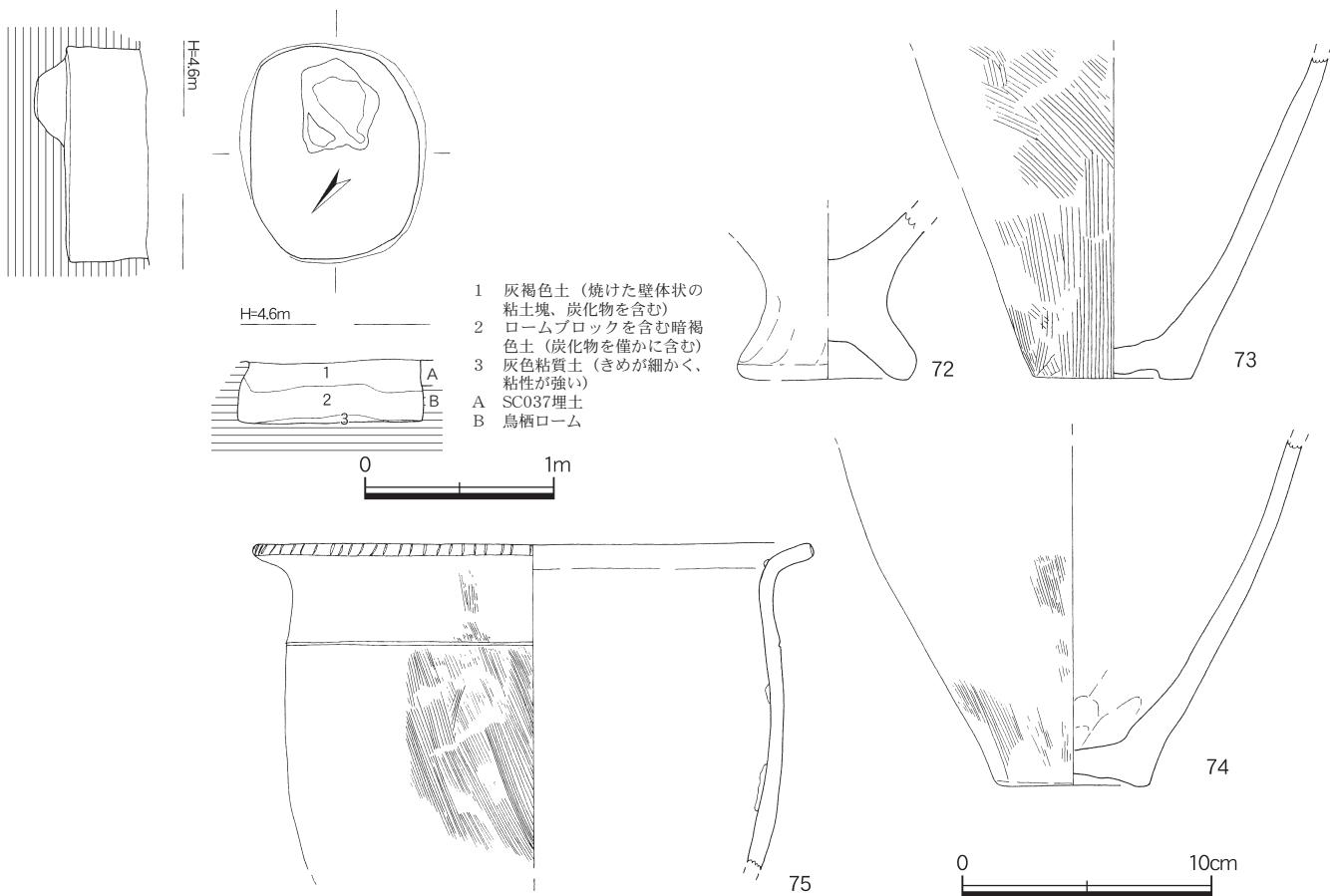


第13図 SU011出土遺物実測図3 (1／3)

写真2 SU011出土焼土塊



第14図 SU019・025及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第15図 SU036及び出土遺物実測図（1／40、1／3）

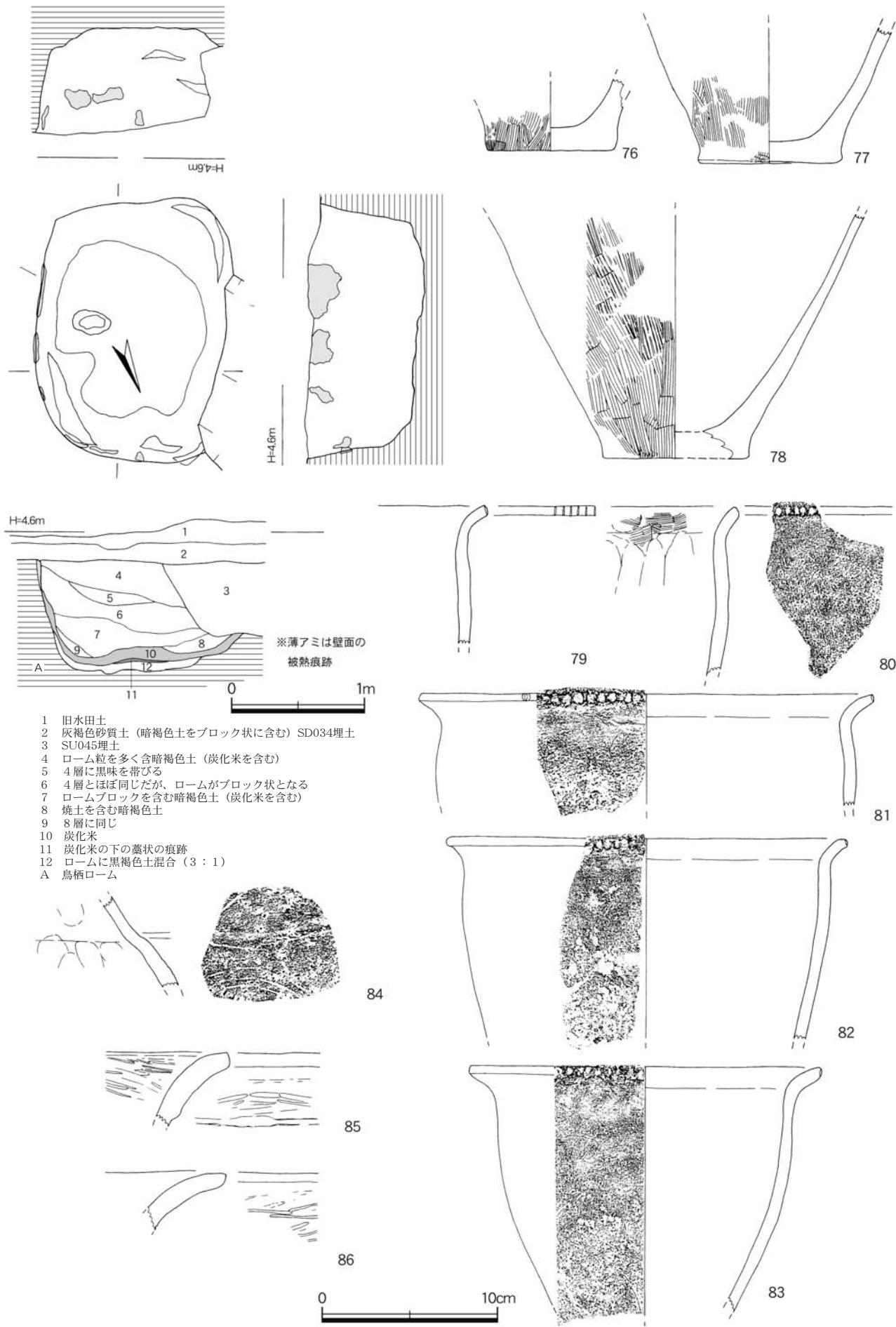
くは鉢である。52・54の外面には明瞭なヘラミガキが残る。56～60は甕である。胴部はふくらみ気味で、口縁の屈曲はやや強く端部には面取りを行う。56・58・60には端面全面に刻みを施している。57の胴部には沈線を施している。また、60は底部に焼成後の穿孔を行う。61～63は鉢である。いずれも内外面に横方向のヘラミガキを行う。61の口縁部は屈曲が強く、逆L字状に近くなっている。64は椀である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。調整は不明瞭であるが横方向のナデであろう。65は扁平片刃石斧である。66は砂岩製の砥石破損品である。67としたのは2cm角程度の焼土塊5点である。橙色を呈し、胎土は精良でスサを含んでいる。同様の焼土塊が全部で8点ほど出土している。

SU019（第14図、写真28・29）

2区で検出し、南側をSD016に切られている。西側を調査区外に延ばしているが、隣接する第114次調査地点では検出していない。調査区内では南北長2mを測り、隅丸長方形を呈するものと考えられる。壁面はほぼ直立し、検出面からの深さは40cmである。底面はほぼ平坦で掘り込み等は見られない。埋土はレンズ状に堆積するが、底面付近はロームの崩落土が認められる。遺物は少量で図示し得るものはないが、他の貯蔵穴同様に、弥生時代前期中頃～中期初頭前後と考えられる石英砂粒を多く含んだ、やや脆い胎土の土器片が出土している。

SU025（第14図、写真30・31）

4区で検出し、SU049・040→SU025→SD041→SD034の関係となる。平面は長軸3.8m、短軸2.2mの隅丸長方形に復元できる。また、東西両短辺中央部の床面には一对のピットが掘り込まれており、貯蔵穴に屋根を掛けるための遺構と考えられる。埋土には全体に炭化物が多く含まれる。遺物は甕の破片が主体を占め、石斧、黒曜石剥片等が出土している。弥生時代前期後半～末に位置付けられる。



第16図 SU038及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

出土遺物（第14図） 68・69は底部である。68は厚手で上げ底となる。69はわずかに中央部分が窪んでいる。70は甕上半部である。口径が小さく器壁は厚手である。口縁部は短く屈曲し、胴部はややふくらみを有する。71は今山産の大型蛤刃石斧の破損品である。

SU036（第15図、写真32）

4区で検出し、SC037を切る。長軸1.1m、短軸90cmの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは30cmで壁は僅かにオーバーハンギングする。北側床面は平坦であるが、南側には深さ10cm程度の掘り込みを有する。埋土は中央がやや盛り上がる山形に堆積し、ほぼ全体に炭化物を含む。弥生時代前期後半～末頃の甕破片が主体となり、玄武岩製石斧破片、黒曜石剥片も出土している。また、焼土塊も数点出土している。

出土遺物（第15図） 72～74は底部である。72は厚手の上げ底で、裾部分は張り出している。73・74は外底部周囲が輪状に高くなり、中央が窪んでいる。調整は外面縦刷毛、内面はナデによる。74は2次的な焼成の痕跡が残っており、明赤褐色化している。75は甕上半部である。胴部に一条の沈線を有し、如意形口縁端部全面に刻みを施している。

SU038（第16図、写真23・33～37・41）

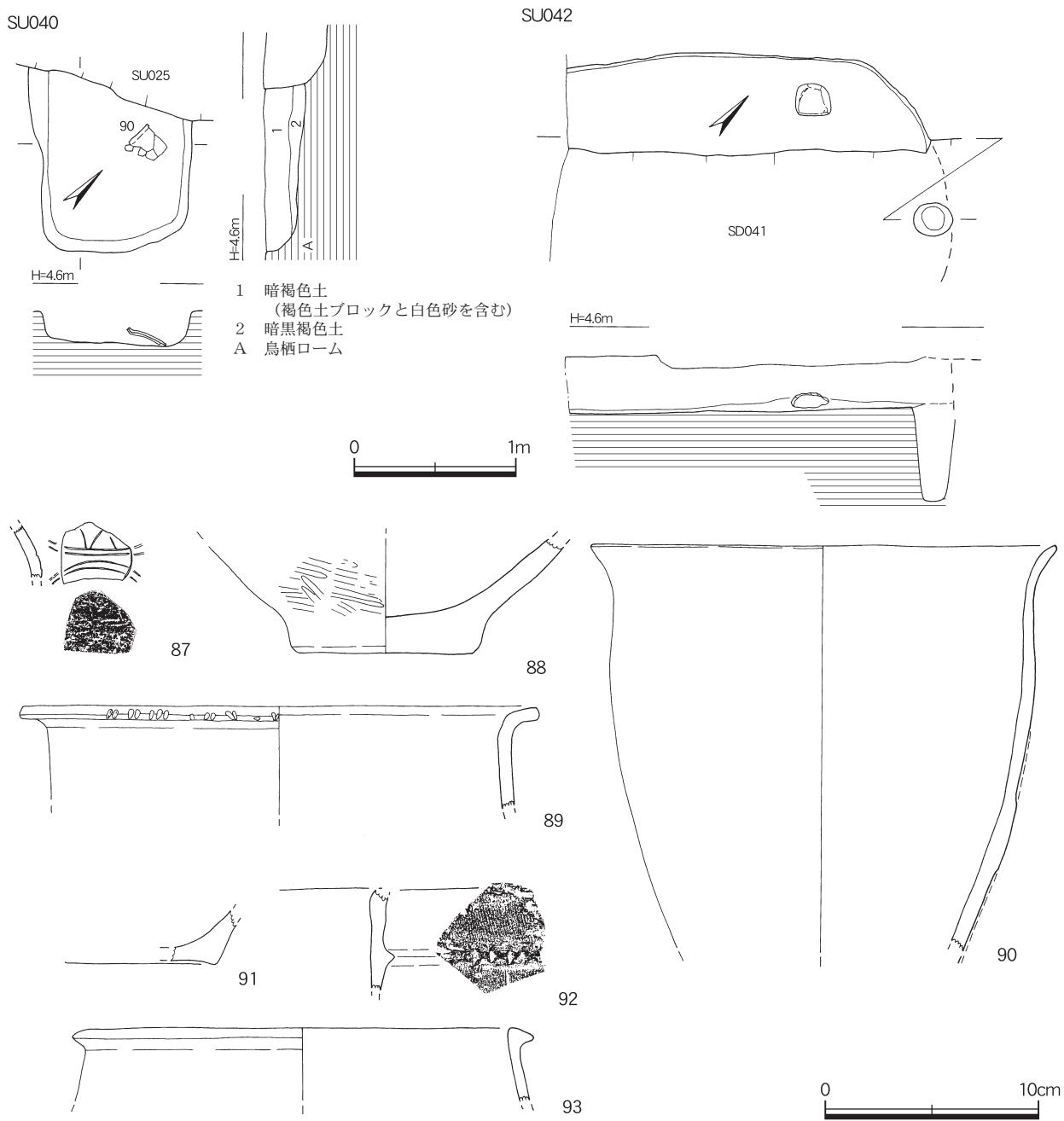
4区で検出し、SU036→SU045の関係となる。長軸1.9m、短軸1.4mを測り、平面は隅丸長方形を呈する。壁面は僅かに内傾し、上面から深さ30cm程は被熱により、暗赤褐色化した部分が残っている。また被熱壁面以下には厚さ10cmほどの炭化米層（10層）があり、その直下には藁および樹皮状の植物遺体が炭化状態で残されている（11層）。底面は比較的緩やかな凹凸が多いが、最下層の埋め立て状の埋土（12層）により炭化米製作時の床面はほぼ平坦化されている。以上の状況から、本貯蔵穴では貼り床状の床面を形成した後に、米を蒸し焼きにしたものと考えられる。埋土から炭化米は崩落土により埋没したものではなく、遺棄されたまま自然に埋没したものと考えられる。出土遺物は弥生時代前期中頃～後半に位置付けられる甕・壺破片が主体となり、上層からスサ入りの焼土塊1点が出土している。また炭化米はほぼ全量を採取し、総量で125.5kg取り上げている。

出土遺物（第16図） 76～78は甕の底部である。いずれも平底で外面には縦刷毛を行う。また、内面は丁寧なナデによる。79～83は甕上半部である。口縁部は如意形で、胴部は口縁下でやや膨らんでいる。口縁端部には全面に刻みを施している。調整は80には外面に細かな縦刷毛、内面屈曲部に横刷毛が行われるが、その他は丁寧なナデによる。色調はいずれも灰褐色～褐色で、胎土には石英微砂粒を多く含んでいる。84～86は壺である。84は肩部に明瞭な段を有し、その直下に一条の沈線を刻む。沈線下にはヘラ描きによる重弧文を施し、頸部にもヘラ状工具による施文が行われている。85・86は口縁部小破片である。85は外面に段を有するが、86は無段である。

SU040（第17図、写真31・38）

4区で検出し、SU040→SU025の関係となる。東西長90cm、南北長1m以上を測り、平面隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは20cmほどで、底面は平坦である。また、床面よりやや浮いて、弥生時代前期中頃～後半の甕破片（90）が出土している。出土遺物にはこのほか甕・壺破片や、黒曜石剥片が認められる。

出土遺物（第17図 87～90） 87は小壺の肩部破片である。二条の沈線をはさんでヘラ描き文様が施される。88は底部破片である。剥落が進んでいるが、外面には横方向のヘラミガキが行われている。89は口縁部の屈曲が強く、下端部には刻みが行われる。90は口縁部が緩やかに外反し、端部は丸く納めている。胴部はわずかに膨らみ、剥落のため調整は不明である。

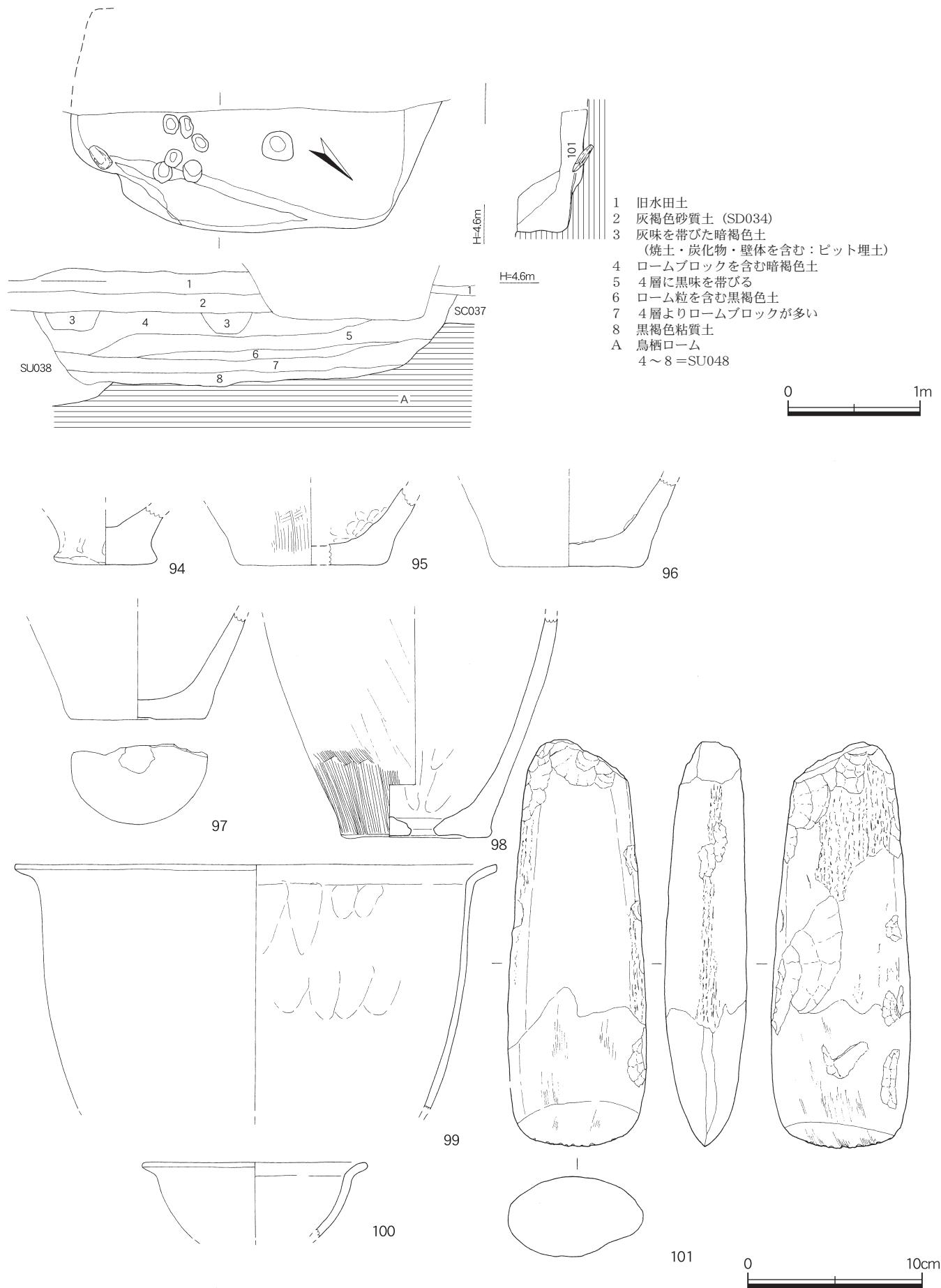


第17図 SU040・042及び出土遺物実測図（1／40、1／3）

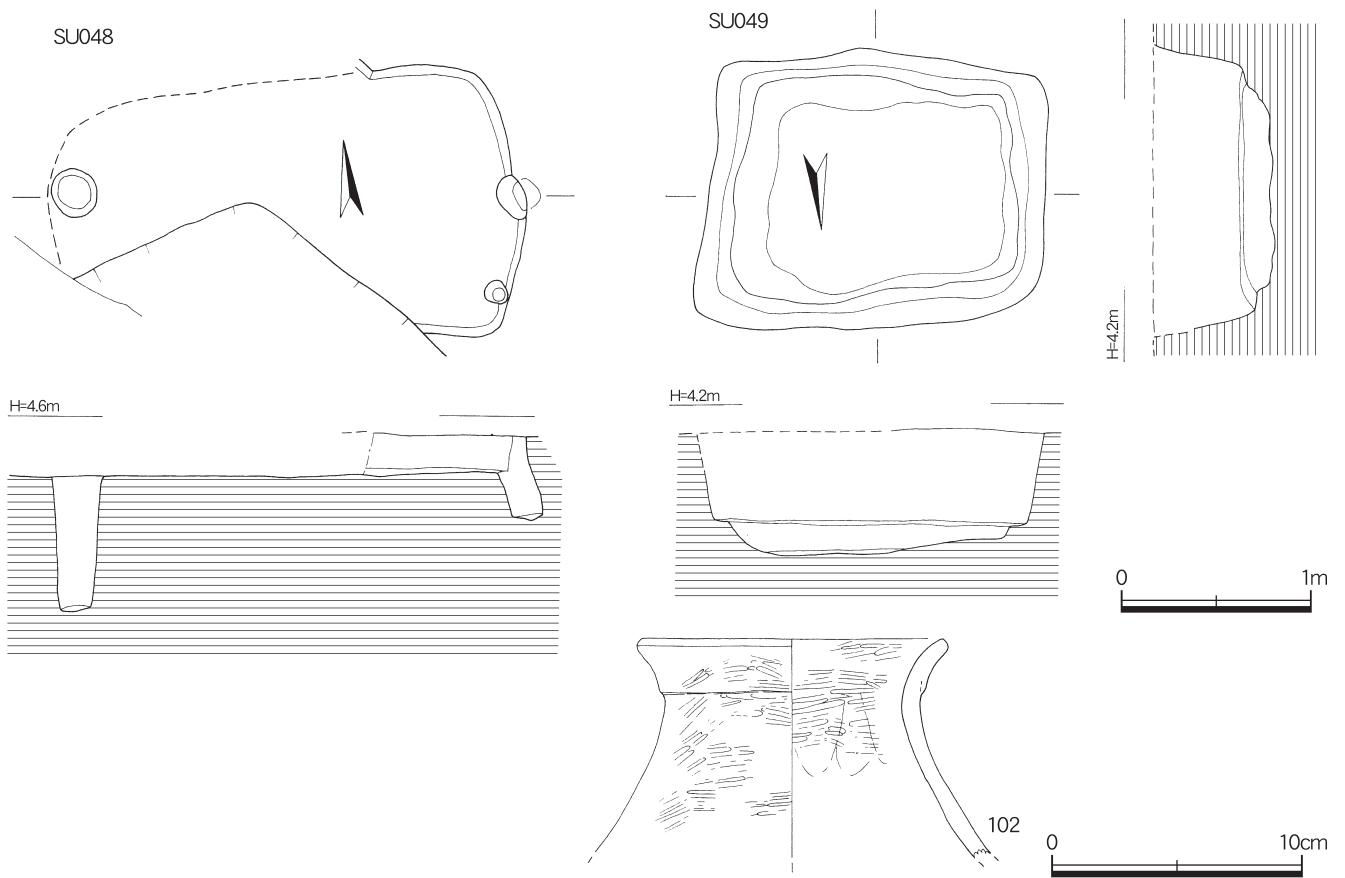
SU042 (第17図、写真39・88)

4区で検出し、SU042→SD041の関係となる。南側の大半を失っているが、東側壁面中央付近にピットがあり、これから、南北長2m、東西長2.5m以上の平面小判形に復元できる。床面はほぼ平坦で、埋土は底面から5cmほどは黒褐色土で、それ以上はロームブロックを含む暗褐色土となる（第38図土層図参照）。遺物としては甕・壺の小破片および黒曜石・玄武岩剥片が出土し、弥生時代前期末頃に位置付けられる。

出土遺物（第17図 91～93） 91は外底中央がわずかに上げ底となる。92は如意形口縁が欠失し、胴部の三角突帯の一部が残存するのみである。突帯には刻みが施され、胴部外面は縦刷毛が行われる。93は口縁部断面が三角形を呈する甕である。小破片であるが、胴部は緩やかに膨らんでいる。



第18図 SU045及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第19図 SU048・049及び出土遺物実測図（1／40、1／3）

SU045（第18図、写真23・40・41）

4区で検出し、SU038・SC037→SU045の関係となる。西側は調査区外となり未掘であるが、南北長2.6mを測り、床面までの深さは70cmである。床面は北側が平滑となり、南側は工具痕状の細かな凹凸が残っている。また、南側隅では床面直上から蛤刃石斧が出土している。このほか、弥生時代前期後半～末の甕・壺・椀が出土している。

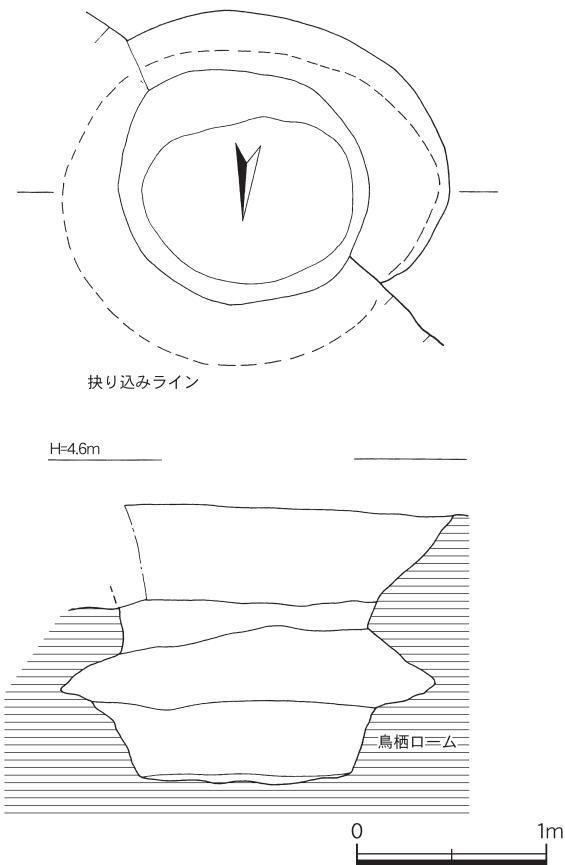
出土遺物（第18図） 94は平底に作るが厚手の底部である。95～97は平底の底部である。97には外底から穿孔を行ったような略円形の剥落痕跡が残っている。98は外底中央がわずかに窪み、焼成後の穿孔が行われている。99は剥落の進んだ甕上半部である。口縁部の屈曲は強く、端部は丸く納めている。100は小形の椀である。101はほぼ完形の玄武岩製太形蛤刃石斧である。

SU048（第19図、写真42）

4区で検出する。平面的に埋土がSC037に類似していた（ロームブロックを多く含む暗褐色土）ため、同時に掘削を行い、SC037の床面を検出した時点で別遺構の存在に気がついたものである。小口部中央に一对のピットがあり、これから復元すると、東西長2.5m、南北長1.4mの隅丸長方形となる。本遺構の遺物として取り上げ得たものはなく詳細な時期は不明であるが、両短辺側に柱を持つという構造上の共通性を有するSU025・042の帰属時期である弥生時代前期後半～末の可能性を考えておきたい。

SU049（第19図、写真43）

4区、SU025の床面で検出し、これに先行するものと考えられる。長軸1.7m、短軸1.45mの、平



第20図 SE024実測図（1／40）

面隅丸長方形を呈する。埋土は黒褐色土とロームの1：1混合土で、壁面は2段の掘り下げとなり、中途に狭い平坦面を有している。遺物は僅少で、甕・壺の破片が3点、黒曜石剥片が1点出土する。弥生時代前期中頃を考えておきたい。

出土遺物（第19図） 102は壺の上半部である。口縁部の屈曲は緩やかで、外面には明瞭な段を有し、内外面ミガキによる調整を行う。にぶい黄橙色を呈し、胎土には石英砂粒を少量含んでいる。

3) 井戸 (SE)

SE024 (第20図、写真44・45)

3区で検出する。上面径1.2～1.3mの略円形を呈し、検出面から底面までの深さは1.4mである。埋土は検出面から20cmほどは黒褐色土、20～50cmは炭化物を僅かに含む茶褐色土、以下は灰色粘質土である。壁面は内傾するが、標高3.4m付近で湧水のための抉り込みが認められる。井戸の痕跡は確認できなかった。出土遺物はほとんどなく、最上層の黒褐色土より、胎土・焼成等から弥生時代前期～中期と判断できる小破片が2点出土するのみであり、詳細な時期は不明である。

4) 土坑 (SK)

SK003 (第21図、写真46・47)

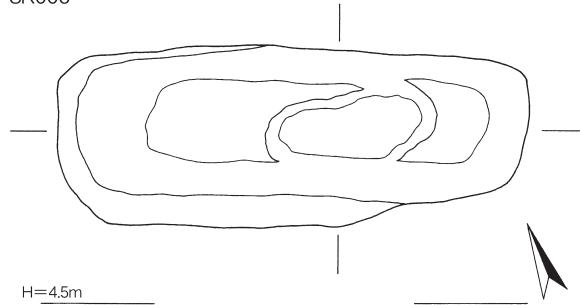
1区東側の緩斜面部で検出する。この上面には包含層が堆積しており、本来はこの上面から掘削されていたものと考えられる。平面は70×185cmの隅丸長方形である。また、壁面はほぼ直立し、均整の取れた掘り方を呈している。底面には中央やや東側に深さ10cmほどの掘り込みを有する。埋土は基本的にロームを混合した暗褐色土で、8層の粘性土は掘削後に一定期間開口されていたことを示し、4～7層はしまりがなく、人為的に埋め戻したものと考えられる。当初掘り方の類似性などからSK004と同様の遺構である可能性も考えたが、柱痕跡は確認できていない。小破片が10点程度出土するのみで、時期は不明瞭である。

出土遺物（第21図 103・104） 103は口縁部破片である。浅黄橙色を呈し、胎土には1～2mmの石英微砂粒を多く含む。104は脚裾部であろうか。赤褐色を呈し、胎土には石英微砂粒を多く含んでいる。

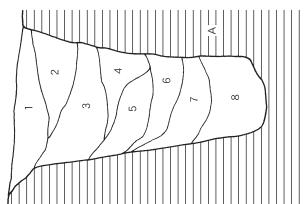
SK004 (第21図、写真48～55)

1区西側で検出する。長軸215cm、短軸65～75cmを測り、平面隅丸長方形を呈する。断面形状は西側に向かってスロープ状に深くなり、検出面からの深さ110cmを測る掘り方の西端部には木柱が残存している。柱は松材と考えられ、現状で直径40cmを測るが、周辺の腐食土層（1層）を考えると、本来はもう一回り大きな径50cm程度の材であったものと考えられる。柱は根元に切断のものと考えられる痕跡が残り、底部から30cmほど上面に一辺10cm程度の角孔を穿っている。現存する角孔より上部では製材の痕跡は認められず、表皮自然面を残したまま埋め戻されている。柱は掘り方の西側壁

SK003

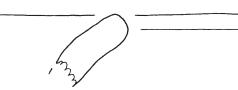
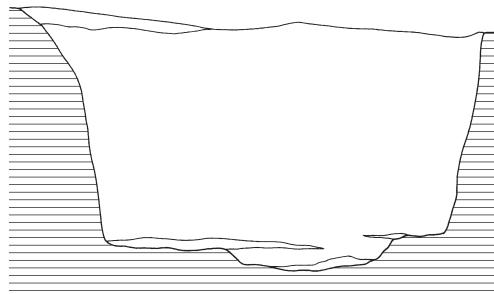


H=4.5m



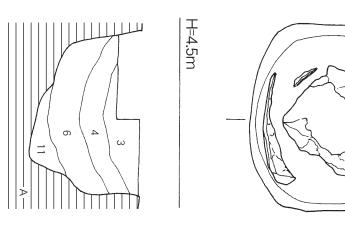
- 1 ローム粒含む暗褐色土
2 暗褐色土にロームブロックを含む
3 暗褐色土に大きめのロームブロックを含む
4 暗褐色土と暗黄褐色土混合 (1 : 2)
5 暗褐色土と暗黄褐色土混合 (1 : 1)
6 暗褐色土
7 暗黄褐色土
8 黒色土 (粘性が強く、べたべたしている)
A 鳥栖ローム

103

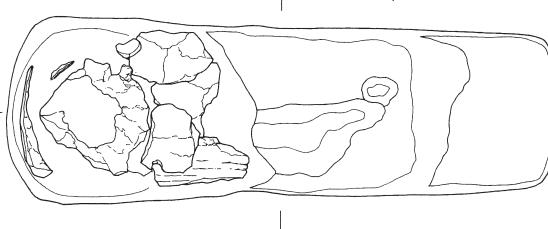


104

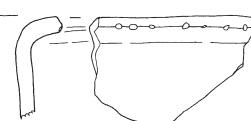
SK004



H=4.5m



105

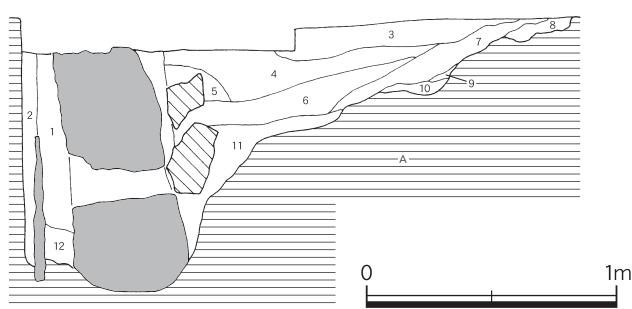


106



107

H=4.5m



0 1m

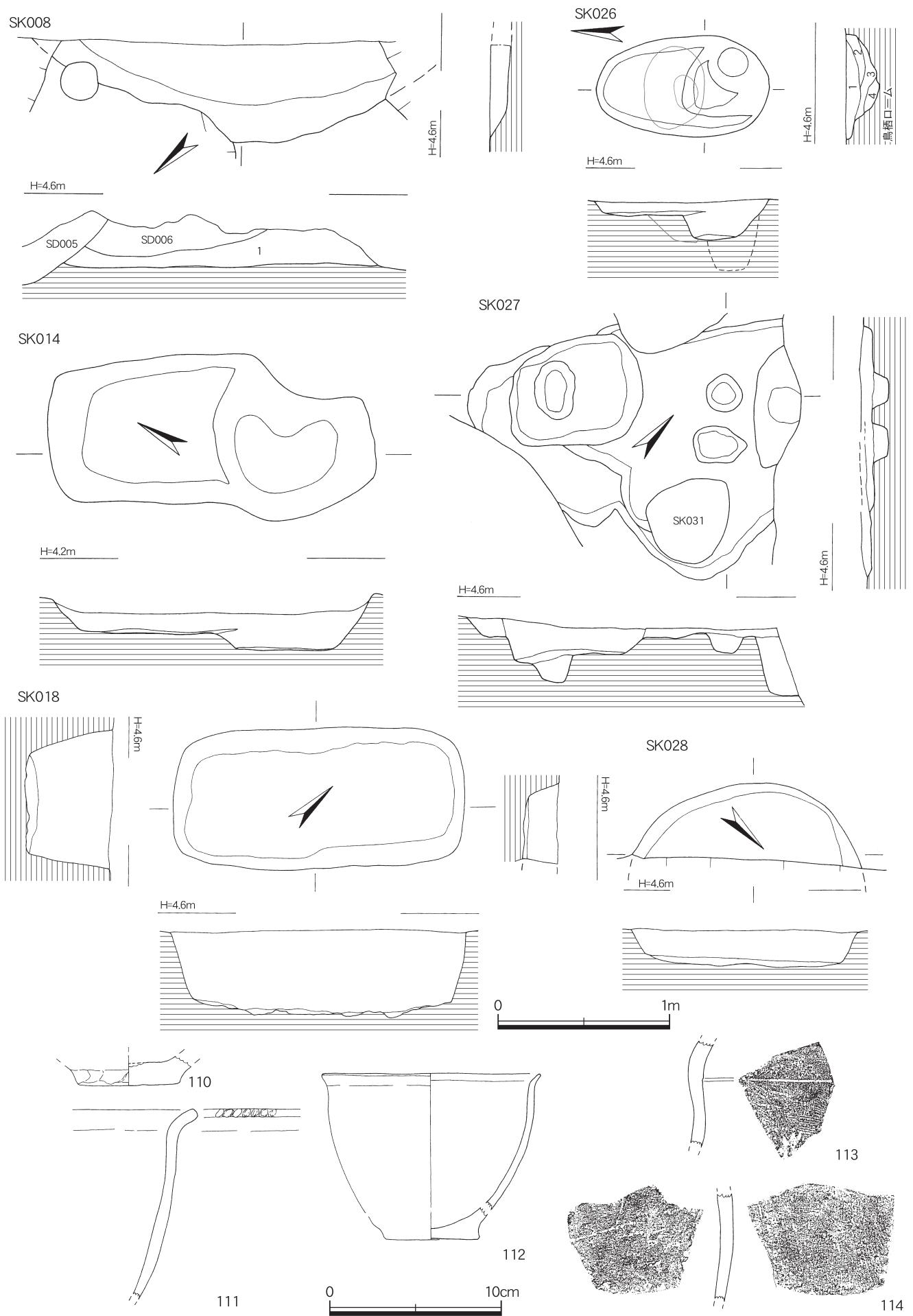
- 1 灰色粘質土 (木痕)
2 にぶい赤褐色土
3 暗褐色土と赤褐色土混合 (3 : 1)
4 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
5 灰味の強い暗褐色土 (ロームブロックを含む)
6 4層にほぼ同じ
7 灰味を帯びた暗褐色土 (ロームブロックを含む)
8 暗褐色土
9 暗赤褐色土
10 黒褐色粘質土 (べたべたしている)
11 10層に同じ
12 ロームブロックを含む黒褐色土
A 鳥栖ローム

0 10cm



109

第21図 SK003・004及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第22図 SK008・014・018・026・027・028及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)

にはほぼ沿うように立てられたものと考えられるが、壁面との間にはやや湾曲した厚さ5cm弱の板材をはめ込んでいる。またスロープ側には埋め戻しにあわせて、人頭大の自然礫4個を据えることによって柱の安定を図っている。遺物は土器小破片および黒曜石・玄武岩剥片が出土している。土器片は弥生時代前期末に位置付けられるものである。本調査区および隣接する調査区にも、この柱に対応する遺構はなく、遺構の特異性からも、本遺構は単独の立柱遺構と考えられる。周辺では比恵遺跡群第35次調査検出の方形周溝墓に伴う立柱遺構が存在し、この場合は埋葬遺構に伴うものと理解できる。同様に今回も隣接する4次調査区において中期の甕棺墓群が確認されており、SK004については時期を含めて、その意図について更に検討を必要とする。

出土遺物（第21図 105～109） 105は平底の底部である。外面に縦刷毛を行い、外底面にはヘラ状工具による削り痕跡が残る。106は如意状の口縁部である。端面の刻みは下端部に行われている。107・108は断面三角形を呈する口縁部である。共に胎土には径2mm程度の石英砂粒を多く含む。109は壺の肩部である。外面ミガキを行い、三条の沈線が認められる。

SK008（第22図、写真56）

1区で検出する。上面をSD005・006及び搅乱に大きく削平され、大半を調査区外に伸ばしている。埋土は暗褐色土（1層）で平面は円形を呈するものと考えられ、床面はほぼ平坦となる。出土遺物は弥生土器と考えられる小破片が7点のみで、詳細は不明である。

SK014（第22図、写真57）

1区東側の緩斜面部で検出する。幅80cm、長さ190cmを測り、埋土はロームブロックを含む灰褐色土である。平面的には不整形となっており、底面も南側が一段深くなっている。埋土から近世以降の可能性も考えられるが、出土遺物は弥生時代の土器小破片が10点程度出土するのみである。

SK018（第22図、写真58）

2区で検出する。長軸170cm、短軸80cmを測り、平面隅丸方形を呈する。壁面はほぼ直立し、底面には工具痕による凹凸が多く残っている。埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。遺物は土器片、黒曜石剥片2点が出土しており、弥生時代前期中頃に位置付けられるか。

出土遺物（第22図 110～112） 110は平底の底部ある。側面には指押さえの痕跡が残る。111は甕である。口縁部は短く屈曲し、端面全面に刻みを行う。胴部の膨らみは少ないようである。色調は褐色を呈し、石英微砂粒を非常に多く含んでいる。112は接合部位がないが、色調・胎土の類似性などから同一個体とした。底部は円盤状に立ち上がり、口縁端部は短く屈曲する。

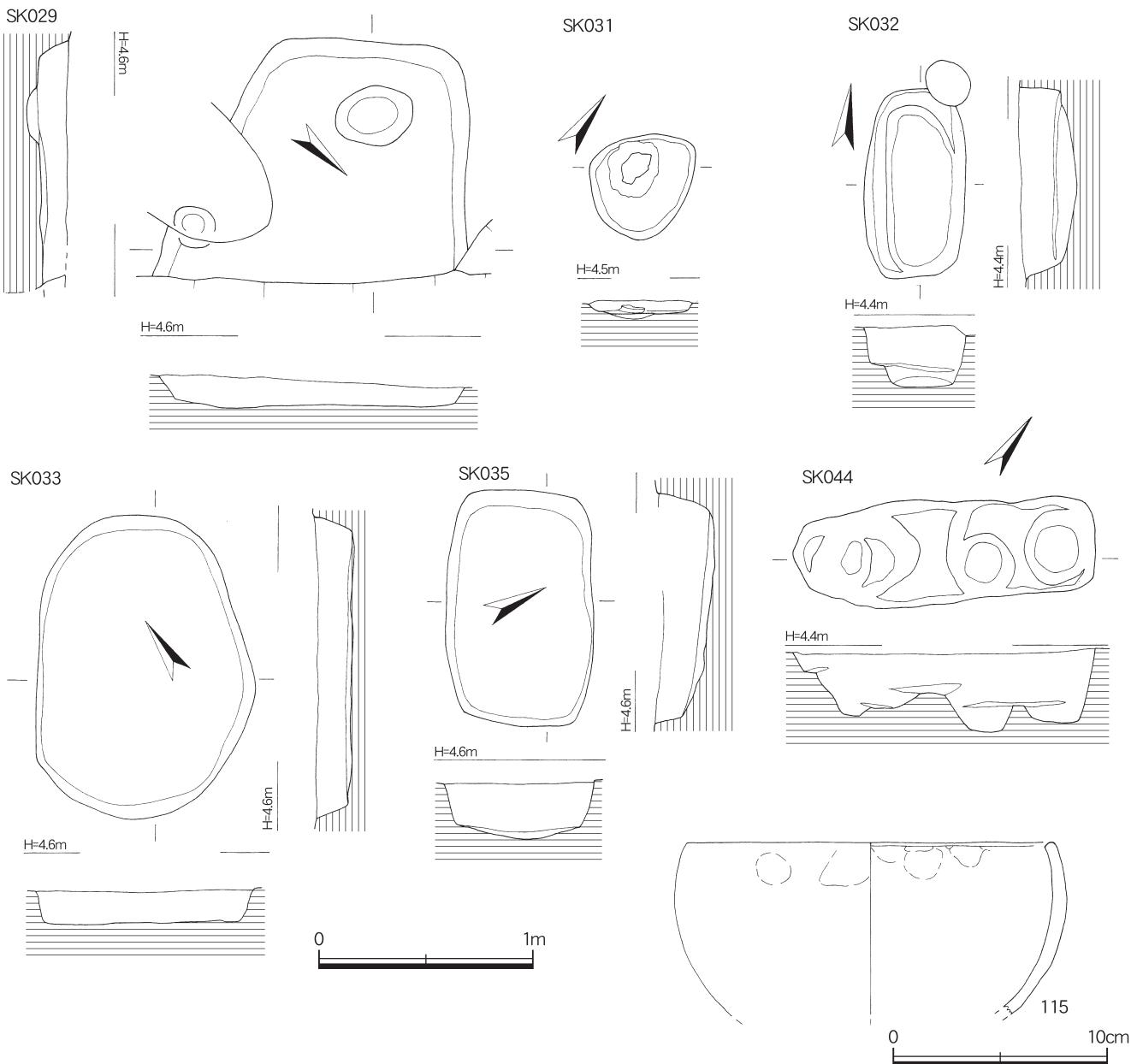
SK026（第22図、写真59～61）

3区で検出し、SK027・029を切る。平面は長軸100cm、短軸60cmの長円形を呈する。埋土は1層：炭化物・焼土塊を含む暗褐色土、2層：1層より暗い、3層：炭化物を多く含む灰褐色土、4層：鳥栖ロームと灰褐色土混合（1：1）であり、底面検出後に中央部に汚れた赤褐色土による掘り込みを確認した。SK031と埋土が類似しており、関連の遺構と考えられる。土砂は全量採取し水洗後磁選を行い、砂鉄を採集している。遺物は土器小破片と黒曜石剥片が出土しており、弥生時代中期までに位置付けられる。

出土遺物（第22図 113・114） 113は如意形の口縁部を失った甕である。外面には横刷毛を行い、一条の沈線を有する。114は胴部破片である。内面には横方向のヘラナデ、外面は縦刷毛を行う。外面にぶい黄橙色を呈し、胎土には石英砂粒を少量含む。

SK027（第22図、写真59・62）

3区で検出する。炭化物を含む暗褐色土が不整形に広がっており、これを掘り下げたものである。



第23図 SK0029・031・032・033・035・044及び出土遺物実測図（1／30、1／3）

床面までの深さは10cm程度で、床面はほぼ平坦である。この床面上からSK031を検出しているが、前後関係は不明である。弥生土器の小破片が7点、黒曜石剥片が1点出土するのみである。

SK028 (第22図、写真59・63)

3区で検出し、SK029→SK028の関係となる。東側を搅乱で失うが、直径1.5m程度の円形に復元できる。検出面からの深さは20cmで、床面は平坦、断面浅皿状を呈する。埋土は暗褐色土でロームブロックを多く含んでいる。遺物は小破片が1点出土するのみである。

SK029 (第23図、写真59・64)

3区で検出し、SC030→SK029→SK028・026の関係となる。東側を搅乱で失うが、やや歪な隅丸長方形土坑であろう。検出面からの深さは15cm程で、床面は平坦である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土であるが、SK026・027のように埋土に炭化物は含まない。遺物は弥生土器小破片7点、黒曜石剥片1点が出土するのみである。

SK031 (第23図、写真59・65)

3区で検出する。直径45cm程度のやや歪な円形を呈し、検出面からの深さは5cmで、床面は平坦である。床面北西側には20cm程度の範囲で2次的な被熱による地山の赤変化が認められ、その上面には黄白色還元面を上面に向けた壁体の一部が残存している。壁体の底面側は酸化赤褐色を呈している。埋土は炭化物を含む暗褐色土で、SK026に類似する。炉跡の一部と考えられるが、全体の構造・用途は明らかでない。弥生土器片10点程が出土しているが、時期は不明瞭である。

SK032 (第23図、写真66)

3区で検出する。長軸85cm、短軸45cm、検出面からの深さ25cmを測り、平面は均整の取れた隅丸長方形を呈する。埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。図示し得る遺物はなく、弥生土器の小破片が少量出土するのみである。

SK033 (第23図、写真67)

4区北端部分で検出する。長軸140cm、短軸100cmの平面小判形を呈する。検出面からの深さは20cm程度で、壁は直立し部分的に内湾する部分もある。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土である。遺物は弥生土器破片と黒曜石剥片が1点出土している。

出土遺物（第23図） 115は椀である。口縁部は内湾気味に納め、内面には指頭痕が残る。2次的な被熱のためか器面は赤褐色を呈し、胎土には石英砂粒を多く含む。

SK035 (第23図、写真68)

4区南西側で検出する。長軸105cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈する。壁はほぼ直立し、底面は中央部に向かって緩やかにくぼんでいる。埋土は暗茶褐色土で、上層に僅かに炭化物を含んでいる。出土遺物はなく、時期は不明である。

SK044 (第23図、写真69)

4区で検出する。長軸140cm、短軸50cmの長方形の掘り方内に、ピット状の掘り込みが3箇所に残り、布掘り状となる。埋土はロームブロックを含む暗褐色土で、柱痕跡は認められない。対応する遺構が114次調査地点を含めて確認できないため、遺構の性格は不明である。弥生土器破片が7点、黒曜石剥片が1点出土するのみで、時期も不詳である。

5) 周溝状遺構 (SD)

本調査区において5基の周溝状遺構を検出した。形状には円形と方形を呈するものがあり、位置的には2箇所にまとまる。どの遺構からも遺物は出土しておらず、時期は不詳である。同様の遺構が雀居遺跡10・12・13次調査などで確認されている。ここでは弥生時代前期後半以前に位置付けられ、周囲に木杭を打ち込んで作られた家畜小屋の痕跡ではないかと推定されている。

SD022 (第25図、写真70)

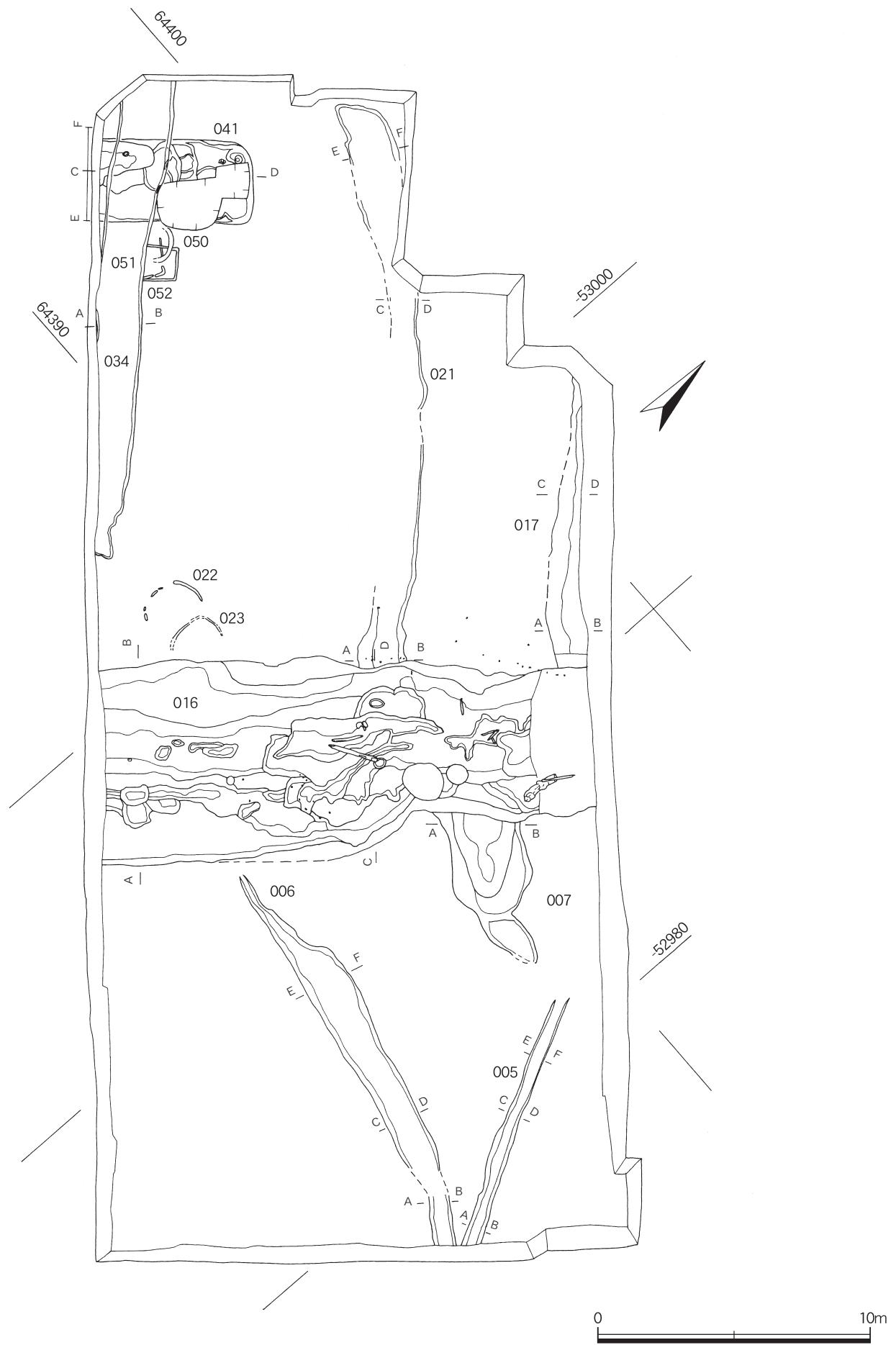
2区で検出する。幅10cm、深さ1～6cmの溝が、径2mほどの円形の半周ほどを断続的に巡る。埋土は暗褐色土である。溝の深さは一定でなく浅い部分については削平により失われたものと考えられる。また、溝内に杭状の小ピットは認められない。

SD023 (第25図、写真70)

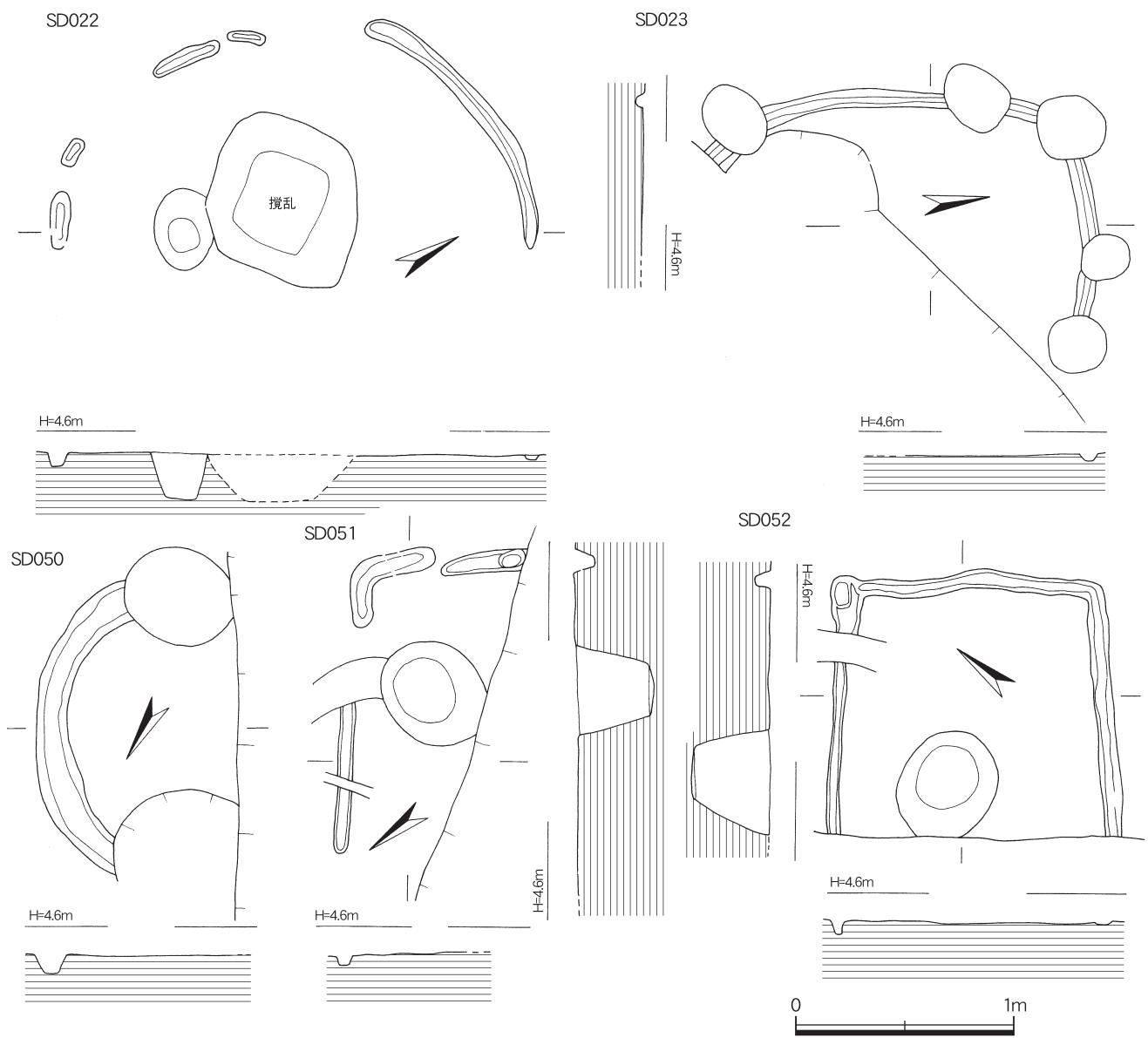
2区で検出する。位置的にはSD022と切り合う関係にあるが、同様の埋土であり、切り合い関係は明らかでない。南側はSC020で不明であるが、(長) 方形を呈するものと考えられる。溝幅は8cm、深さは4cmである。溝底レベルは比較的そろっており、小ピットは認められない。

SD050 (第25図、写真71)

4区で検出する。平面的にはSD051→SD052→SD050として掘り下げを行っているが、埋土が類



第24図 遺構配置図2 (1/200)



第25図 SD022・023・050・051・052実測図（1／30）

似しており、いずれも遺物が出土していないため、不明瞭な点も残る。SD050西側をピットとSD034で南半分を失っているが、平面的には内径1.2m前後の円形に復元できる。埋土は暗褐色土で、溝幅は20cm弱、深さは6～10cmである。

SD051（第25図、写真71）

4区で検出する。方形溝の東側が残存するのみである。埋土は暗褐色土で、溝幅10cm、深さ5cm前後を測る。1ヶ所小ピットが確認された。

SD052（第25図、写真71）

4区で検出する。南北幅115cmの長方形区画と考えられる。埋土は暗褐色土で、溝幅10cm、深さ5cm前後を測る。溝底レベルは比較的そろっており、北側コーナー部分に小ピットを確認している。

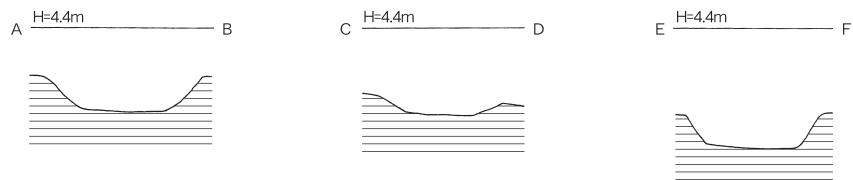
6) 溝 (SD)

SD005（第26図、写真72）

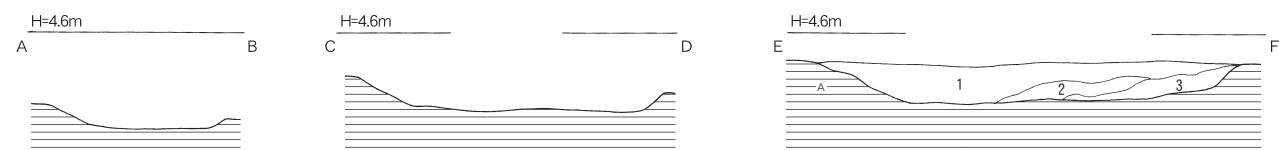
1区で検出し、近世の整地土と考えられる灰褐色土を切って掘削され（第5図参照）、南北方向に

伸びている。断面は浅皿状を呈し、埋土は灰色土である。本溝は第25次調査SD01の北側延長部分と考えられ、大正末～昭和初年作成の地図に明示されており、このころまでは機能していたものと考えられる。

SD005



SD006



SD007



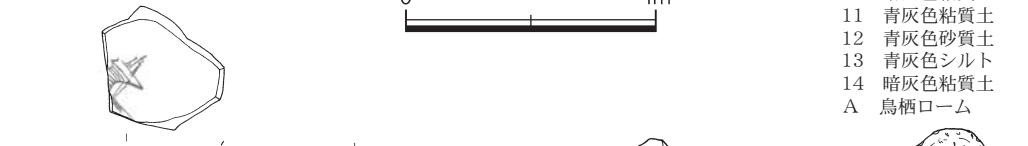
SD006土層

- 1 粗砂混じりの灰色土
- 2 1層に径2cmほどのロームブロックを含む
- 3 1層に同じ
- A 鳥栖ローム

SD007土層

- 1 灰褐色砂質土
- 2 粗砂
- 3 青灰色シルト
- 4 粗砂
- 5 青灰色シルト
- 6 灰白色シルト
- 7 青灰色シルト
- 8 青灰色粘質土（粗砂混じり）
- 9 灰色粘質土
- 10 暗灰色粘質土
- 11 青灰色粘質土
- 12 青灰色砂質土
- 13 青灰色シルト
- 14 暗灰色粘質土
- A 鳥栖ローム

0 1m



116

117

118

122

119

120

121

0 10cm

第26図 SD005・006・007断面図及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

出土遺物（第26図 116～118） いずれも染付の碗である。116は内底見込み、117は外面に施文する。118は外底側面に圈線を巡らし、内底に文様を描く。

SD006 (第26図、写真73)

1区で検出し、各遺構を切って東西方向に伸びる。幅120cm前後、深さ20cmほどを測る。床面はほぼ平滑となり、断面は皿状を呈する。埋土は灰色土を主体とし、粗砂及びロームブロックを混入する。SD016付近では途切れていますが、本来はこの上面を切って伸びていくものである。また、第114次調査SD05の延長と考えられる。出土遺物は弥生前期～中期土器を主体としてコンテナ2箱分出土しており、須恵器も2点含まれる。埋土から更に時期的に下る可能性も考えられるが、今回の調査では不明瞭である。なお、第114次調査SD05は中世に位置付けられている。

出土遺物（第26図 119・120） ともに須恵器破片である。119は摩滅の著しい高台付き椀である。120は甕の口縁部である。端部は玉縁状に作る。

SD007 (第26図、写真74)

1区で検出し、本来はSD016を切っている。形状は不整形で北側に向かって溝幅も広がっている。北端部では幅3m程、深さ40cmを測る。埋土は粘質土・シルト・粗砂が互層状となり、底面には凹凸が残っている。出土土器は小片で弥生時代前期～中期のもののみであるが、SD006同様埋土から新出の遺構である可能性が高い。

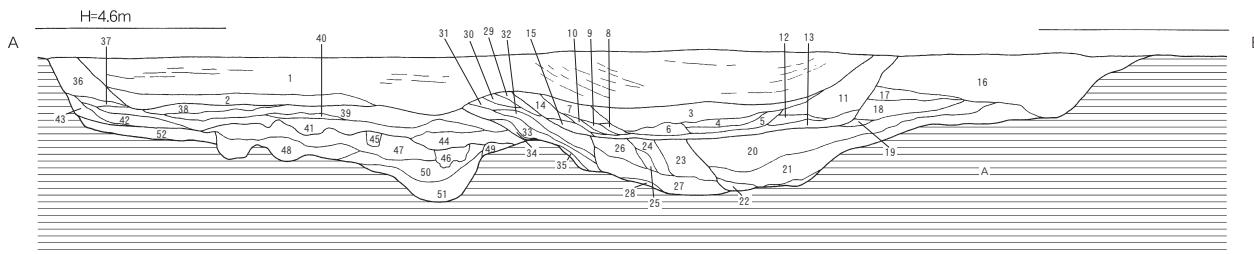
出土遺物（第26図 121・122） 121は滑石製の円環状石錘である。約1／2が残存しており、重量は640gを測る。122は現状で断面蒲鉾型を呈する石器破損品である。全面に敲打痕を残す。

SD016 (第27図、写真75～84)

2区で検出する。調査区を直線的に横断する溝で、溝幅5～7mを測る。南側に位置する第4次調査検出の「水路」の北側延長部分と西側の第114次調査検出のSD02が切り合う部分と考えられた。遺構面では中央から西側では北側、東側では中央部に流水の痕跡を示す粗砂層が堆積し、西側から中央あたりまでは、これを切るように、上層にシルト層を中心とした堆積層が確認できた（西壁1・2層、中央1～11層）。このシルト層からは中世陶磁器類が出土しており、016Aとして遺物を取り上げている。016Aは幅5m、深さ40cmを測り、断面は浅皿状を呈する。また西壁では堆積に複数の単位が観察できた（3～15層、16～22層、23～28層、29～35層）、これらはそれぞれ埋土に粗砂を多く含み、流水による埋没の段階を示しているものと考えられる。調査時にはこれらをまとめて016Bとして取り上げた。016Bは幅5m程度を測り、両壁は斜方に掘削されている。全体に北側底面がより深くなるが、この部分で検出面からの深さ1mほどである。底面はランダムにくぼんでいるが、基底面レベルは標高3.4m前後である。残りの粘質土を主体とした36～51層については大きく二つの堆積層に分けることができ（36～44層、45～51層）、もっとも後出する堆積層として016Cとした。これを中央土層と対応させると016Aが中央1～11層、016Bが中央12～27層、016Cが中央28～40層となる。なお、既調査溝との位置関係や堆積層の相違などから、調査後の検討により粘質土～シルトを主体とした016Cの上層（西壁36～44層）については016Bに含めるべきものと判断しているが、遺物については分別し得ていない。016Cは調査区西端では016Bの下位に幅2m、深さ60cm程残存しているが、中央では幅5mとなる。底面の凹凸は著しく、基底面レベルも谷部に向かって低くなっている。中央底部には杭が12本程度確認できたが、機能については明らかでない。

出土遺物については016全体でコンテナ40箱出土している。016Aからはコンテナ4箱出土している。弥生時代前期～古墳時代前期までの土器片とともに中世前半代の青磁・白磁が数点出土しているが、SD006との切り合い関係もあり、帰属については明らかでない。また、016Bは出土遺物の大半

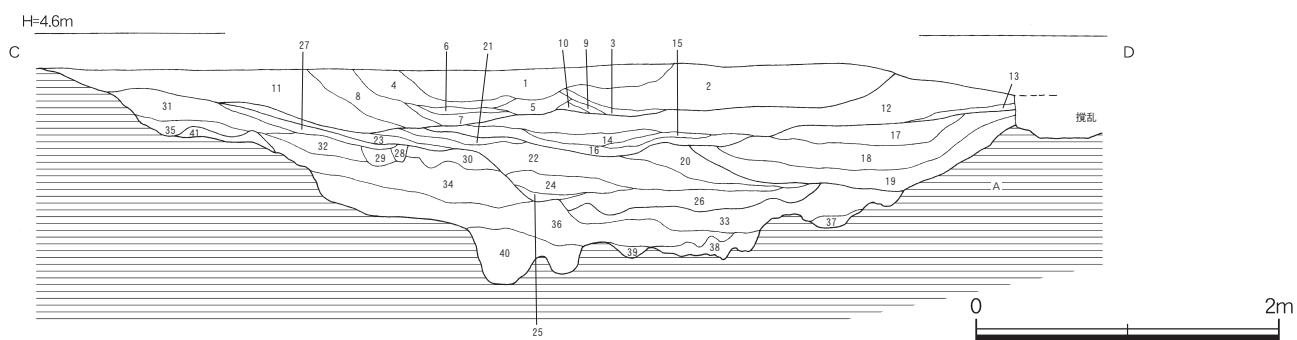
SD016 西壁土層



SD016西壁土層

1 黄灰色シルト～粘質土（粗砂がラミナ状にはいる）	18 粗砂	36 暗褐色粘質土
2 黄灰色シルト（細砂がラミナ状にはいる）	19 灰色粘質土	37 灰色粘質土
3 灰色粘質土（粗砂含む）	20 粗砂	38 灰色粘質土
4 灰色粘質土（シルトをラミナ状に含む）	21 粗砂（鉄分が沈着し茶褐色を呈する。遺物を非常に多く含む）	39 褐色シルト～細砂
5 4層に同じ	22 細砂	40 灰色粘質土
6 暗灰色粘質土	23 暗灰色粘質土（細砂を含む）	41 褐色シルト～細砂
7 灰色粘質土	24 暗灰色粘質土	42 灰色粘質土
8 粗砂	25 灰色粘質土（細砂を含む）	43 暗灰色粘質土
9 灰白色粘質土（粗砂混じり）	26 粗砂	44 暗灰色粘質土（粗砂を含む）
10 粗砂	27 暗灰色粘質土	45 粗砂
11 粗砂（黄灰色土ブロックを含む）	28 粗砂	46 粗砂
12 灰色粘質土（粗砂を含む）	29 灰白色シルト	47 暗灰色粘質土（ローム粒を含む）
13 灰色粘質土（粘性が強い）	30 灰色粘質土	48 47層よりやや暗い
14 灰色粘質土（きめが細かい）	31 灰白色シルト	49 粗砂
15 灰色粘質土（粗砂を含む）	32 粗砂	50 暗灰色粘質土（粗砂とローム粒を含む）
16 粗砂	33 暗褐色粘質土	51 50層と同じ
17 粗砂	34 粗砂	52 汚れた赤褐色土（崩落土）
	35 粗砂	A 鳥栖ローム

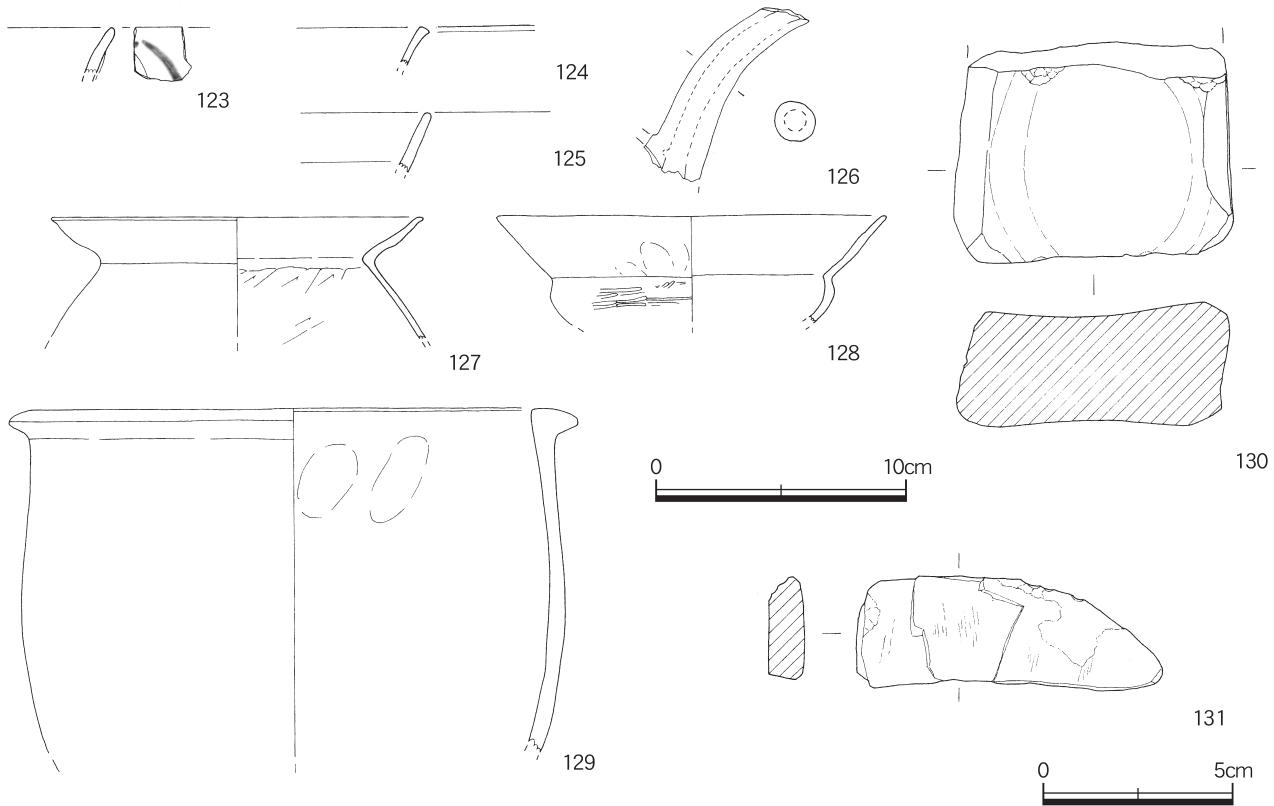
SD016 中央土層



SD016中央土層

1 粗砂混じりの黄灰色シルト	16 暗灰色粘質土（=西壁13層）	30 灰褐色砂質土
2 黄灰色シルト	17 粗砂	31 灰味を帯びた暗褐色粘質土
3 黄灰色シルト	18 粗砂	32 暗灰色粘質土
4 黄灰色シルト（細砂をラミナ状に含む）	（17・18層=西壁16～20層）	33 暗灰色粘質土（粘性強く、ローム粒を僅かに含む）
5 粗砂混じりの黄灰色シルト	19 粗砂（鉄分沈着し茶褐色を呈する =西壁21層）	34 33層と同じ
6 粗砂	20 粗砂	35 暗褐色土
7 灰白色シルト	21 粗砂	36 33層に粗砂を含む (33・34・36層=西壁50・51層)
8 黄灰色シルト（粗砂を含む）	22 暗灰色土に灰色細砂混入	37 暗褐色土（粗砂混じり）
9 粗砂混じりの黄灰色シルト	23 灰色シルト	38 37層と同じ
10 9層に同じ	24 粗砂	39 37層と同じ
11 粗砂混じりの黄灰色シルト	25 暗灰色粘質土に粗砂混入	40 灰褐色粘質土（粗砂・炭化物混入）
12 粗砂	26 粗砂	41 汚れた赤褐色土（=西壁52層）
13 粗砂に黄灰色土ブロックを含む (12・13層=西壁11層)	27 灰味を帯びた茶褐色粘質土に粗砂混入 (=西壁39層)	A 鳥栖ローム
14 青灰色粘質土に粗砂が混入	28 白色砂（=西壁45層）	
15 粗砂	29 暗灰色粘質土	

第27図 SD016土層図（1／50）



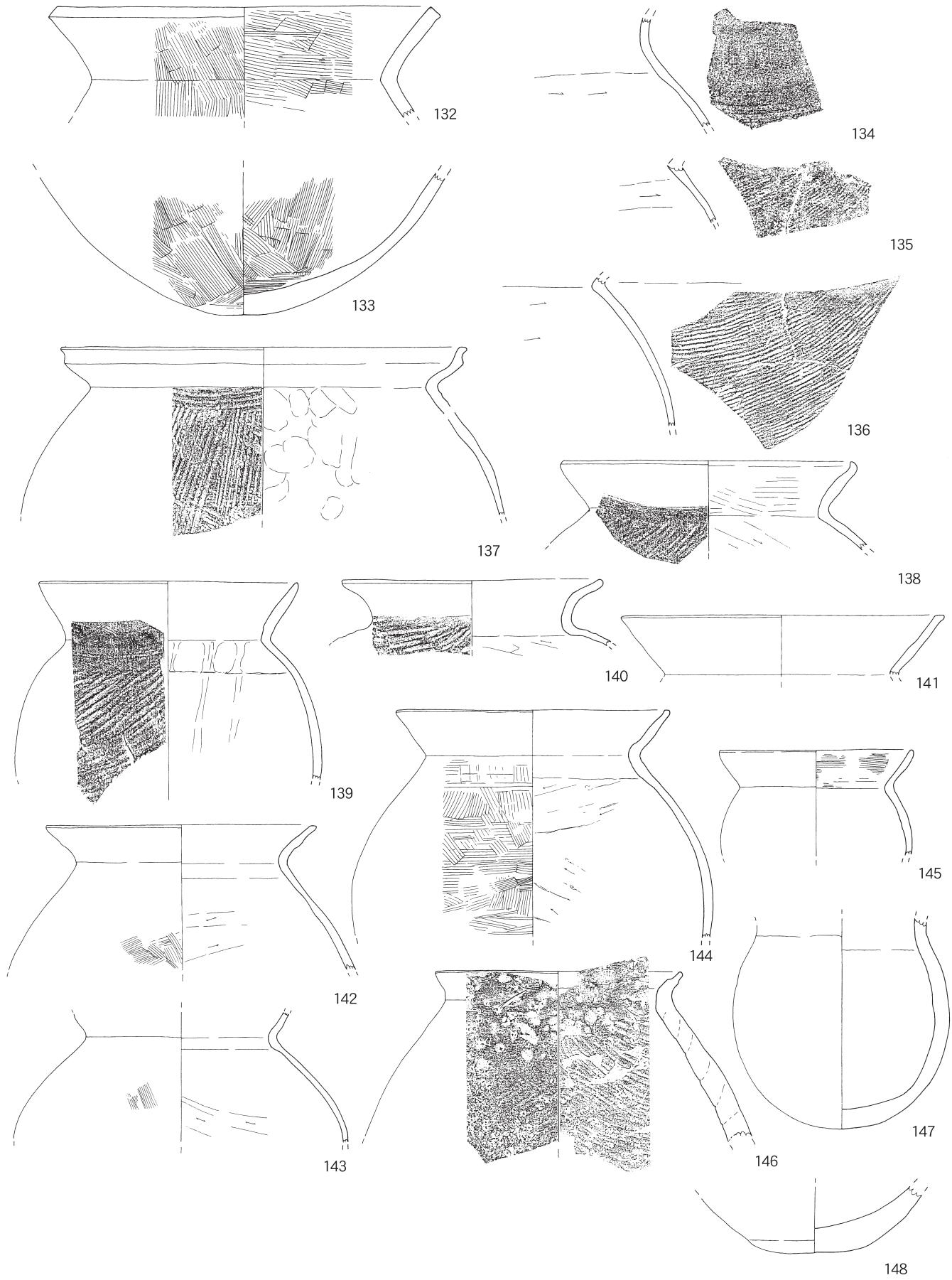
第28図 SD016出土遺物実測図1 (131は1／2、その他は1／3)

を占めるが、弥生時代前期～古墳時代前期の土器と自然木材とともに杭（転用を含む）・陽物形木製品などが出土している。016Cからはコンテナ2箱出土するのみであるが、中央土層以東において、本来016Cで取り上げるべき中央28～40層遺物を016Bで取り上げを行ってしまっている。ただ、本土層中からの遺物は相対的に少量であり、本来的な傾向に変化はないものと考えられる。時期的には弥生時代前期末～中期後半の遺物が出土しており、古墳時代に下るものは現状では認められない。

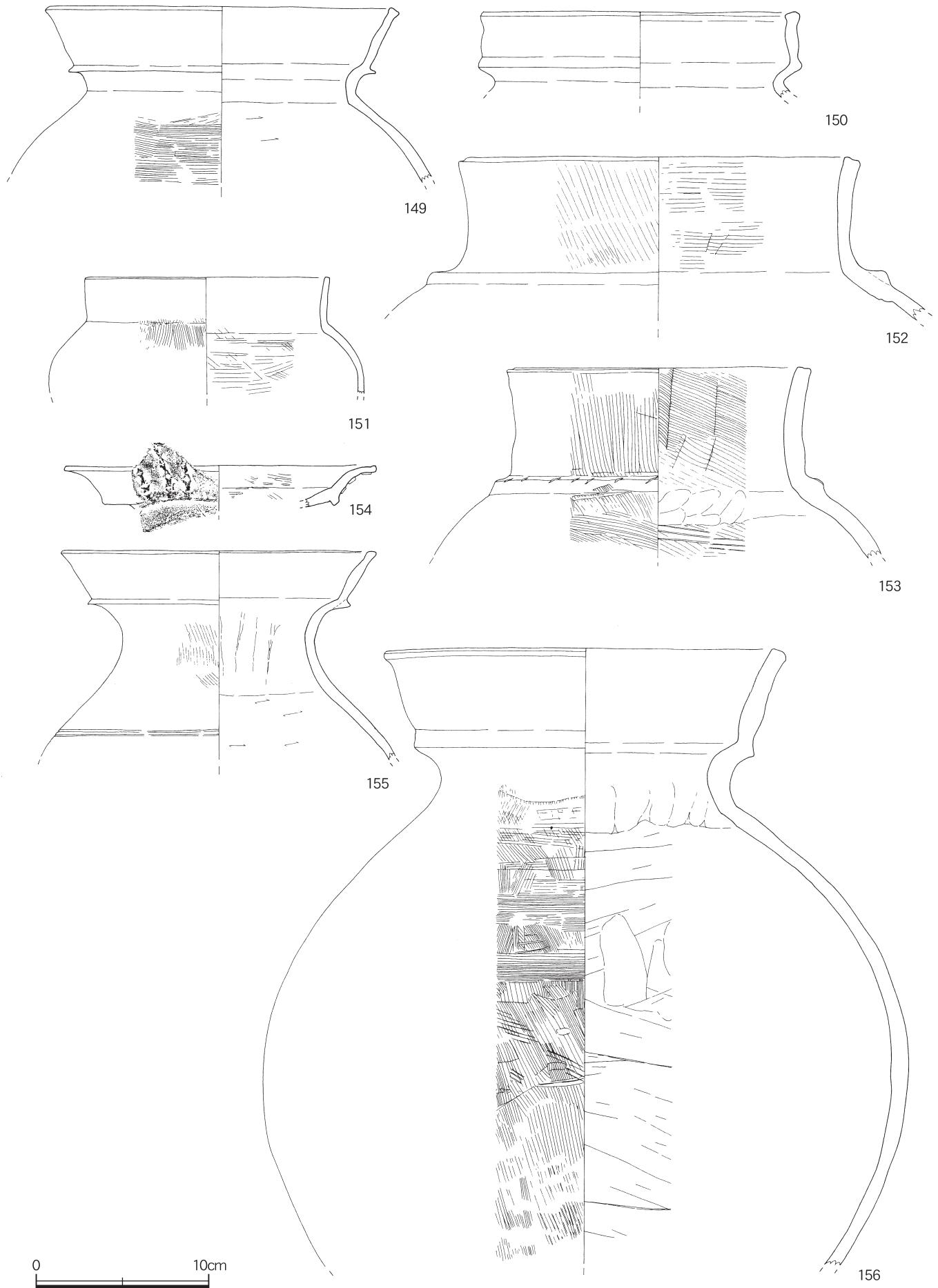
以上の成果から、SD016としたものは長期間にわたる流水の結果形成されたものと考えられ、まず当初は、弥生時代中期後半を上限として自然開析された鞍部に流水や湿地状の堆積により形成されたものと考えられる（016C）。この後、古墳時代前期の第4次調査「水路」の延長部分として引水のための溝が掘削された。この溝は舌状丘陵を南北に貫流するものと考えられるが、鞍部に当たる地点で東側に屈曲することになったものと考えられる（016B）。この溝には流水による多量の粗砂が流れ込んでいるが（西壁3～35層）、屈曲部の内側にはたまりができたためにシルト～粘質土が堆積することになったものであろう（西壁36～44層）。最上層である016Aの埋没時期については、4次調査成果等から古墳時代後期を下限と考えておきたい。なお出土陶磁器類についてはSD006との関連が想定される。

出土遺物（第28～34図） 123～131は016Aの出土遺物である。123～126は中世前半代の陶磁器である。123は龍泉窯系の青磁碗破片である。外面に連弁を片彫りする。124・125は白磁碗の口縁部である。124は端部を嘴状に外側に引き出している。125は端部を丸めており、玉縁状に仕上げる。126は白磁水注の注口である。127は布留式甕、128は精製の椀である。129は弥生時代前期末の甕である。130は砂岩製の砾石、131は石鎌の未製品であろう。

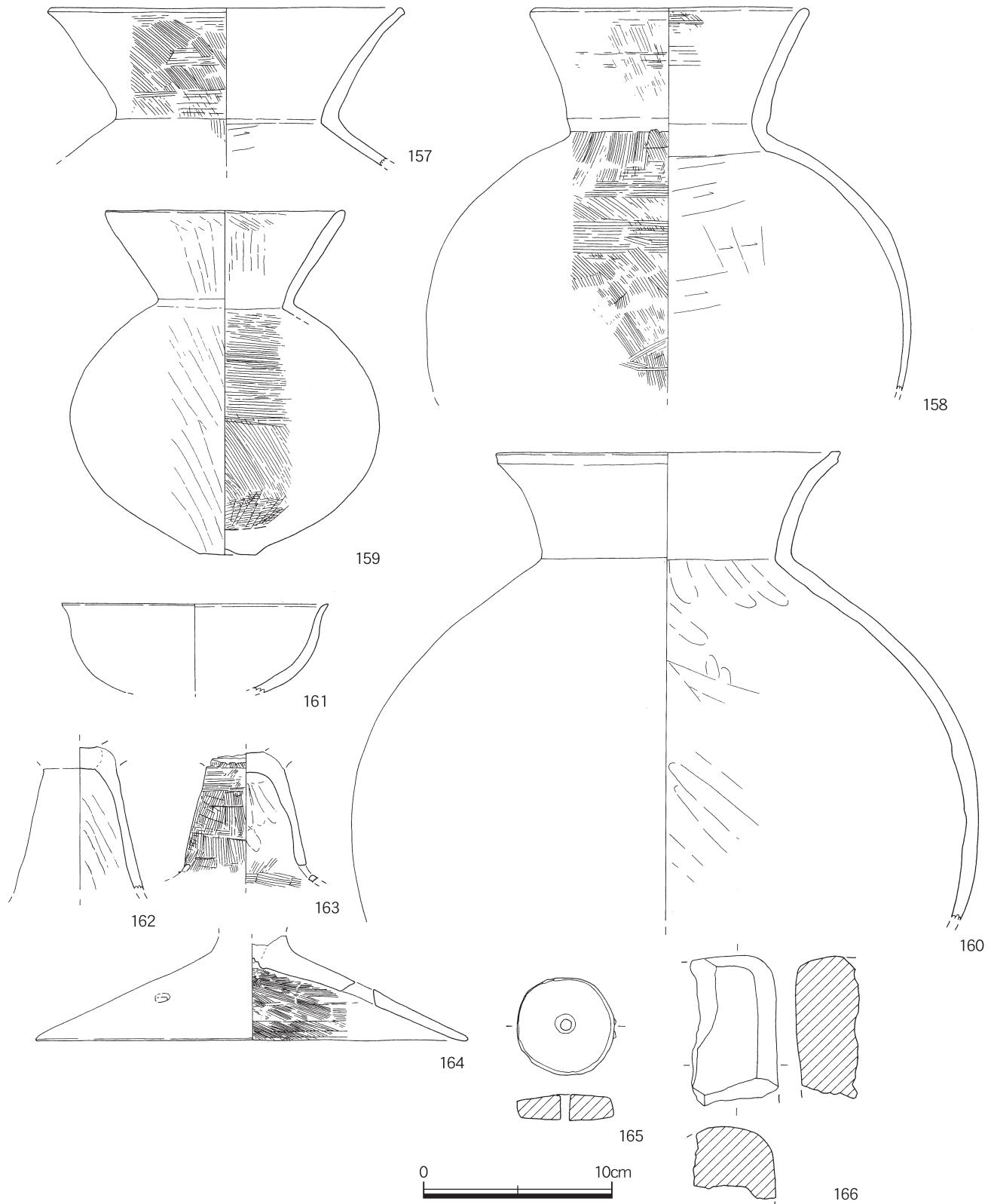
132～196は016Bの出土遺物である。132～150は甕である。132・133は在地の甕である。丸底で内外面刷毛目による調整を行う。134は外面横ナデで沈線状の痕跡が残る。内面は横方向のヘラ削



第29図 SD016出土遺物実測図2 (1/3)

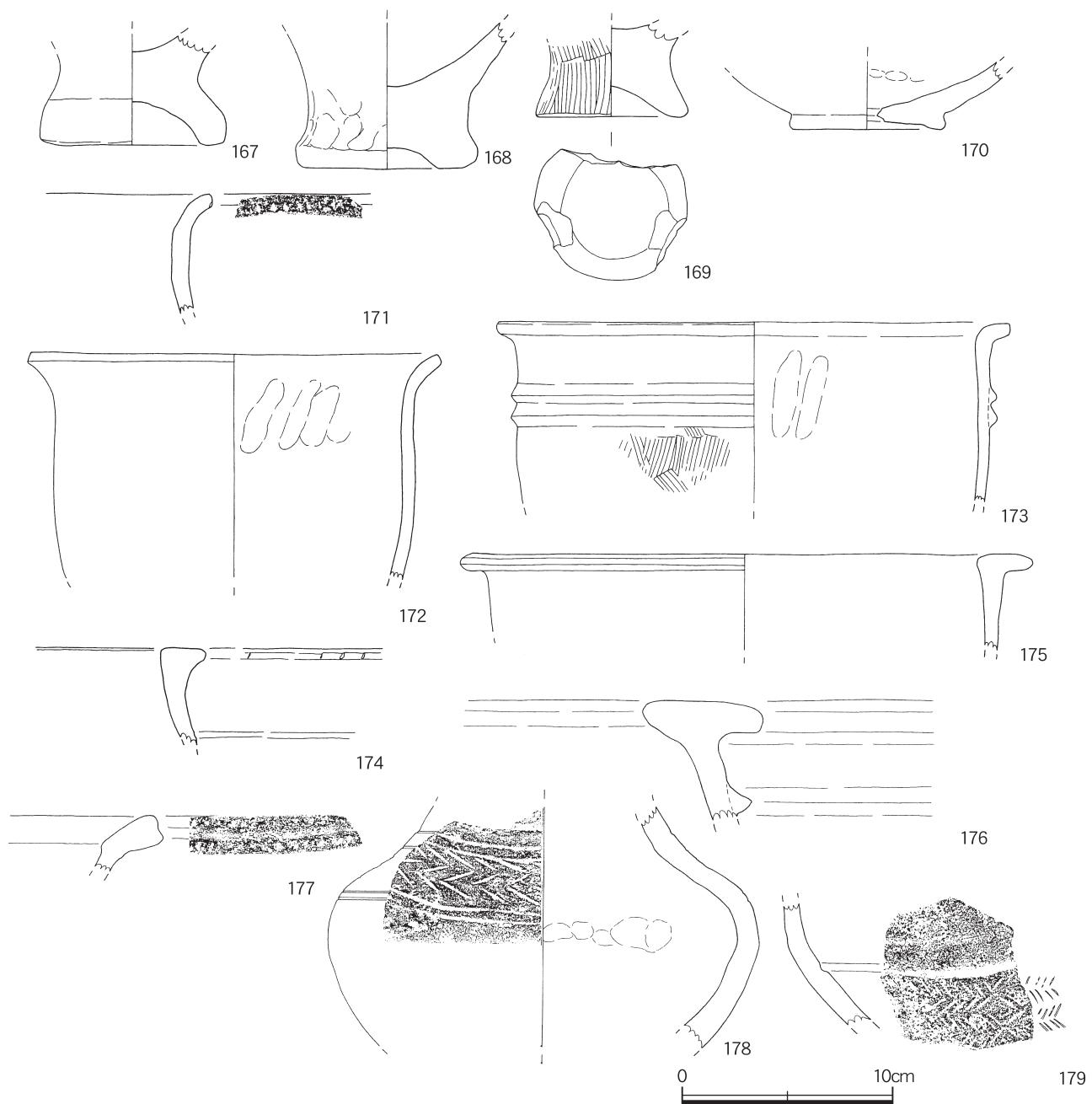


第30図 SD016出土遺物実測図3 (1/3)



第31図 SD016出土遺物実測図4 (1/3)

り。135~140は外面タタキを行う。135・136は細かな斜方のタタキ目、138~140は太い斜方のタタキ目で、137は縦方向及びこれに直交する横方向のタタキ目が残る。内面は137・139がナデ、その他は横方向のヘラ削りである。141~145は内湾気味の口縁部を有する。142~144は外面刷毛目、内面横方向のヘラ削りを行う。146は厚手の器壁に口縁部は短く外反する。外面タタキ、内面は当て具痕が残る。147・148は厚手で、調整はナデによる。149・150は二重口縁を有する。149は外面横



第32図 SD016出土遺物実測図5 (1／3)

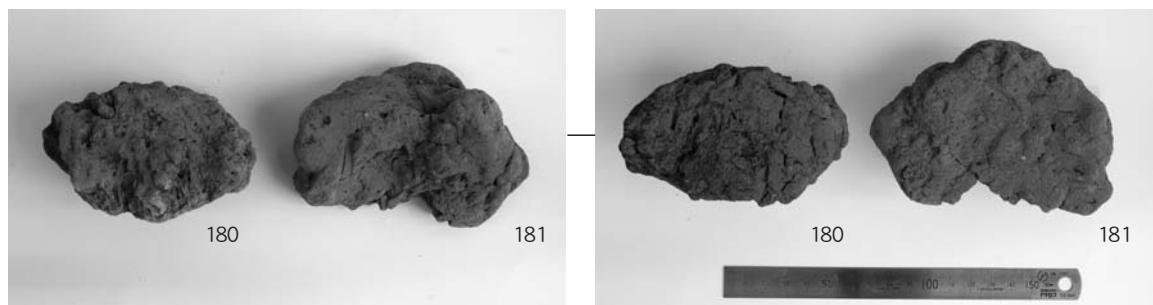
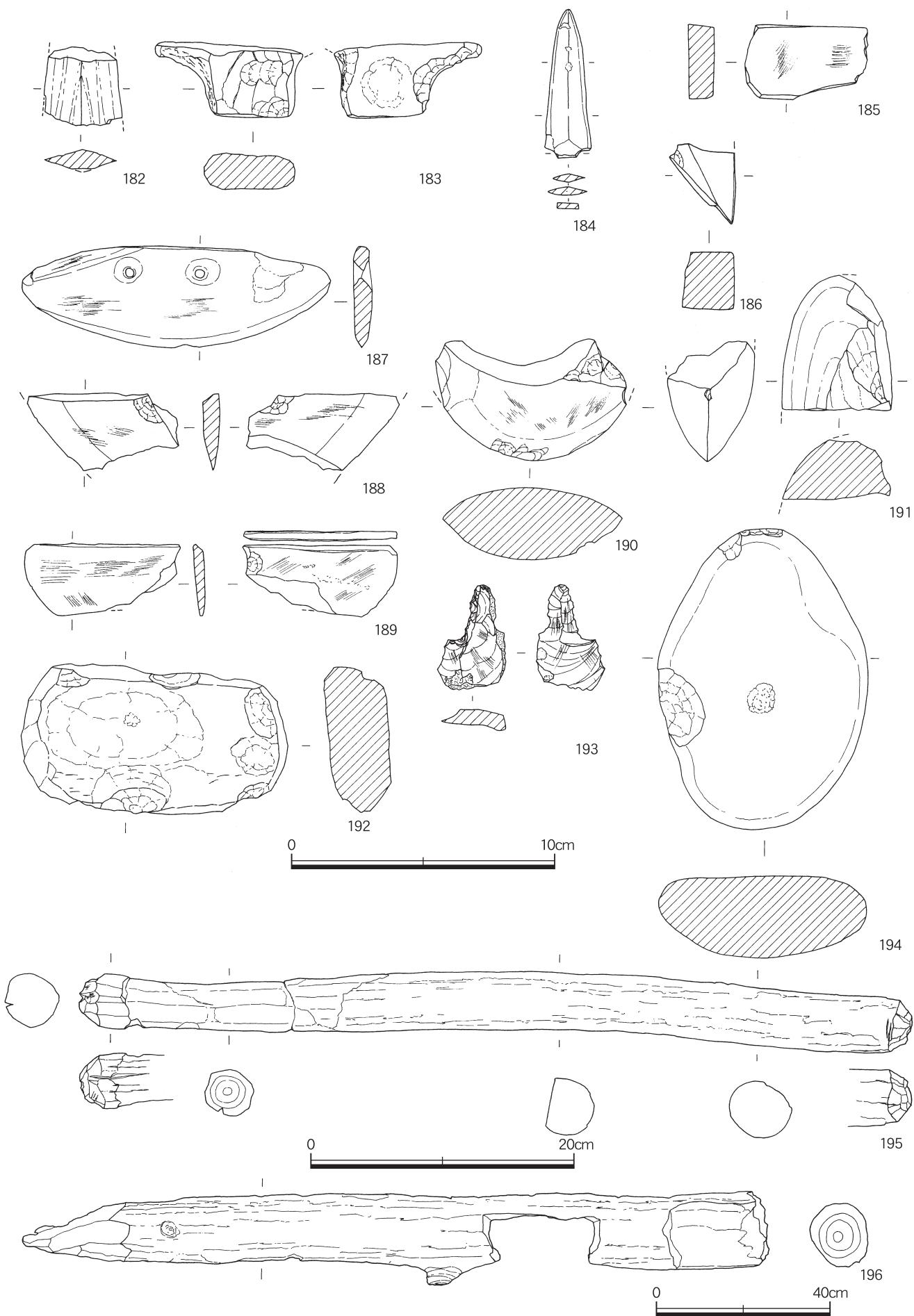
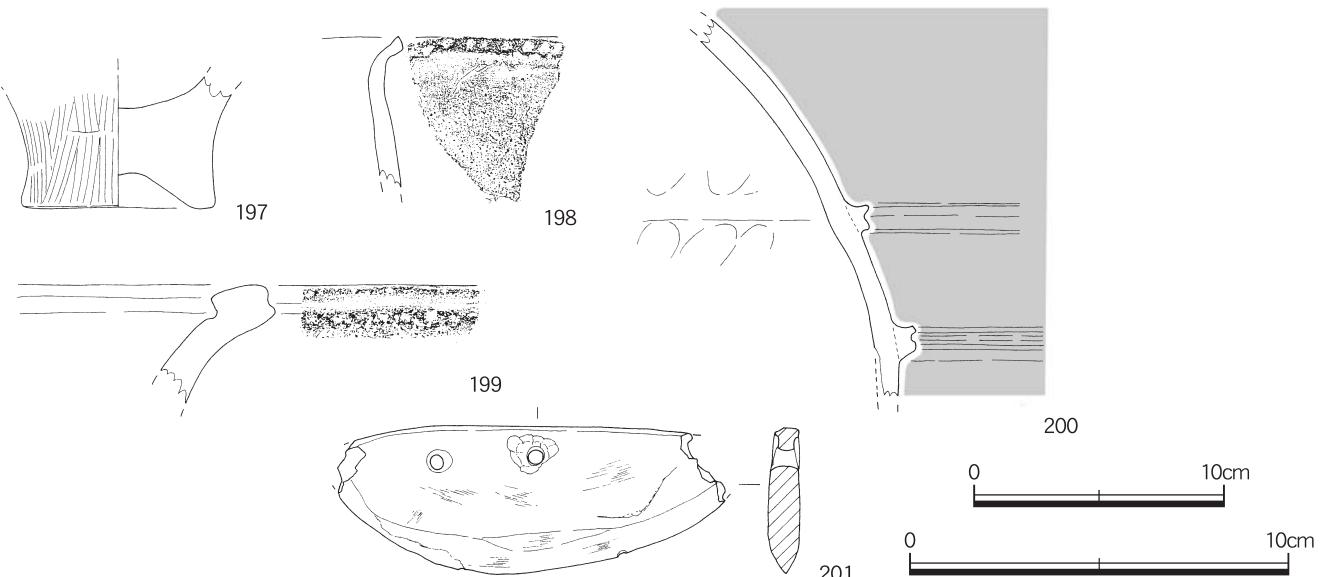


写真3 SD016出土焼土塊



第33図 SD016出土遺物実測図6 (182~193は1/2、194・195は1/4、196は1/12)



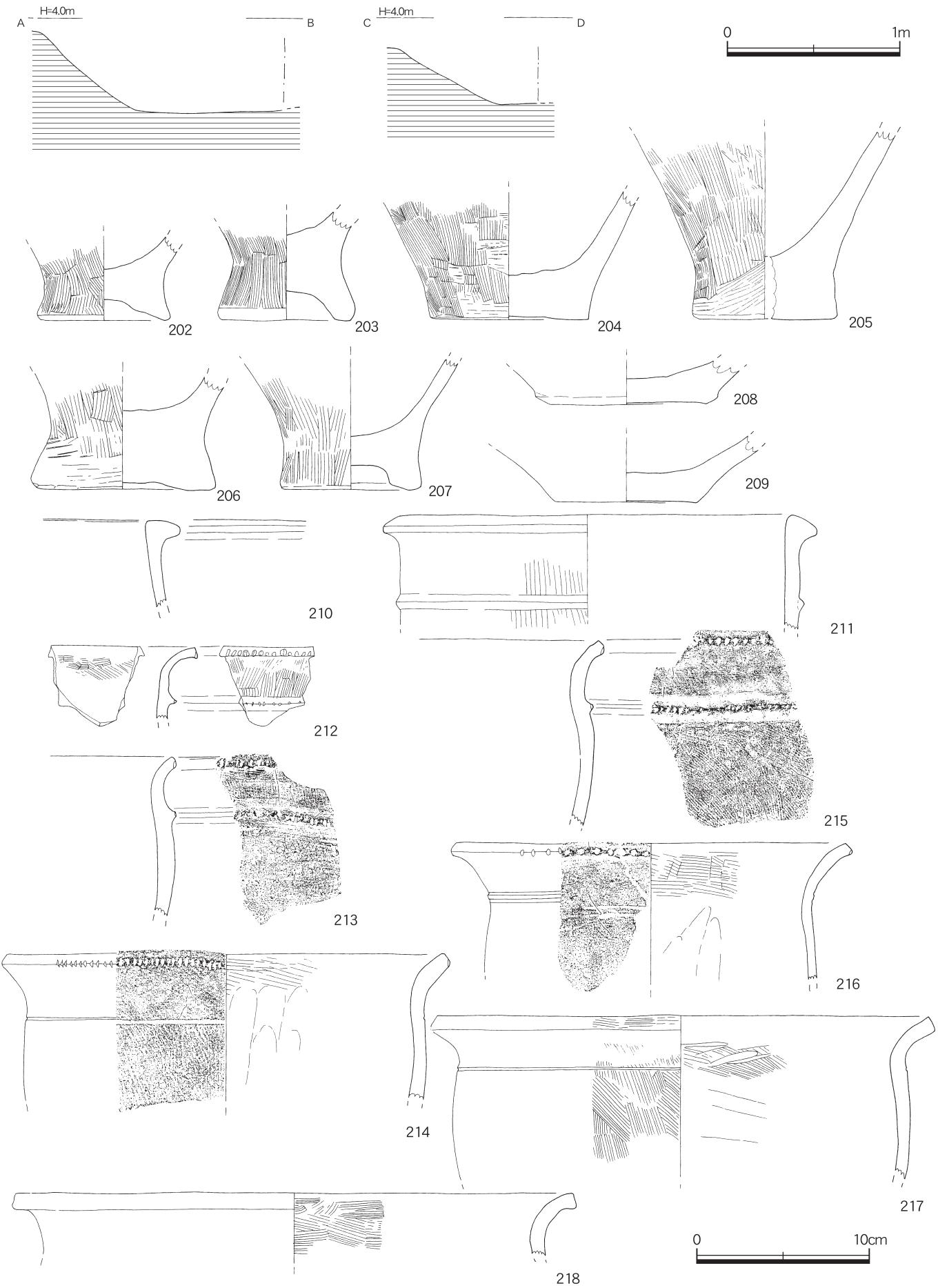
第34図 SD016出土遺物実測図7 (201は1／2、その他は1／3)

刷毛が残る。151～160は壺である。151～153は直口を呈し、刷毛目による調整を行う。154は外面に簾状の浮文を貼付する。155・156はなで肩で偏球形の胴部を有する。157～160は広口の壺である。157・158は外面刷毛目、胴部内面横方向のヘラ削りを行う。159は小さな平底を有する。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。調整は胴部内面は全体に横方向の刷毛目が施され、口縁部内面は縦方向にミガキ状の痕跡が残る。また外面もヘラ状工具によるナデを行うが、胴部上半ではミガキ状となっている。160は口縁部外面は面取りを行い、調整は内外面ナデを行う。161は椀である。端部は外反し、横方向のナデを行う。162・163は高坏筒部である。163は外面縦刷毛から横刷毛を行う。164は脚裾部破片である。復元すると3箇所に焼成前穿孔が行われている。外面横ナデ、内面螺旋状の刷毛目を行う。165は完形の土製紡錘車である。166は中実の棒状土製品である。断面は略方形に復元でき、下方がわずかに広がる。167～179は弥生時代前期～中期の遺物である。180・181はスサ入りの壁体である。厚さ5cmほどで、外面は酸化赤褐色であるが、内面は還元を示す灰白色を呈する。同様の壁体破片がこのほか10個ほど出土している。

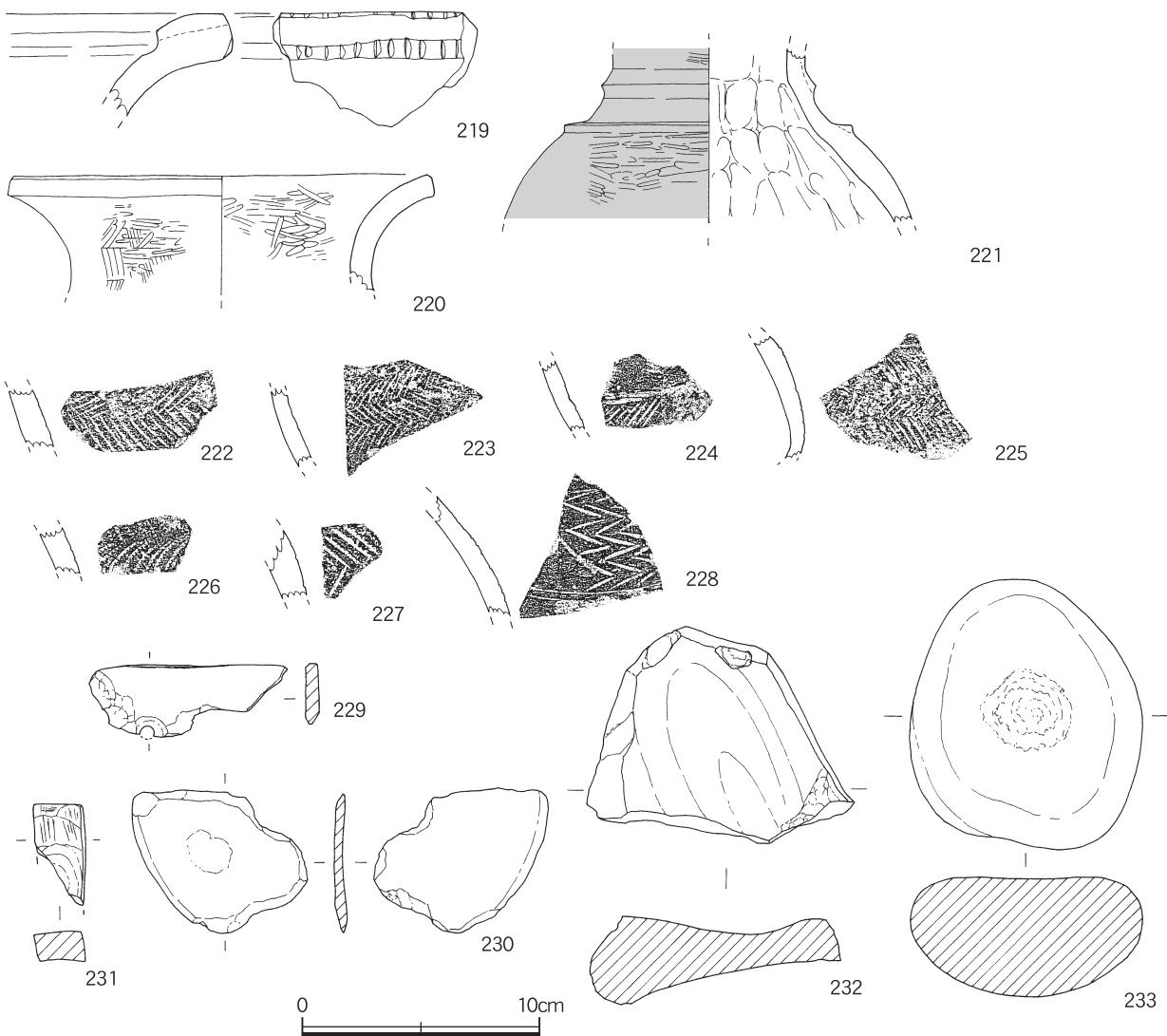
182～194は石器である。182は鎧を有する石剣破損品である。183は石戈の基部であろう。184は鎧を有する磨製石鎌である。185は砥石である。186は柱状片刃石斧の先端部破損品である。187・188は石包丁である。187は滑石製で、孔芯間は2.5cmを測る。188は刃部の一部が残り、穿孔途中で廃棄されている。189は不明の板状製品である。両側からの擦り切り痕跡が残り、両面共に磨き痕が残る。190・191は玄武岩製蛤刃石斧の刃部破片である。192は板状の両長側辺部に抉りが認められ、石錐と考えられる。193は側縁部に使用痕剥離が残る。また、先端部も使用により潰れている。194は花崗岩製の石皿である。

195・196は木器である。195は陽物形の木製品か。両端部に加工が認められ、全体の2/3程には自然面を残している。全長63.2cm、径4cm程を測る。196は建築材から転用した杭である。全長170cm、径15cm程を測る。先端部以外は自然面を残すが、長さ26cm、幅8cm程のほぞ穴を有する。

197～201は016C出土である。197は上げ底の底部、198は端部全面に刻みを有する如意形口縁部である。199は内面に粘土帯を貼付し肥厚させる。200は丹塗り土器である。二条の突帯が残っている。201は石包丁である。孔芯間は2.6cmを測る。



第35図 SD017断面図及び出土遺物実測図1 (1/30、1/3)

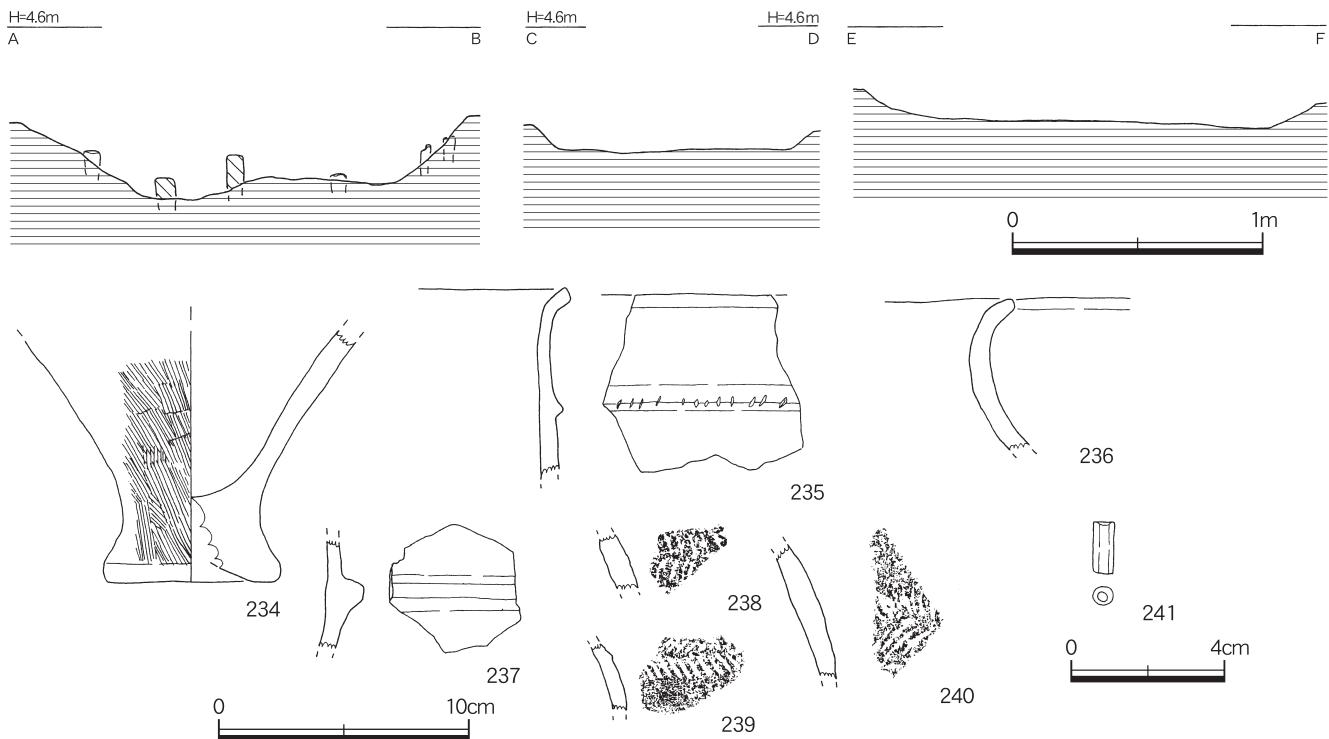


第36図 SD017出土遺物実測図2 (1/3)

SD017 (第35図、写真85)

3区で検出する。調査区の東側緩斜面上に掘削されており、埋土上面に暗褐色土の斜面包含層が堆積している。東壁は調査区外であるが、壁は斜めに掘り下げられ、底面はほぼ平坦となり、断面逆台形になるものと考えられる。埋土は黒色粘質土で、粗砂等の混入は見られない。遺物はコンテナ9箱出土し、弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる土器片、砥石・石包丁・片刃石斧・黒曜石剥片等が出土している。

出土遺物（第35・36図） 202～209は底部破片である。裾が外側に張り出す上部と平底が存在する。210・211は口縁部断面が三角形を呈する甕の破片である。211には胴部に突帯を貼り付ける。212～218は如意形口縁である。胴部に突帯を貼り付けたものや沈線を刻んだものが主体を占めている。219は粘土帯を貼り付けた甕の口縁部である。220は口縁端部を面取りし、外方に開いている。内外面にはミガキが残る。221は丹塗り土器である。上面からの混入の可能性が高い。222～228は施文された小型甕の胴部である。原体にはヘラ状工具によるもの（222・224・225）と貝殻によるもの（223・226・227・228）がある。229・230は石包丁である。231・232は砥石、233は花崗岩製



第37図 SD021断面図及び出土遺物実測図（1／30、241は1／2、その他は1／3）

の凹石である。

SD021（第37図）

3区で検出する。幅1.7m、深さは10~30cmを測り、断面は浅皿状を呈する。埋土は灰褐色土で、直線的に伸びた北西端は立ち上がる。SD016と切り合う南端は30cmほどと深くなりこの部分には杭が打ち込まれている。出土遺物は埋土や生木状の杭残存状況及びSD034との類似性から、本溝は中世以降に位置付けられるものと考えられる。

出土遺物（第37図） 234は厚手の上げ底で、裾は外側に張り出す。235は突帯を有する如意形口縁である。236は壺の口縁部である。237は断面「コ」字形の突帯を有する胴部破片である。238~240は壺の胴部である。240は貝殻施文で、ほかはヘラ状工具による。241は碧玉製の管玉である。

SD034（第38図、写真87）

4区で検出する。幅2.1m、深さ10~20cmを測り、断面は浅皿状を呈する。埋土は上層が暗灰色土、下層が暗褐色土である。床面はSK044を境として南側は平坦で、北側は歩行痕跡状の細かな凹凸が著しく、底面は非常に荒れている。方位・形状がSD021に類似しており、出土遺物から中世以降の水田に伴う一部施設の可能性を考えられる。

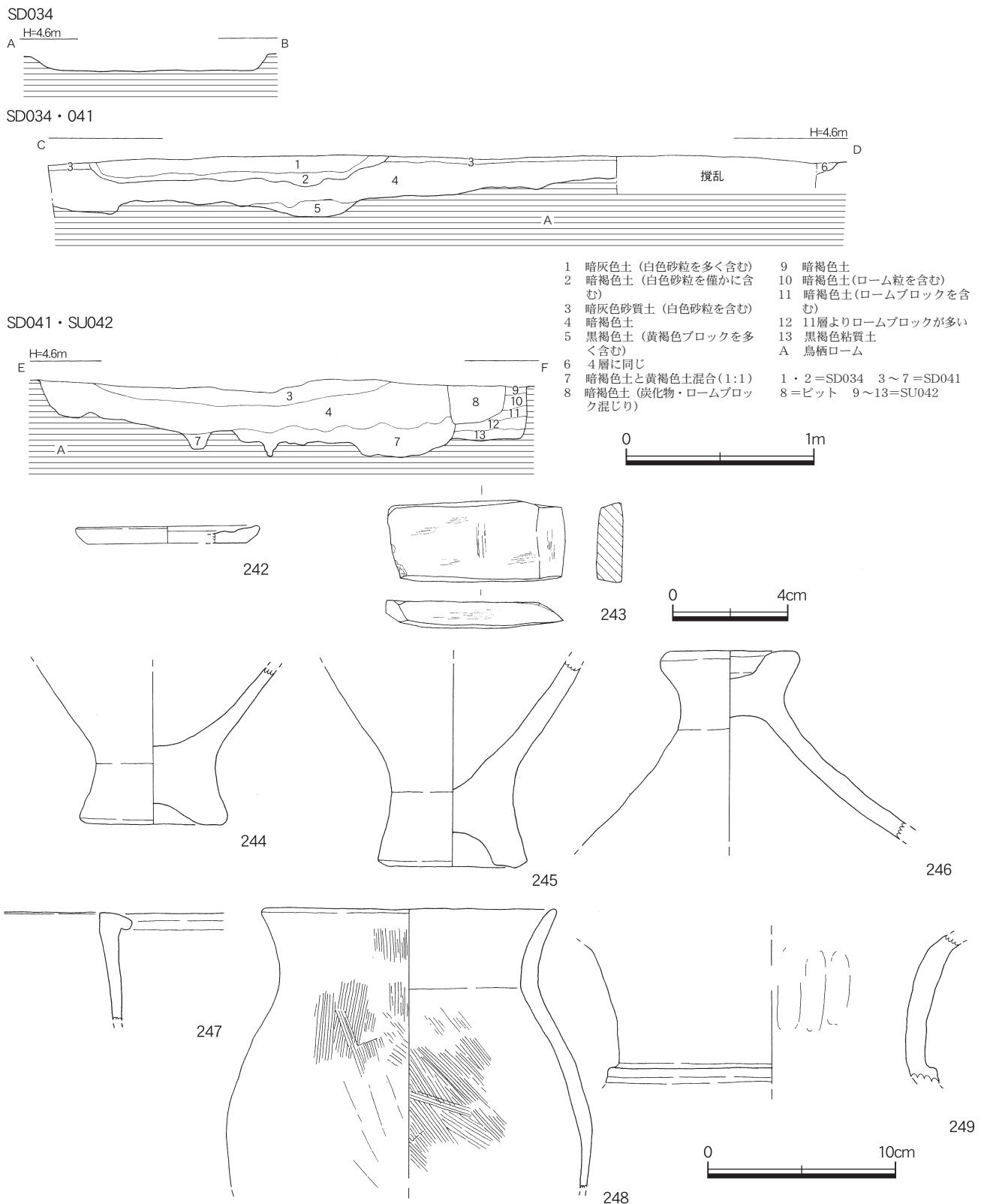
出土遺物（第38図 242・243） 242は摩滅が進んでいるが、ヘラ切りの土師器皿である。243シルト質岩の片刃石斧である。また、図示していないが、スサ入りの壁体が1点出土している。

SD041（第38図、写真86~88）

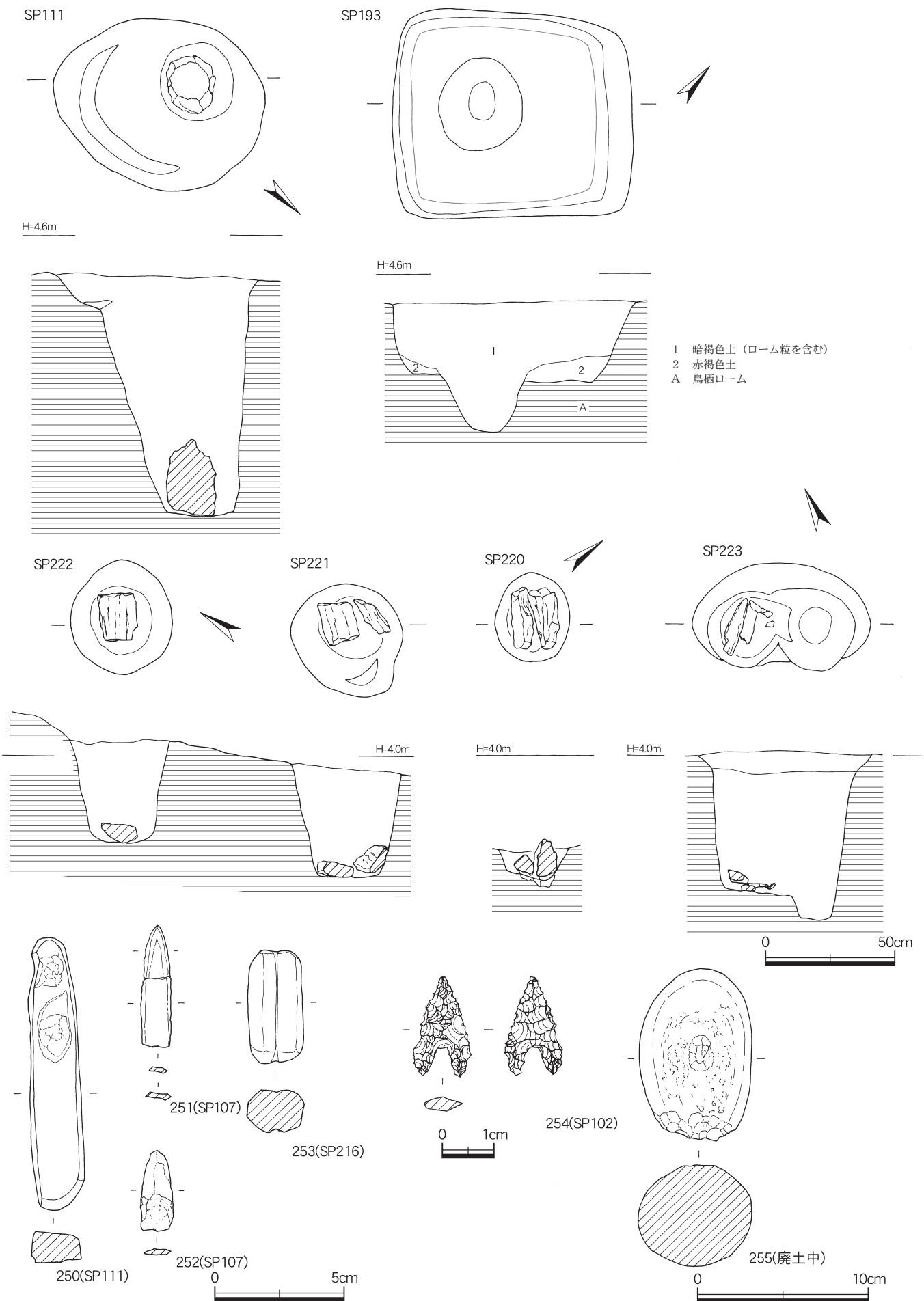
4区で検出し、西側の第114次調査SD03の東側延長部分に当たる。SC043・SU042を切る。東側に大きな搅乱があり形状がやや不明瞭となるが、幅3m、本調査区内での長さ5.7mを測り、北側は明瞭に立ち上がる。隅丸長方形状の均整の取れた掘り方である。底面は全体に凹凸が多く存在し、低くなった部分には埋め戻し状の混合土が堆積している。埋土は上層に暗灰色砂質土、下層が暗褐色土である。出土遺物の主体は弥生時代中期初頭前後の土器片であるが、中期後半~後期の遺物も少量

出土している。第114次調査はSD03は出土遺物から弥生時代終末～古墳時代前期に位置付けられており、本来この時期まで下るものと考えられる。

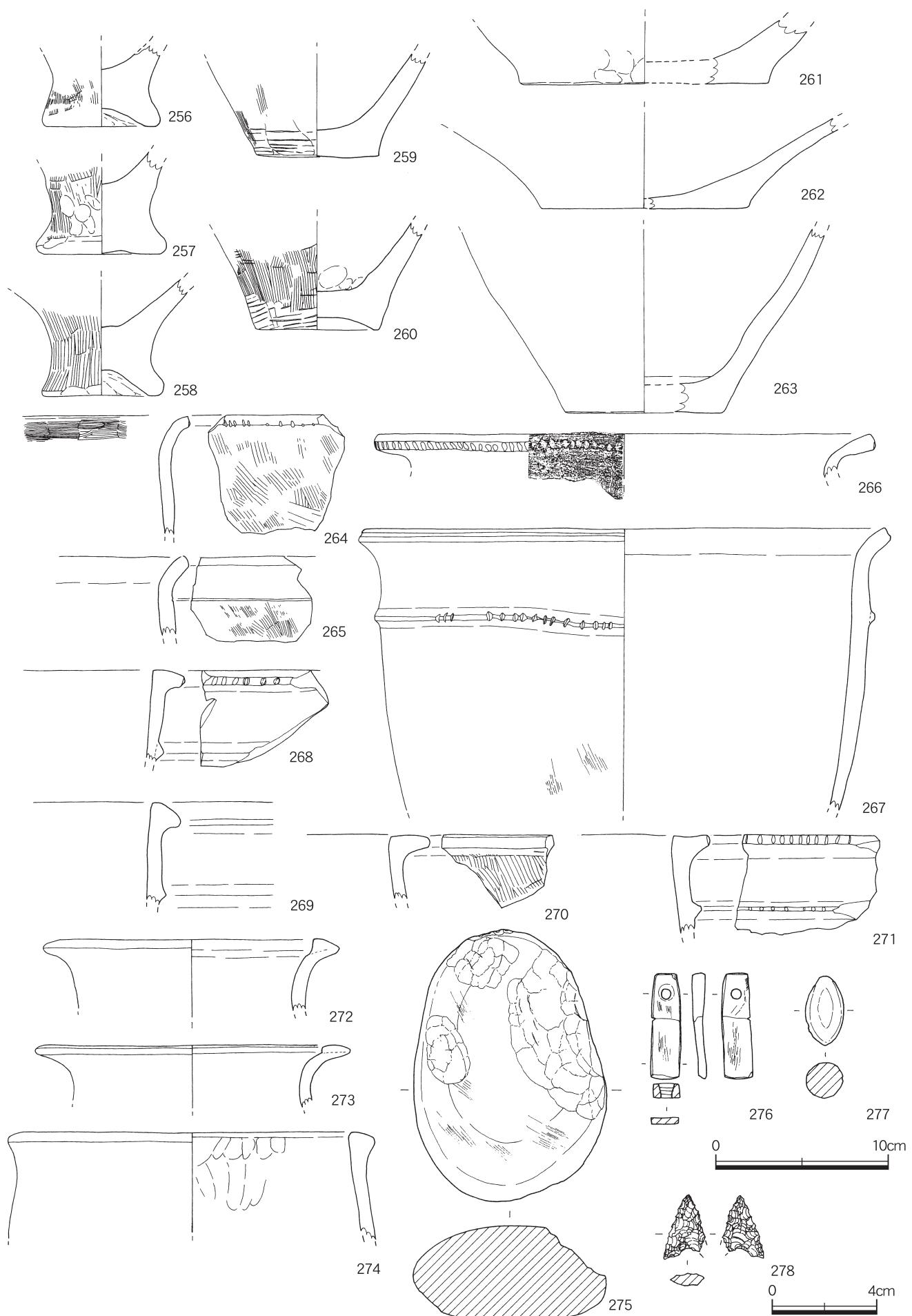
出土遺物（第38図 244～249） 244・245は厚手の上げ底である。246は蓋である。247は断面三角形を呈する甕の口縁部である。248は甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く納める。



第38図 SD034・041断面図及び出土遺物実測図 (1/30, 243は1/2, その他は1/3)



第39図 ピット及び出土遺物実測図 (1/20、254は1/1、250~253は1/2、255は1/3)



第40図 包含層出土遺物実測図 (278は1/2、その他は1/3)

胴部外面は上半縦刷毛、下半はヘラナデを行う。また、内面には刷毛目が残る。249は壺の頸部である。外面屈曲部には断面三角形の突帯を貼り付けている。

7) ピット及びその他の遺物（第39図、写真89～91）

今回の調査では多くのピットを検出したが、建物としてまとめることはできなかった。また、ピット出土の遺物は弥生時代前期中頃～中期初頭に位置付けられるものが大半を占めており、この時期を主体とした生活遺構の展開が考えられる。

SP111は1区で検出した。暗褐色土を埋土とし、径15cm程度の柱材が残存していた。遺物としては弥生時代前期末頃の土器小破片と砥石（250）が出土している。250は頁岩製の砥石で、4面を砥面としている。SP193は2区で検出した。掘り方は一辺80cm程の隅丸方形を呈し、深さは30cmを測る。中央に柱埋設用の掘りこみが認められるが、土層で痕跡は認められなかつた。隣接する114次調査において、類似するピットが存在するが、建物として展開するまでに至っていない。弥生時代前期～中期前半に収まるものと推定できる土器小破片が出土している。SP220～223は2区SD016内で検出する。いずれも底面に礎板を据えている。埋土はいずれも上層1／3ほどはSD016に起因する粗砂、以下は黒色粘質土である。位置的な関係から一連の遺構を構成するピットである可能性が高く、底面のレベルもほぼ揃っている。礎板以外には出土遺物はなく、時期は不明である。

251～254はその他のピット出土遺物である。251・252は磨製の石鏸である。剥落部分が接合しないが、同一個体の可能性がある。253は砂岩製の石錘、254は黒曜石製の石鏸である。また、255は廃土中から採集した花崗岩製の敲き石である。

8) 包含層

調査区東側は緩斜面をなし、その上面には暗褐色土及び黒褐色土の包含層が形成されている（第5図参照）。本調査区内では明瞭に分別することはできなかつたが、包含層上面から掘り込む遺構（SD016）、包含層上層の暗褐色土形成以前の遺構（SD017）があるが、全体に斜面にかかると遺構は少なくなるようである。この斜面は丘陵内の谷部を形成しており、近接する24・25・32・80次調査ではこの谷部堆積層の調査が行われている。この結果、本調査区の黒褐色土に相当する堆積層の形成はおおよそ弥生時代中期初頭頃と考えられる。

出土遺物（第40図 256～278） 257、258～261、265、267、269、270、273、278は1区南東隅の谷部黒色土層から出土した遺物である。一部新しいものも含まれるが、時期的にはほぼ中期初頭までに納まるものと考えられる。その他の遺物は上層暗褐色土出土である。石器は275は花崗岩製で擦痕が認められる。276は手持ちの砥石、277は土製投弾、278は黒曜石製石鏸である。

9) 小結

今回の調査では弥生時代前期中頃～中期初頭の生活遺構を中心とした遺構群を主体として検出した。竪穴住居跡（11棟）、貯蔵穴（10基）、土坑、ピット等から出土する遺物の大半はこの時期にあたるものであり、周辺で調査されているように、東側に存在する谷部から出土する多量の遺物からも、丘陵北端部における遺構のピークがこの時期にあることは確認できる。また谷部が埋没した古墳時代前期には水路としてSD016が掘削され、この溝は丘陵北端部を南北方向に貫流するものと考えられる。埋土に多量の粗砂が堆積していることは、同時期の河川跡である32次調査SD014にも認められるところであり、この時期の氾濫により、広範囲に河川・水路の埋没が起こったものと考えられる。また、注目される遺構として、立柱遺構（SK004）がある。出土遺物が少量であるため、時期は明確にしがたいが、遺構の形態・柱の立て方など比恵36次調査立柱遺構に類似している。埋葬遺構に伴うとすれば、南隣の第4次調査検出の甕棺遺構に伴う可能性も考えられるが、今後の類例の増加を待ちたい。



写真4 1区全景（南西から）



写真5 2区全景（南から）



写真6 3区全景（南西から）



写真7 4区全景（北東から）



写真8 調査区南壁土層



写真9 谷部土層



写真10 SC001（東から）



写真11 SC002（北東から）



写真12 SC009（北から）



写真13 SC010（北西から）



写真14 SC012（西から）



写真15 SC015（北西から）



写真16 SC020（東から）



写真17 4区検出SC030（南西から）

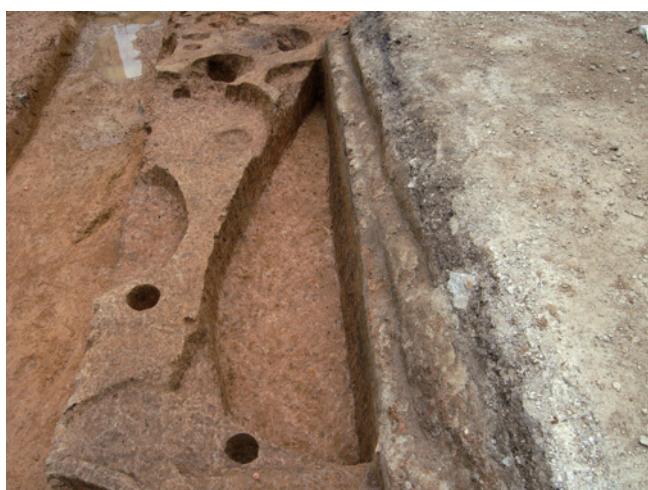


写真18 3区検出SC030（北西から）



写真19 SC030土層



写真20 SC030 P1 (南西から)



写真21 SC030 P2 土層



写真22 SC037 (北から)



写真23 SC037、SU038・045土層



写真24 SC039 (北西から)



写真25 SC043 (北東から)



写真26 SU011（南西から）



写真27 SU011土層



写真28 SU019（北東から）



写真29 SU019土層



写真30 4区検出SU025（南西から）



写真31 SU025・040土層



写真32 SU036土層



写真33 SU038（北から）



写真34 SU038炭化米出土状況（北西から）



写真35 SU038壁面被熱痕跡



写真36 SU038土層



写真37 SU038 11層



写真38 SU040（北東から）



写真39 SU042（南東から）



写真40 SU045（北東から）



写真41 SU038・045土層



写真42 SU048（北から）



写真43 SU049（南から）



写真44 SE024（西から）



写真45 SE024土層



写真46 SK003（南から）



写真47 SK003土層



写真48 SK004西側土層



写真49 SK004土層



写真50 SK004立柱出土状況（北から）



写真51 SK004（北から）



写真52 SK004（東から）



写真53 SK004立柱状況（南から）



写真54 SK004立柱1



写真55 SK004立柱2



写真56 SK008（北西から）



写真57 SK014（東から）



写真58 SK018（北西から）



写真59 SK026～029・031（北から）



写真60 SK026（西から）



写真61 SK026土層



写真62 SK027（北東から）



写真63 SK028（北東から）



写真64 SK029（北東から）



写真65 SK031（西から）



写真66 SK032（西から）



写真67 SK033（南西から）



写真68 SK035（南西から）



写真69 SK044（南東から）



写真70 SD022・023（北から）



写真71 SD050・051・052（南西から）



写真72 SD005（北から）



写真73 SD006（西から）



写真74 SD007（南東から）



写真75 SD016（北西から）



写真76 SD016西壁土層



写真77 SD016中央土層



写真78 SD016南西半掘削後（南西から）



写真79 SD016南西半掘削後（東から）



写真80 SD016北東半（西から）

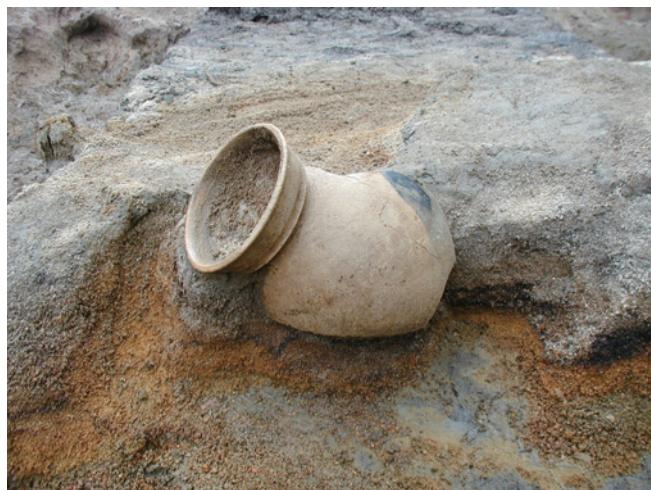


写真81 SD016遺物出土状況（153）



写真82 SD016遺物出土状況（156）



写真83 SD016遺物出土状況（195）



写真84 SD016遺物出土状況（196）



写真85 SD017（北西から）



写真86 SD041（南から）



写真87 SD034・041土層



写真88 SD041・SU042土層



写真89 SP220（北西から）



写真90 SP221（南西から）



写真91 SP222（北西から）

書名ふりがな ひえ58
書名 比恵58
副書名 比恵遺跡群第115次調査報告
巻次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1097集
編著者名 長家伸
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 201000323
作成法人 I D
郵便番号 810-8621
電話番号 092-711-4667
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな ひえいせきぐん
遺跡名 比恵遺跡群
所在地ふりがな ふくおかしさかたくはかたえきみなみ3ちょうめ60ばんほか10ひつ
遺跡所在地 福岡市博多区博多駅南3丁目60番ほか10筆
市町村コード 40132
北緯 33度34分57秒（世界測地系）
東経 130度25分36秒（世界測地系）
調査期間 080702～081002
調査面積 755m²
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 弥生・古墳時代
遺跡概要 比恵遺跡群北端部の調査である。弥生時代前期中頃～中期初頭の竪穴住居跡、貯蔵穴、土坑を中心とした生活遺構が濃密に展開し、古墳時代前期には水路が掘削されている。注目される遺構としては立柱遺構があげられる。出土遺物からは弥生時代前期末に位置付けられ、埋葬遺構に伴うとすれば、隣接する調査区において検出された中期の甕棺墓群に関連する可能性もある。

特記事項

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1097集

比 恵 58

－比恵遺跡群第115次調査報告－

2010年（平成22年）3月23日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1印 刷 陽文社印刷株式会社
福岡市南区大楠2丁目4-10

